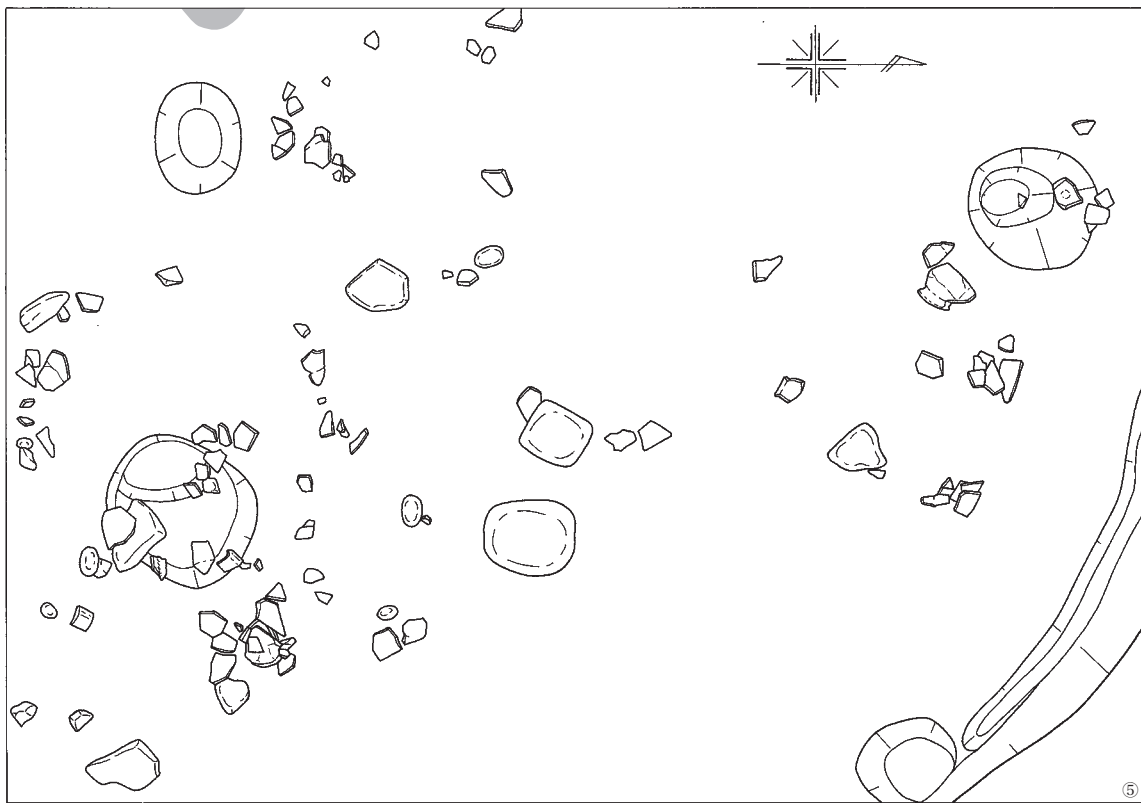
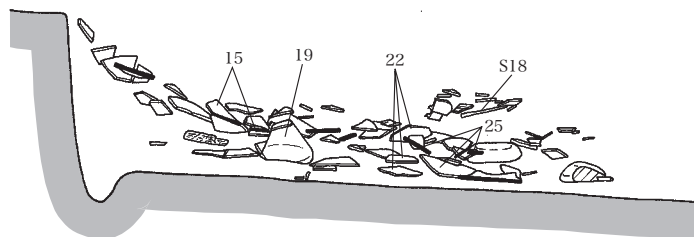


第16図 SI4 (1)



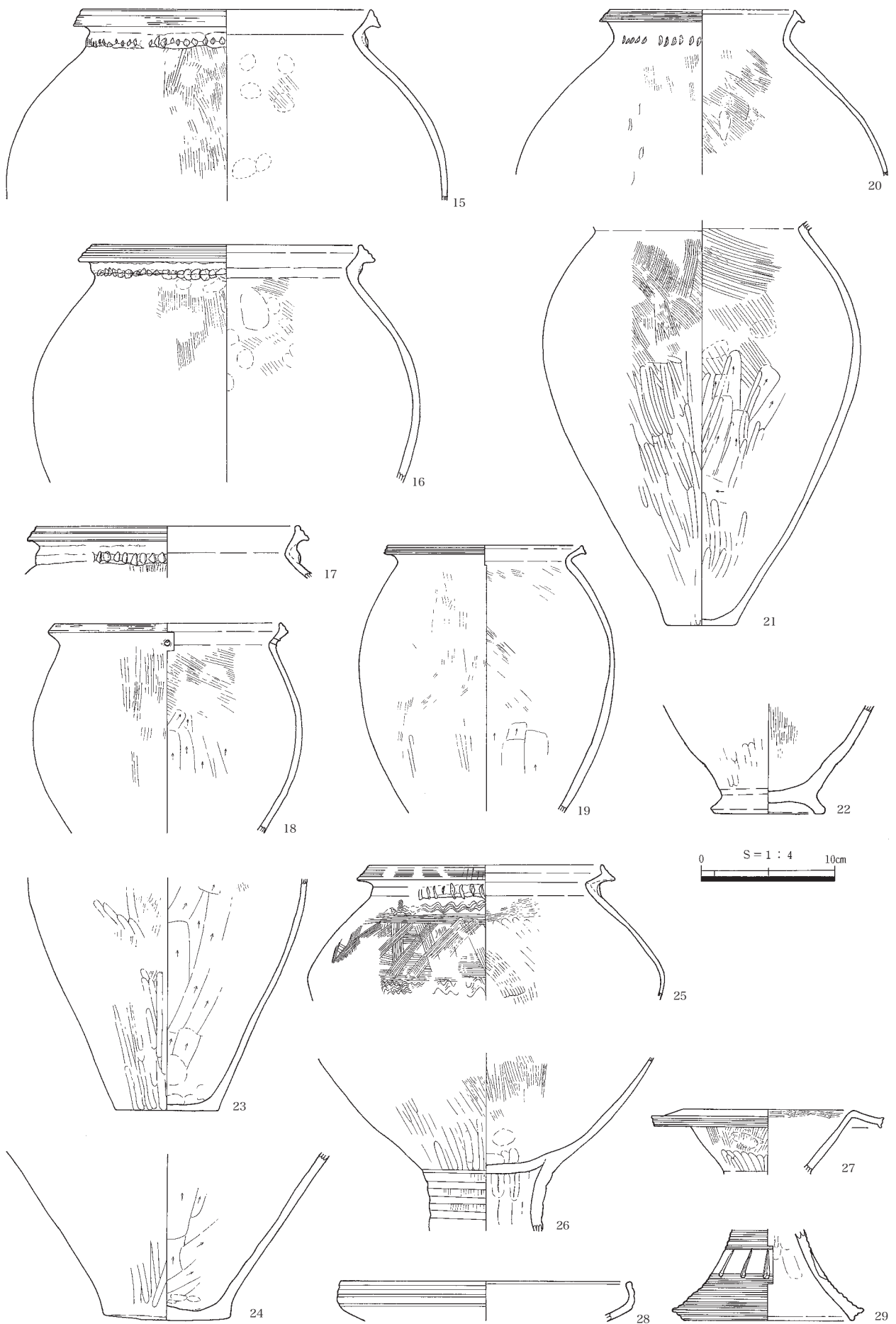
54.1m
E

E'

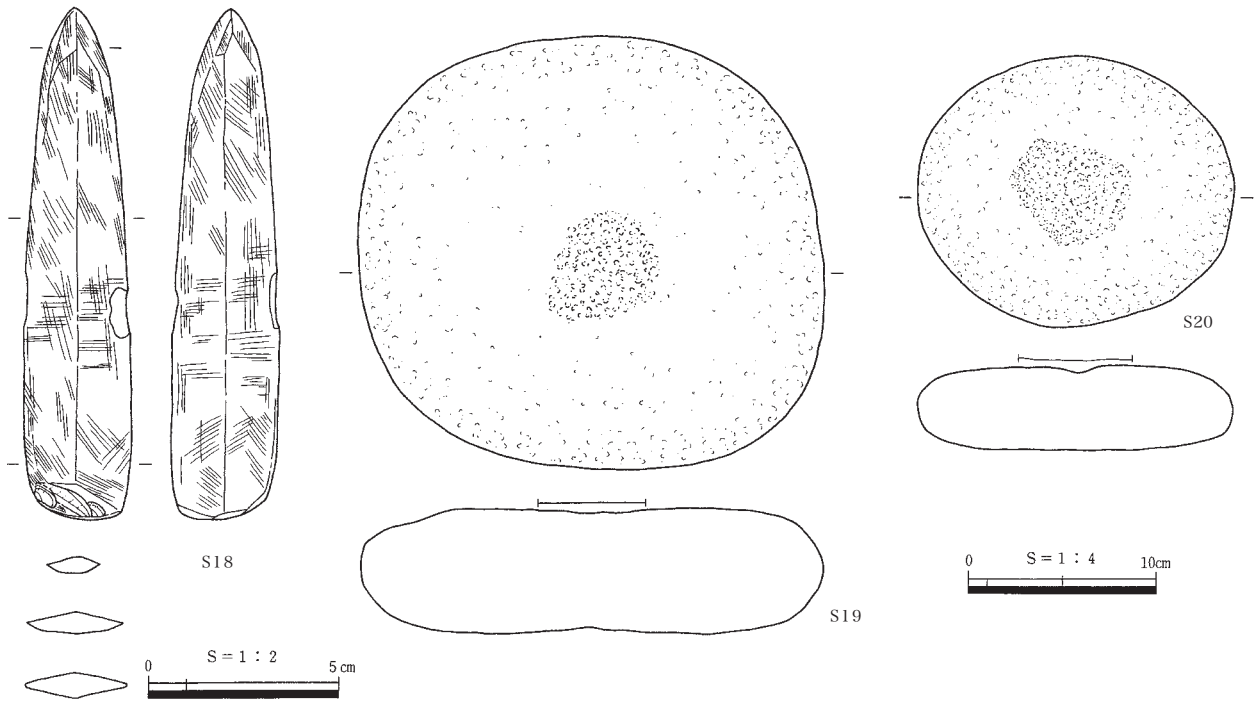


0 S = 1 : 20 50cm

第17図 S14 (2)



第18図 SI4出土遺物 (1)



第19図 S14出土遺物（2）

側だけに確認できた。北西壁には認められない。断面形はU字状で、床面からの深さは約4 cmである。貼床は確認されなかった。

主柱穴はP1～4、中央ピットはP5である。P6は北東壁面の直下であり、その位置から補助柱穴と考えられる。P7はP2とP5の中ほどにあり、補助柱穴もしくはP5に付随する構造物の一部の可能性を考える。主柱穴間距離は、P1-P2の順に2.3 m、2.6 m、2.2 m、2.5 mを測り、向かい合う桁間がそろうようになっている。

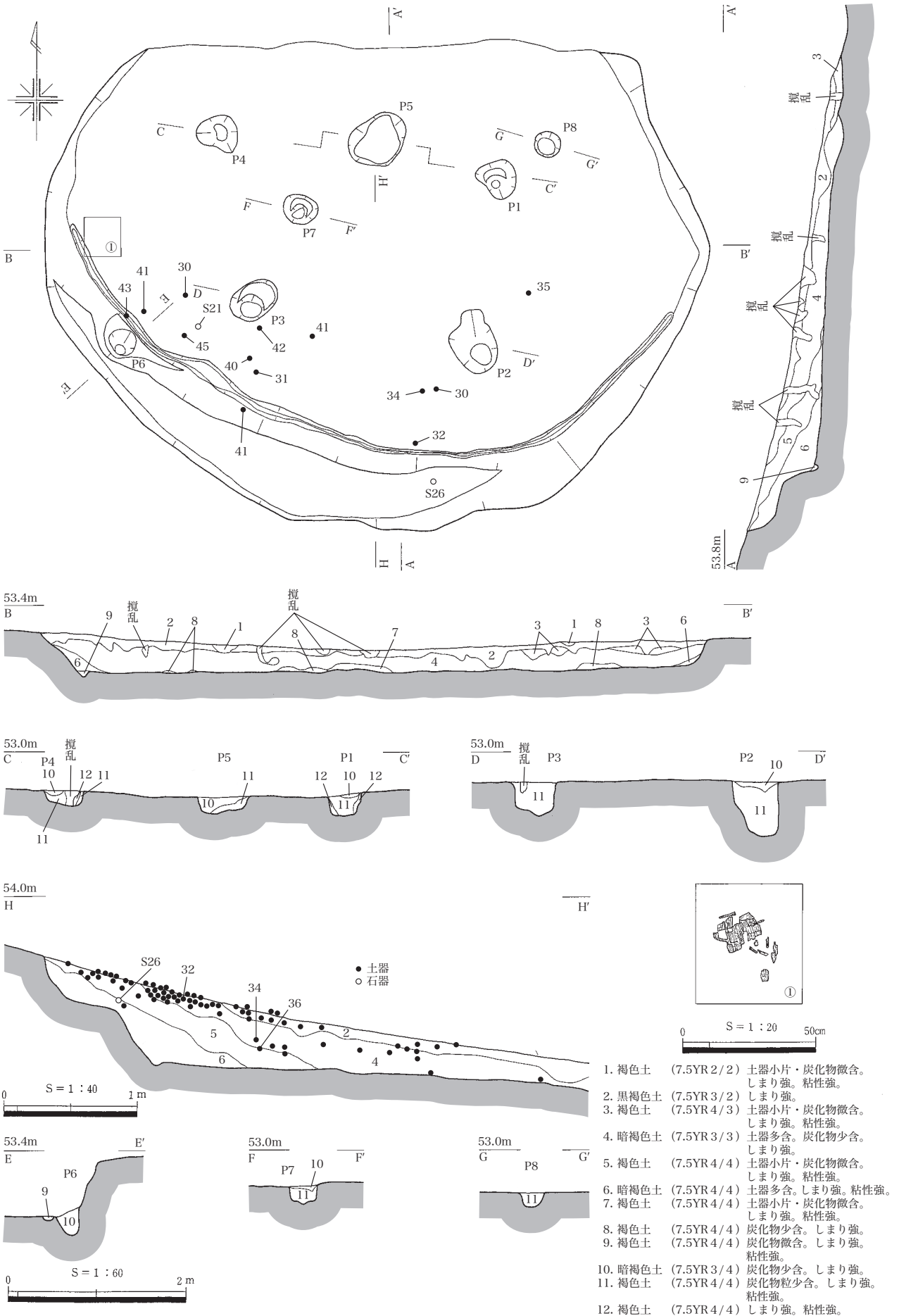
埋土と遺物の出土状況 埋土は主にⅡ層に似た暗褐色土からなり、炭化物と共に多量の遺物を含む。遺物は特に2層、5層、8層に多く含まれ、南側の傾斜の高い側から竪穴の中央付近にかけまとまって見られる。埋土の堆積に沿って南壁から竪穴の中央に流れ込むように出土している。北側は遺物が希薄である。このことから、住居が廃棄され、埋没が始まった頃から遺物の投棄が始まり、埋没途中にも窪地状になったところへ南側から投げ入れられた様子を窺うことができる。ある一定の期間、投棄する行為が続けられていたことが推察される。また遺物の中で注目すべきは磨製石剣が完形で2層中から出土していることである。

遺物の大半は土器片の様子から甕であると思われるが、中には大型の壺と考えられるものも含まれている。また、これらの土器に混じって遺存状態は良くないものの棒状もしくは板状の炭化材も数点見られた。また、集落内で祭祀具として用いられたと考えられる磨製石剣という特異な物も含まれている。祭祀行為の内容までは明確に指摘することはできないが、遺物は煮炊きに使用される甕が主であり、炭化材も認められることから、共同炊餐を行う祭祀行為後、それに供された土器と共に祭祀具を廃棄したと推測する。

出土遺物 15～22、25は甕である。この内、15～17、25は口縁部に2～3条の凹線が施され、頸部に指頭圧痕もしくは刺突による刻目のある貼付突帯を持つ。22は胴外面下部に煤の付着と二次的

表5 S14ピット一覧表

P番号	長軸×短軸—深さ (cm)
P 1	35 × 33 — 56
P 2	40 × 34 — 20
P 3	62 × 48 — 42
P 4	41 × 36 — 45
P 5	65 × 50 — 26
P 6	25 × 20 — 13
P 7	28 × 21 — 26

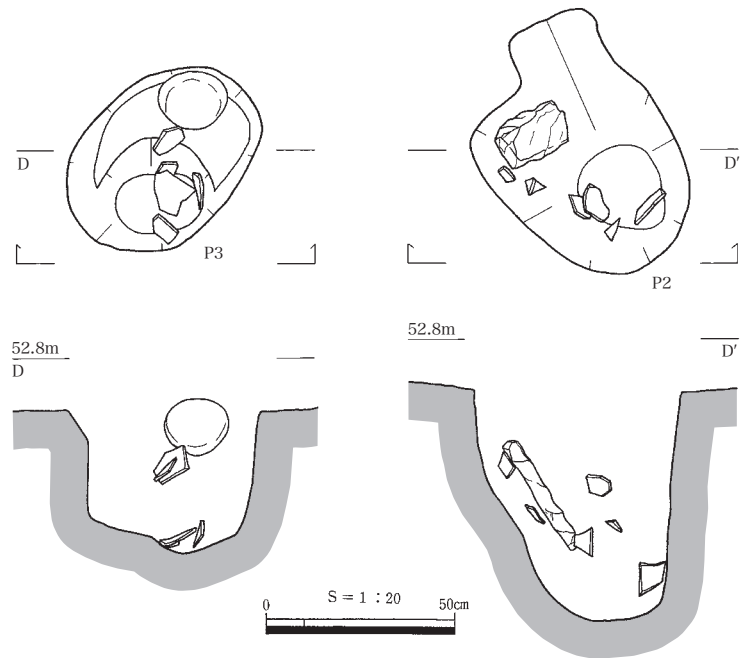


第20図 SI5 (1)

な被熱によるものと思われる剥離痕が認められる。26～29は高坏である。29は凹線間に貫通しない三角形透孔を持つ。磨製石剣S18は粘板岩(千枚岩)からなるもので、鑑定の結果在地の石材ではないことが判明した。製品として持ち込まれた可能性も考えられる。

時期 埋土中出土土器はIV-1様式に比定されることから、弥生時代中期後葉に廃絶されたものと推定される。

(浅田)



第21図 S15 (2)

S15 (第20～23図、表6、PL.5・6)

位置 D7～8およびE7～8グリッド、

標高52.5～54.5mの谷の開口に面した斜面地に位置する。

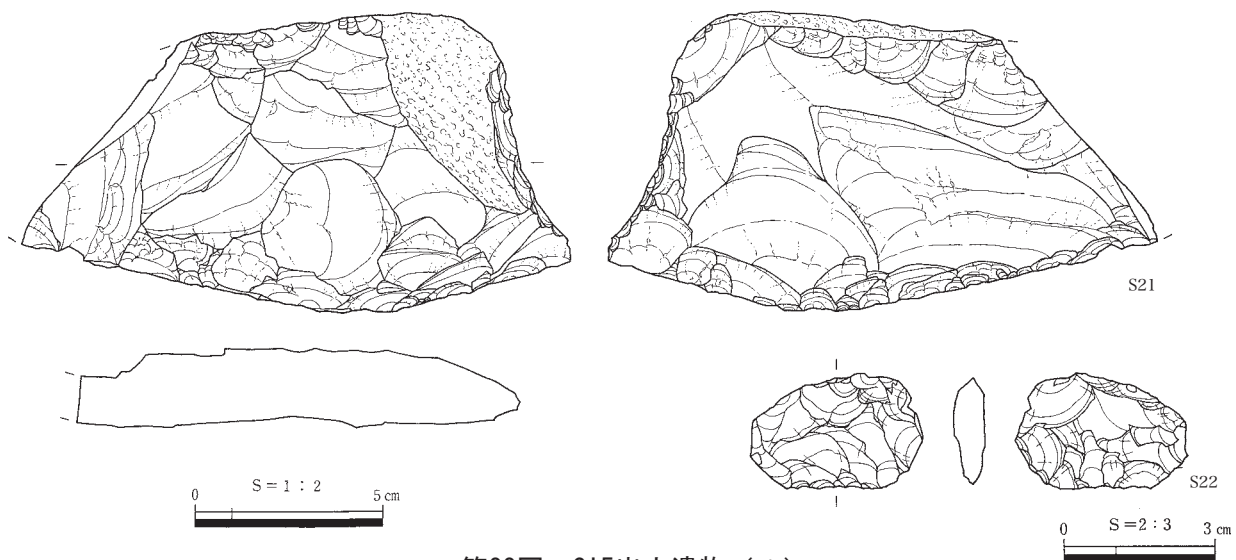
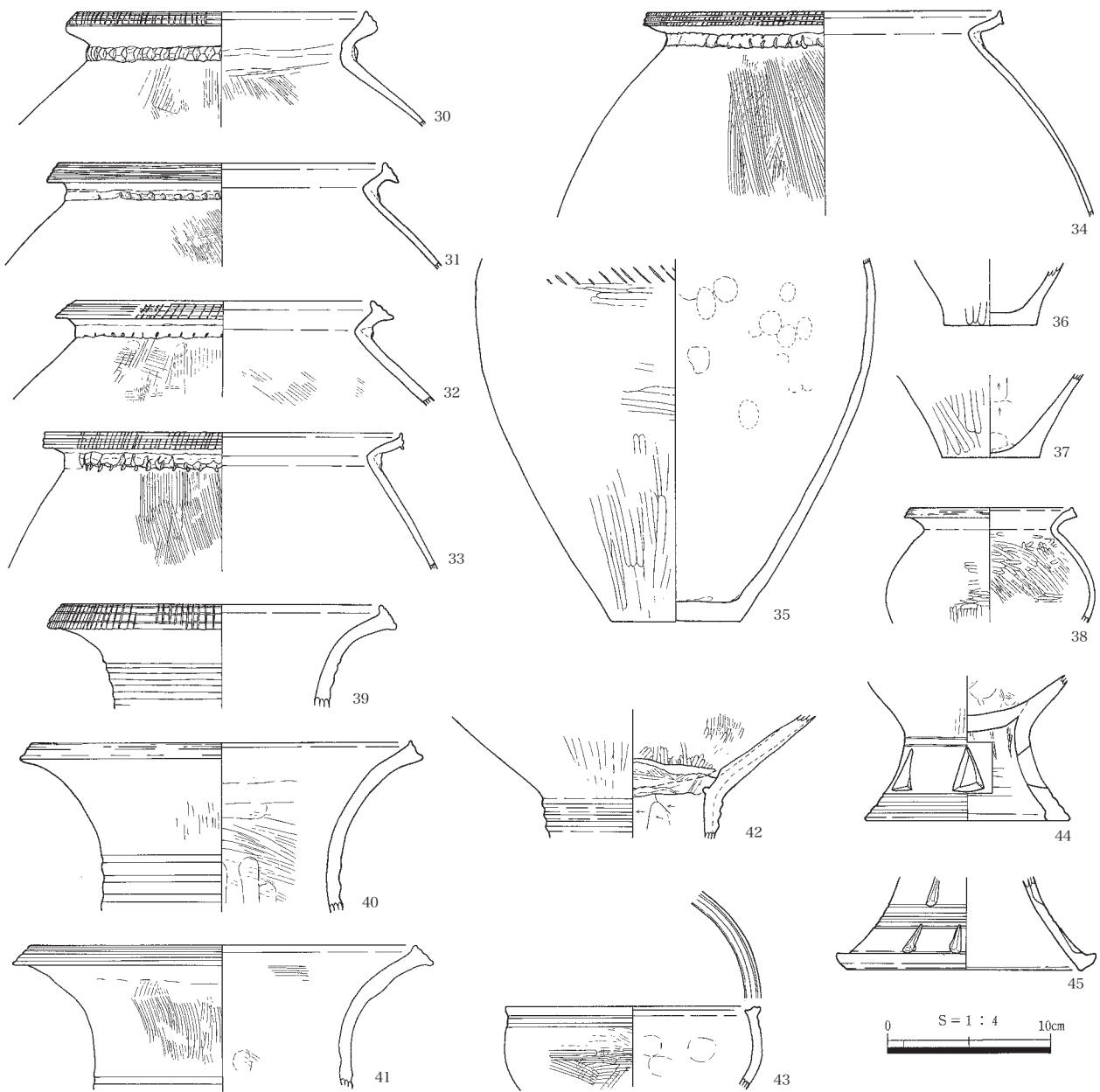
調査の経過 II層を除去したところで炭化物粒子と土器片を多く含む暗褐色土の円形プランを検出した。サブトレンチ(A-A'・B-B')により、壁面の立ち上がりを確認し、竪穴状の遺構と判断して調査を行った。

規模と形態 平面形は東西7.5m、南北5.4mのやや潰れたような六角形を呈する。床面積は約25.8㎡である。壁高は南側で最も高く、最大80cmを測る。東西側の壁面は谷地形に沿い北側向かってしだいに浅くなり、北側では開口シテラス状を呈する。竪穴はIV層を床面とする。

床面において壁溝、ピット7基、南西側壁面下部にピット1基を確認した。焼土面、貼床は認められなかった。壁溝は全周せず、南壁側の傾斜が高い側だけに確認できた。北側には認められない。壁溝の断面形はU字状で、床面からの深さは約2cmである。ピット中で支柱穴はP1～4である。柱穴間距離はP1-P2の順に1.9m、2.6m、2.0m、3.1mを測る。P2-P3、P3-P4では柱穴間に違いがあるが、桁のラインが互いに平行になるように設けられている。南側に位置するP2、P3は掘り方が深く、それぞれ92cm、63cmを測る。共に埋土中に礫と土器を含む点で共通している。一方北側にあるP1、P4は共に掘り方は浅く、それぞれ32cm、22cmである。P1からは土器小片が3点出土しているが、P4には遺物はみられなかった。P2、P3については礫が遺存していたため、柱の裏込めの可能性を考えたが、各柱穴の土層断面に柱痕が確認できなかったこと、礫の下からも土器が出土していること、またP2においては平面形が一部北側に突出するように広がり、柱を倒しながら抜いた可能性があること、床面遺物が数点しかみられなかったことなどから、柱を抜き去った後で土器や礫を投棄したものと考えた。このような行為が、単なる不用品を投棄した行為なのか、建物の廃絶行為なのかを明確に判断できる確証は得られなかった。しかし、SS1の柱穴では、明らかに柱を抜いた後に土器を柱穴

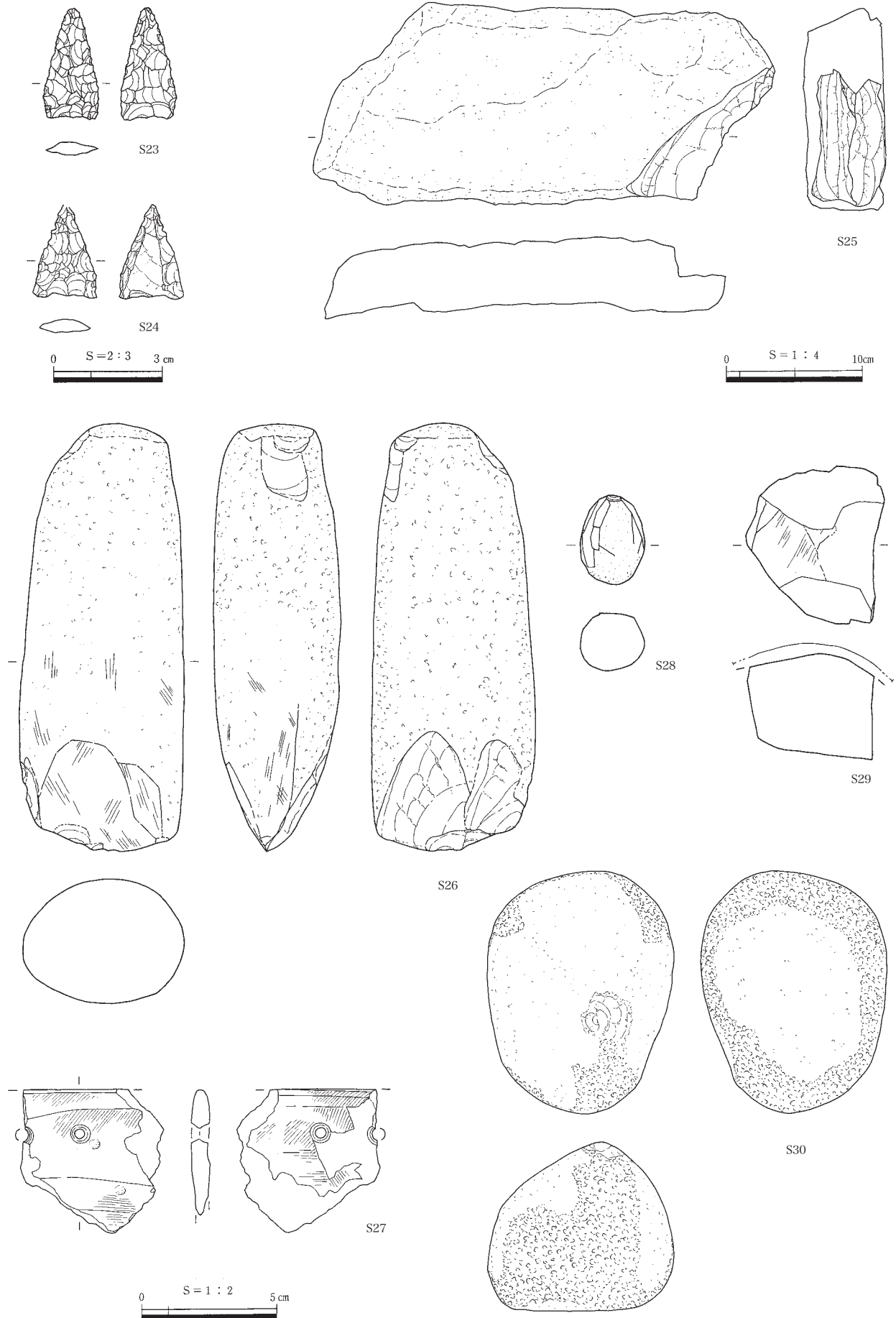
表6 S15ピット一覧表

P番号	長軸×短軸—深さ (cm)
P1	46×42—24
P2	72×48—60
P3	56×40—38
P4	46×38—18
P5	70×52—18
P6	32×28—24
P7	38×34—20
P8	29×28—17

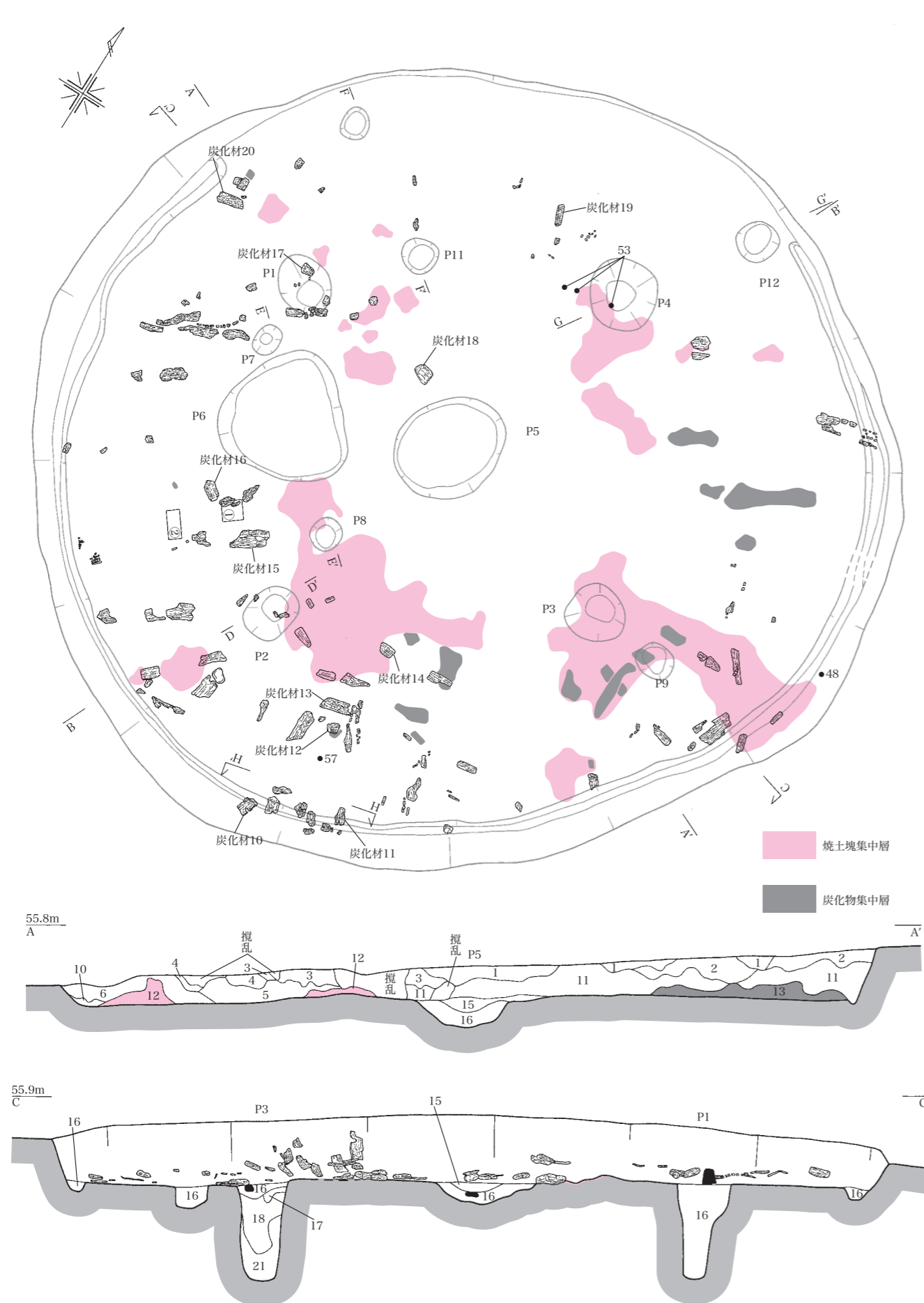


第22図 SI5出土遺物 (1)

第2節 遺構の調査



第23図 S15出土遺物(2)



第24図 SI6 (1)

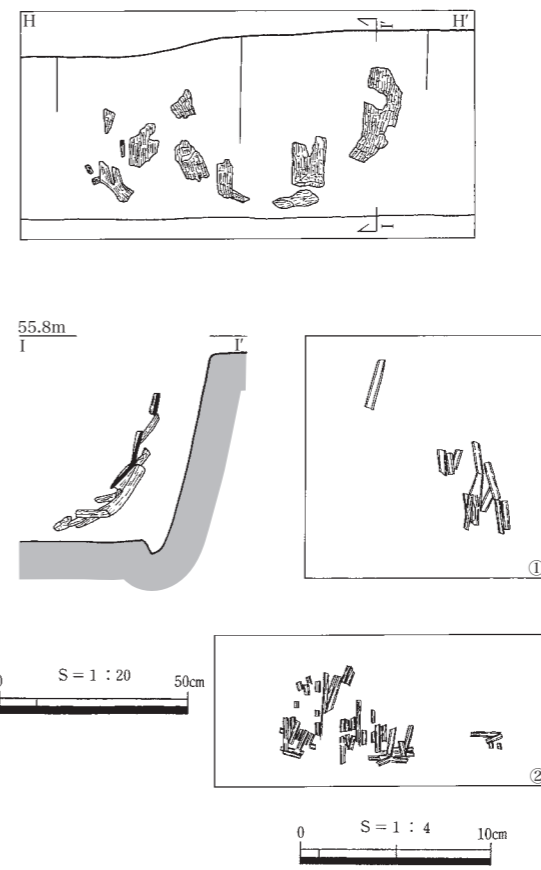
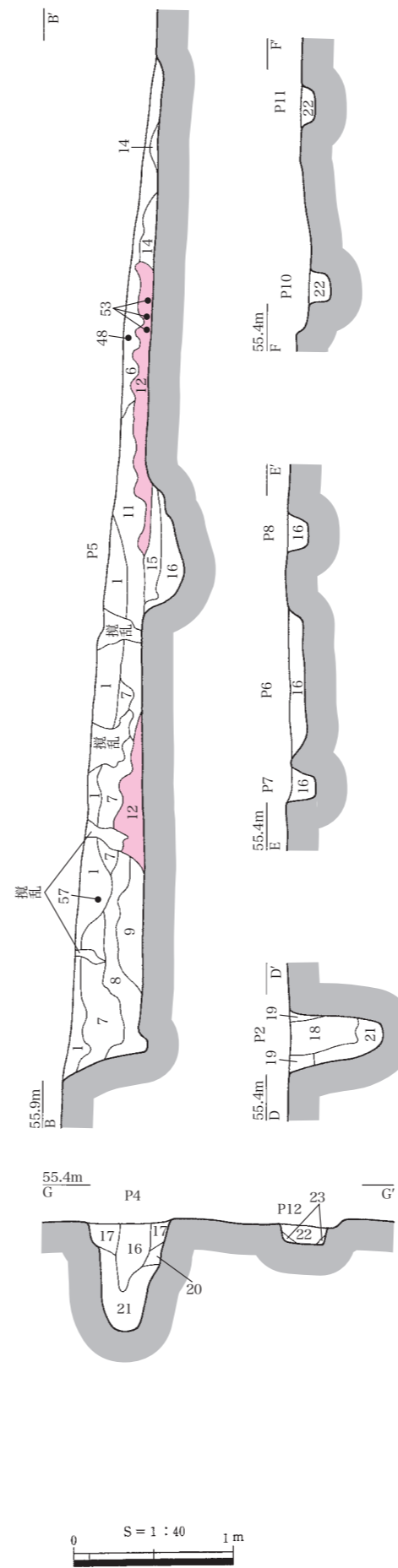


表7 樹種同定結果

炭化材番号	和名	種別	取上No.
10	スダジイ	半截丸太	炭1
11	スダジイ	半截丸太	炭9
12	ニガキ	半截丸太	炭12
13	ツバキ属	半截丸太	炭14
14	スダジイ	半截丸太	炭15
15	スダジイ	半截丸太	炭32
16	スダジイ	丸太	炭33
17	スダジイ	丸太	炭47
18	ツバキ属	丸太	炭50
19	スダジイ	丸太	炭56
20	カラスザンショウ	丸太	炭69

1. 暗褐色土 (10YR3/4) 1cm以下のホーキブロック・炭化物多含。しまり強。粘性強。
2. 明褐色土 (7.5YR4/6) 0.3cm以下の炭化物・焼土粒・ホーキブロック少含。しまり弱。粘性強。
3. 暗褐色土 (7.5YR3/4) 2cm以下の焼土ブロック多含。0.5cm以下の炭化物および炭化材微含。しまり強い。粘性強。
4. 暗褐色土 (7.5YR3/4) 0.5cm以下の焼土粒・炭化物を僅かに含む。しまり弱。粘性強。3より色調明るい。
5. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 2cm以下の焼土塊・炭化物少含。しまり強。粘性強。
6. 褐色土 (7.5YR4/4) 0.5cm以下の炭化物・焼土粒多含。しまり弱。粘性強。
7. 褐色土 (7.5YR4/4) 1cm以下のホーキブロック・炭化物・焼土粒少含。しまり強。粘性強。
8. 褐色土 (7.5YR4/4) 3cm以下の炭化物少含。ホーキブロック・0.5cm以下の炭化物少含。しまり弱。粘性強。6より色調明るい。
9. 明褐色土 (7.5YR4/6) 2cm以下のホーキブロック・炭化物少含。しまり強。粘性強。
10. 褐色土 (7.5YR4/4) 0.3cm以下の焼土粒微含。しまり強。粘性強。
11. 褐色土 (7.5YR4/4) 3cm以下のホーキブロック・炭化物・焼土塊を僅かに含む。しまり強。粘性強。
12. 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土塊集中層。5cm以下の焼土塊多含。2cm以下の炭化物少含。しまり弱。粘性強。
13. 暗褐色土 (10YR3/4) 炭化物集中層。1cm以下の炭化物多含。2cm以下のホーキブロック・焼土塊を少含。しまり弱。粘性強。
14. 褐色土 (7.5YR4/4) 0.3cm以下の焼土粒・炭化物を僅かに含む。しまり弱。粘性強。6より色調暗い。
15. 褐色土 (7.5YR4/4) 1cm以下の炭化物・ホーキブロック多含。0.3mm以下の焼土粒少含。しまり弱。粘性強。
16. 暗褐色土 (10YR3/4) 1cm以下の焼土粒・炭化物多含。2cm以下のホーキ・ホワイトブロック少含。しまり弱。粘性強。
17. 褐色土 (10YR4/6) 1cm大のホーキブロック多含。しまり強。粘性強。
18. 褐色土 (7.5YR4/4) 16層と同じ混在物少含。しまり弱。粘性強。
19. 褐色土 17層に同じハード・ホワイト斑状に混じる。しまり強。
20. 褐色土 (10YR4/6) 0.1cm大の炭化物粒少含。しまり弱。粘性強。17層より色調やや暗い。
21. 褐色土 (10YR4/6) 1cm大のホーキブロック少含。しまり弱。粘性強。
22. 褐色土 (7.5YR4/4) 0.5cm以下の炭化物少含。ホーキブロックが斑状に混じる。しまり弱。粘性強。
23. 明褐色土 (7.5YR5/6) 0.3cm以下のホーキブロック・炭化物微含。しまり強。粘性強。



写真5 SI6垂木痕跡検出状況(西から)

内に入れ、礫で土器を破壊していることが分かるものがあるため、建物を廃棄するに当たり、祭祀的な行為が行われていた可能性が考えられる。

P6は南西壁面下部に設けられている。掘り方から、斜めに柱が立てられていた可能性が考えられる、P3に対する補助的な柱の可能性をあげておきたい。またP7、P8についても掘り方の規模が他のものに比べて小さいことから、支柱の可能性を指摘しておく。P5はP1-P4の中間に位置し、堅穴の中央部より北側に位置しているが、中央ピットとしての機能を想定する。

埋土と遺物の出土状況 埋土は主に暗褐色土と褐色土からなる。土層断面の観察から、南側から北側に向かって堆積していった様子が見て取れ、自然堆積による埋没であることが分かる。遺物は床面上にはわずかにしか見られない。ほとんどの遺物は1～2層中からのものである。堅穴が廃棄され3～4層が堆積した後2層が堆積し始め、遺構が窪地状になり始めた頃から遺物の投棄が行われたものと考えられる。

出土遺物 30～34は甕で、いずれも口縁部に2～4条の凹線が施され、頸部に指頭圧痕もしくは刻目を伴う貼付突帯を持つ。39～42は壺である。39～41は口縁部と頸部に数条の凹線が施される。石器では1層中から楔形石器S22、石鏟S23が出土している。いずれもサヌカイト製である。S21は床面からの出土で、サヌカイトの剥片素材である。S26は伐採石斧である。鑑定により地元の河川から入手できる角閃石安山岩（古期大山の安山岩）であることが判明した。

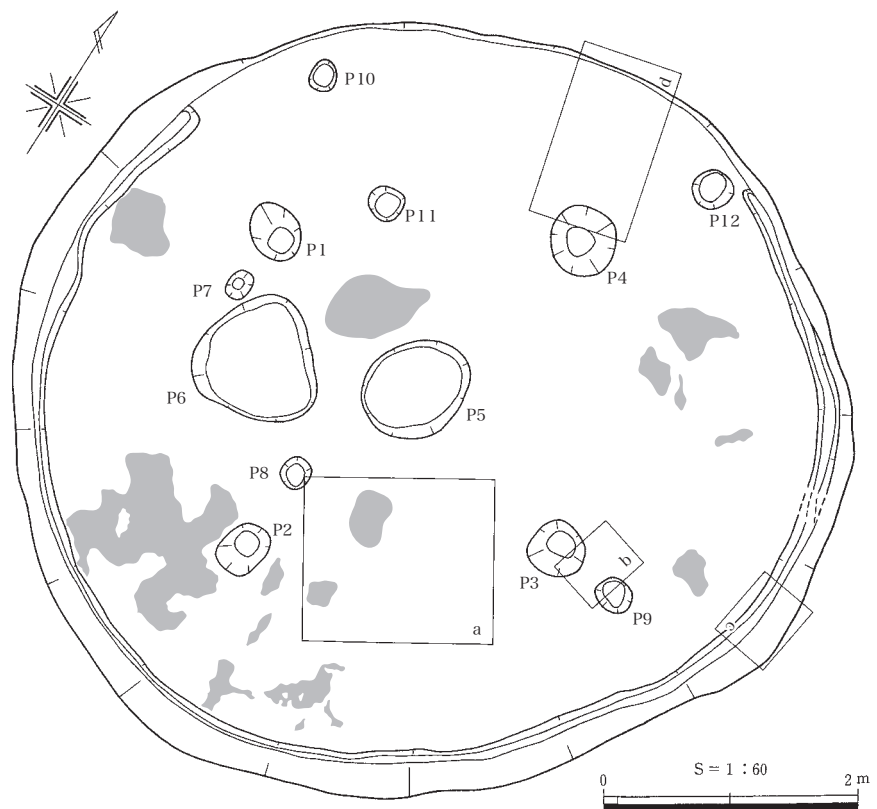
時期 埋土中出土土器の多くがIV-1様式に比定されることから、弥生時代中期後葉には廃絶されていたものと推定される。（浅田）

S16（第24～28図、巻頭図版4～6、文中写真5、表7・8、PL.7・45・61）

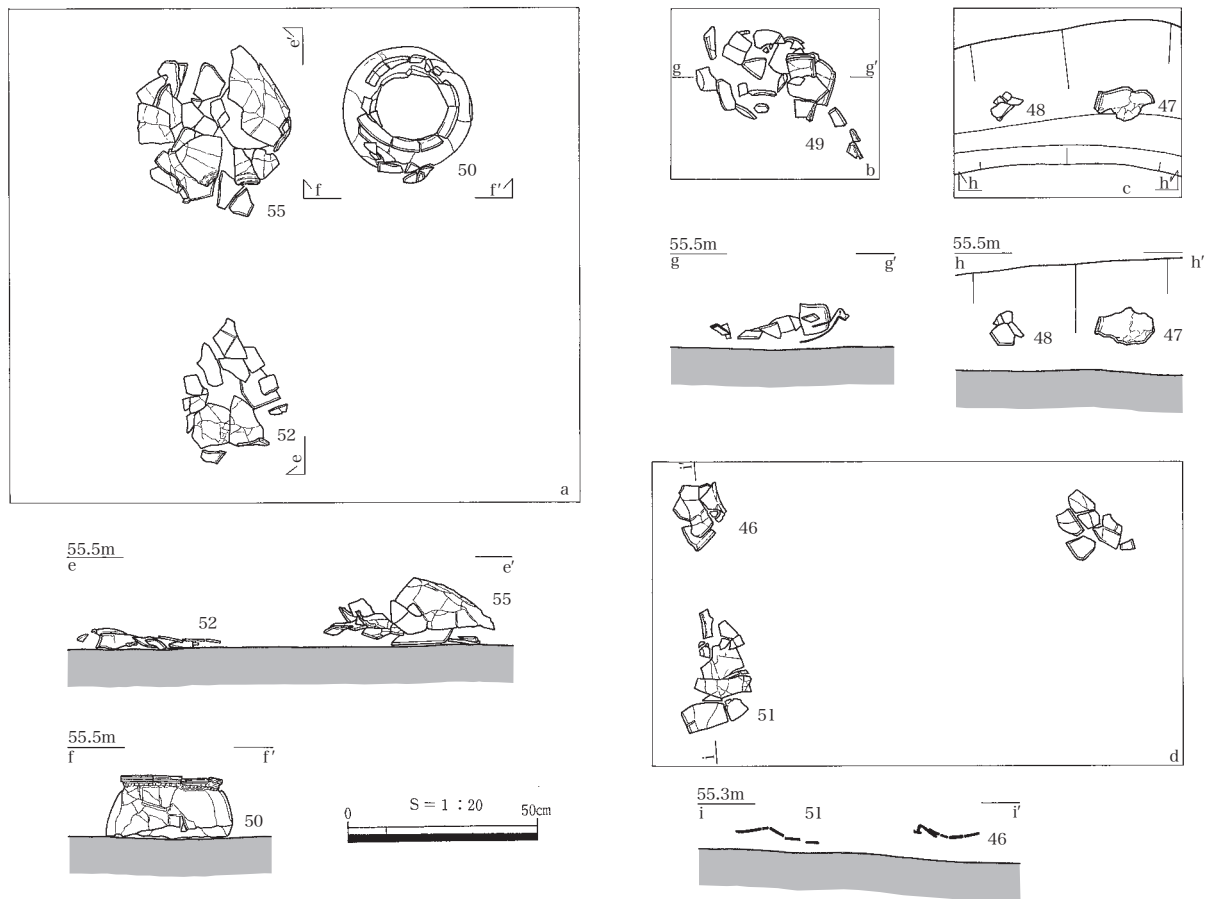
位置 E9・10グリッド、標高55.0～55.7mの緩斜面部に位置し、東側にSI9、北側にSK43・52が隣接する。

調査の経過 E9グリッドにおいてⅢ層上面まで掘り下げを行った際に、少量の土器片を伴う褐色土の広がりを確認した。精査した結果、褐色土のプランは径約7mの円形を呈し、北側の検出面で炭化材片や焼土粒が認められたため、焼失住居を想定して調査に着手した。

規模と形態 平面形は長軸6.6m、短軸6.2mの不整



第25図 S16 (2)

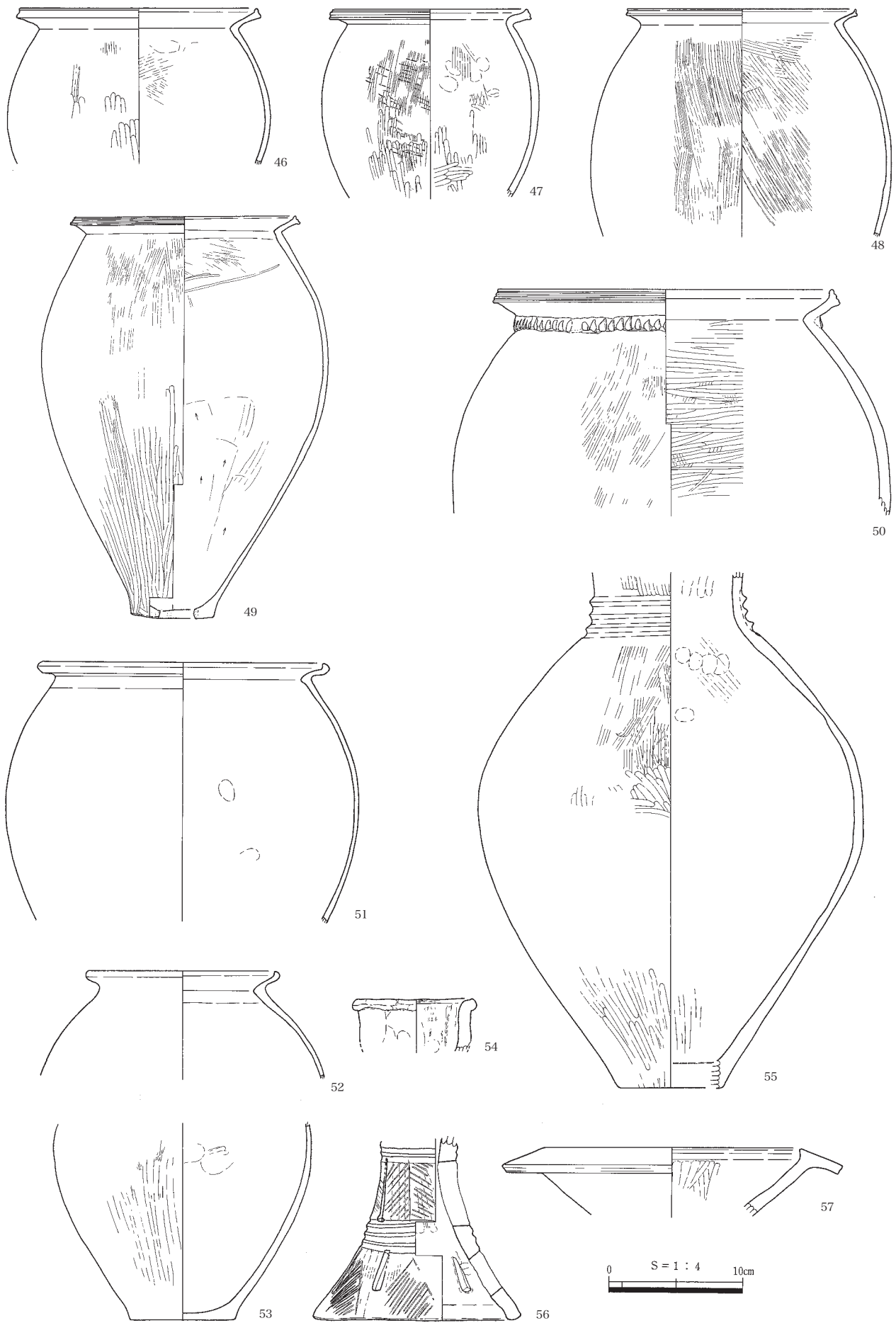


第26図 S16 (3)

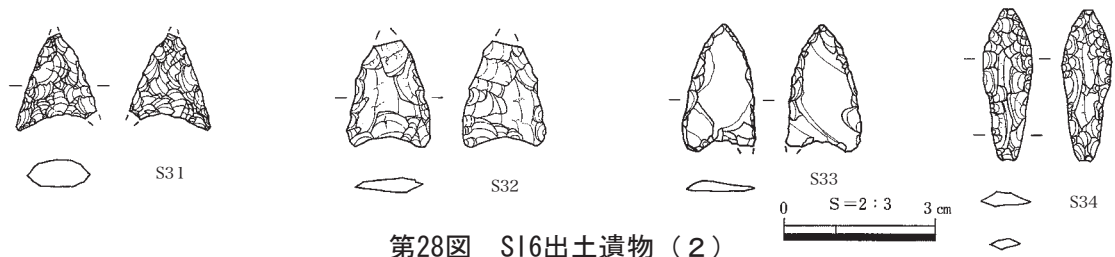
円形を呈し、床面積は 25.9 m²である。壁高は南壁で検出面から最大 48 cmを測る。地形的に低い北側は 5～6 cmと浅い。床面には幅 5～17 cm、深さ 5 cm前後の壁溝がめぐるが北側で大きく途切れており、全体形はC字状となる。地山自体傾斜していることもあり、南壁付近ではV層、北壁沿いはⅢ層、中央付近はIV層（ホーキ層）を床面としている。床面で検出したピットは全部で 12 基あり、このうち P1～P4 の 4 基が支柱穴と考えられる。規模は P1 (49 × 39 - 71) cm、P2 (45 × 34 - 60) cm、P3 (45 × 43 - 76) cm、P4 (57 × 53 - 70) cmで、柱穴間距離は P1-P2 → P4-P1 の順に、2.4 m、2.5 m、2.5 m、2.4 mとほぼ等間隔となる。P5 は (88 × 74 - 20) cmを測る浅い皿状の中央ピットである。P9～12 は位置・規模から屋内施設に関係する柱穴であろうか。P6～8 は炭化物や焼土粒を多量に含む土によって埋没していることから焼失時は開口状態にあったことが理解でき、焼失前の屋内施設として機能していたと考えられる。

埋土と遺物の出土状況 中央ピット周縁および東壁付近の床面上には炭化物・焼土塊集中層が広がる。焼土塊は屋根に葺いた土が被熱して生成されたものと考えられ、本住居は土屋根住居だったと推測する。焼土塊は 3 cm以下の小ブロックが主体で、屋根土まで激しく被熱するような状態ではなかったと推察されるが、部材はほぼ完全燃焼したとみられ残っていない。住居北側および西側の一部では床面上に焼土・炭化物をほとんど含まない層 (5・11層) を挟んで上位に焼土・炭化物集中層 (3・6層) が堆積し、焼失した上屋が部分的に上下反転しながら崩落したことに起因するものと考えられる。

住居南側の壁沿いでは焼土塊・炭化物を少量しか含まない層 (7～9層) を主体とするが、炭化材が良好な状態で遺存していた。床面直上で出土したもの以外は主に 9層にのり、8層に包含される。



第27図 SI6出土遺物（1）



第28図 S16出土遺物(2)

表8 S16ピット一覧表

P番号	長軸×短軸—深さ(cm)
P1	48×39—63
P2	39×34—59
P3	45×43—73
P4	54×51—68
P5	88×74—23
P6	100×95—10
P7	24×18—18
P8	25×23—13
P9	29×26—16
P10	25×21—14
P11	28×27—8
P12	31×30—12

この範囲は建材が炭化したものの屋根土が原因で完全燃焼を免れ、焼土塊を多量に生じるほど屋根土も被熱しなかったと推測される。遺存状況からすれば丸太材・半截丸太材がほとんどで、板材と確認できるものは無かった。住居中心部へ繊維方向を向けて放射状に倒れこんだ半截丸太材は垂木、それらと直交する方向の丸太材および半截丸太材は母屋桁と考えられ、垂木は幅6～12cm、厚さ1～6cm、母屋桁は幅(径)5～11cm、厚さ2～3cmを測る。H-H'ラインでは倒れながら折れた垂木が壁にもたれた状態で出土しており、出土状況から推測される垂木のピッチ(中心間距離)は8～20cmである。母屋桁はほぼ床面上で出土しているが、垂木は床面との間に土を挟み浮いた状態で出土したものが多数あり、上屋

は数度にわたり時間をかけて崩落していったと想定される。また半截丸太を用いた垂木12の上面(曲面)に材の繊維方向と直交する、横方向の炭化茅が付着しており(PL.7-4)、床面でも横→縦方向という順に張り付いた炭化茅が出土している(1・2)ことから、土屋根の下地として垂木の上に横→縦の順に茅を二重に葺いていたことが分かった。住居北東部に炭化材はほとんど残っていなかったが、垂木の炭化した表面だけが薄い炭化物層として検出された。東側では焼土塊集中層の上下で炭化材がみられ、上面に腐植した建材の表面が炭化物層として残る。炭化物層の形状および繊維方向から考えれば、下から屋根土→垂木→母屋桁の順に出土していることが理解でき、上屋が反転しながら崩落していったと考えられる。住居北西部は焼土・炭化物とも顕著でない。

支柱穴にはP1を除き径約20cmの柱痕跡が認められ、腐植した柱部分に炭化物を多量に含む16・18層が入り込んでいた。P1は支柱穴全体が16層で埋まっていたため焼失後に柱を抜き取ったと考えられる。よって、P1上面で出土した丸太材17は柱ではなかろう。P6～9も16層によって埋没しており、焼失時開口状態だった可能性が高い。

床面には不定形の被熱面が複数認められるが、炉と推定できるものはP5を挟んで南北に位置する不整楕円形プランの2箇所だけである。被熱面の分布範囲は炭化材が遺存していた範囲と概ね合致し、壁溝・壁体にも及ばないため、燃焼・落下した建材による二次的な被熱によるものと判断した。

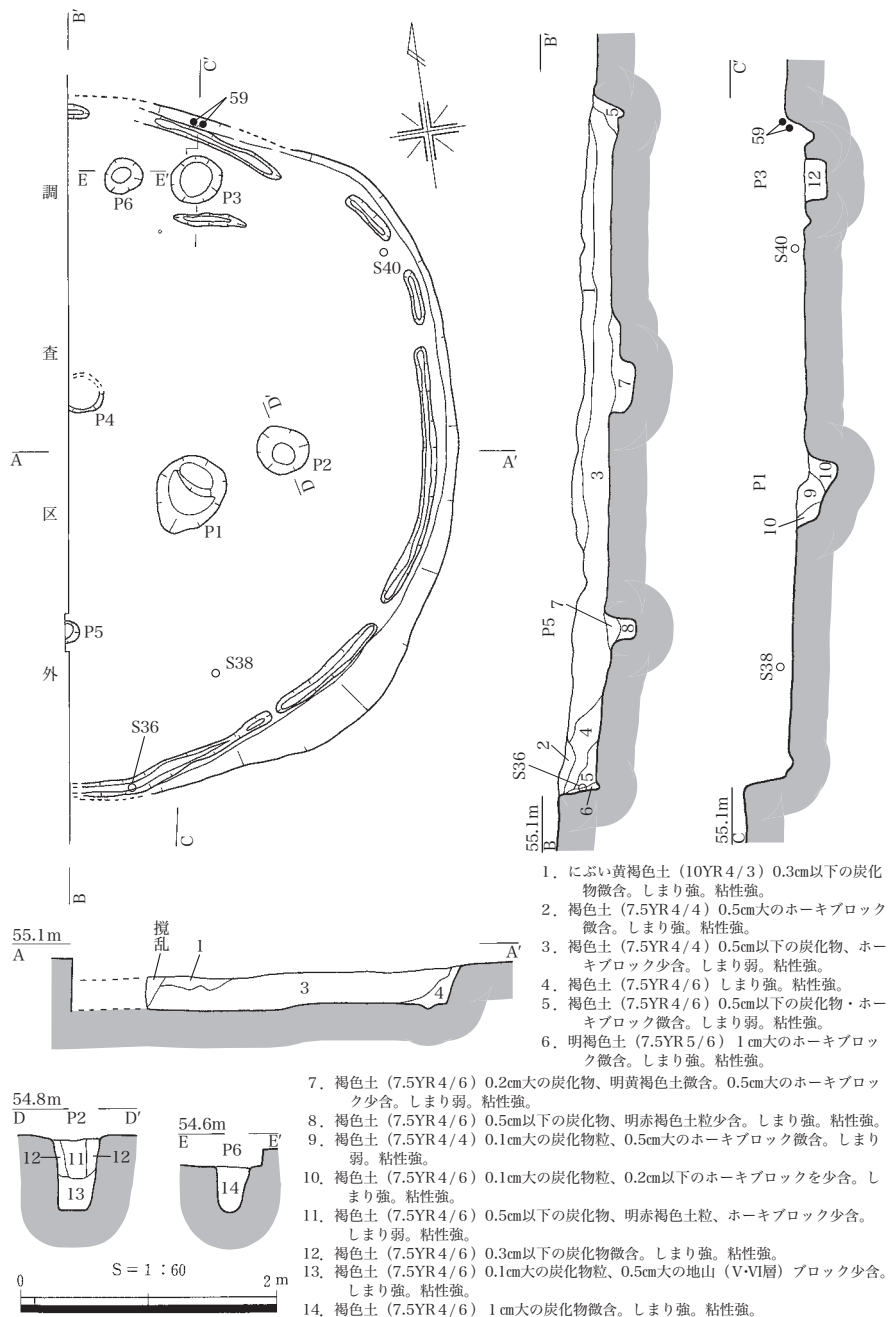
出土炭化材のうち11点で樹種同定を行っており(表26)、一部にニガキ(垂木)やツバキ属(母屋桁)も認められるが、全体としてスダジイを多用している。丸太材20はカラスザンショウであった。

本住居では複数個体の土器が出土しており、このうち甕49・50・52・壺53・55が焼失前に住居内に残されていたものである。53は若干床面から浮くが12層に伴っている。49・50・52・55はいずれも床面で出土した。50は11層および12層に、52は12層に覆われ、55は南側の頸部破片等が12層

にのり全体は11層に覆われていた。49は土層断面との明確な対応関係は不明だが焼土塊集中層掘り下げ中に検出したため、12層相当層に覆われていたと考えられる。49は焼成後の底部穿孔、50は胴部下半以下の除去が行われ、55も口縁部・底部などが欠如した状態で床面に残されていることを勘案すれば、本住居は土器を伴う廃屋儀礼の後、意図的な放火によって焼失したと推測する。46～48・51は出土状況から焼失後の投棄もしくは混入したものと考える。54・56・57は概ね1層に相当する埋土上層、S31～33は埋土中、S32は検出面付近の埋土上層から出土している。

出土遺物 46～52は甕である。46～50は狭い口縁帯に凹線を1～3条施す。47は外面に溝状のタタキ痕を残すが、最終的に内外とも細かなヘラミガキによって仕上げら

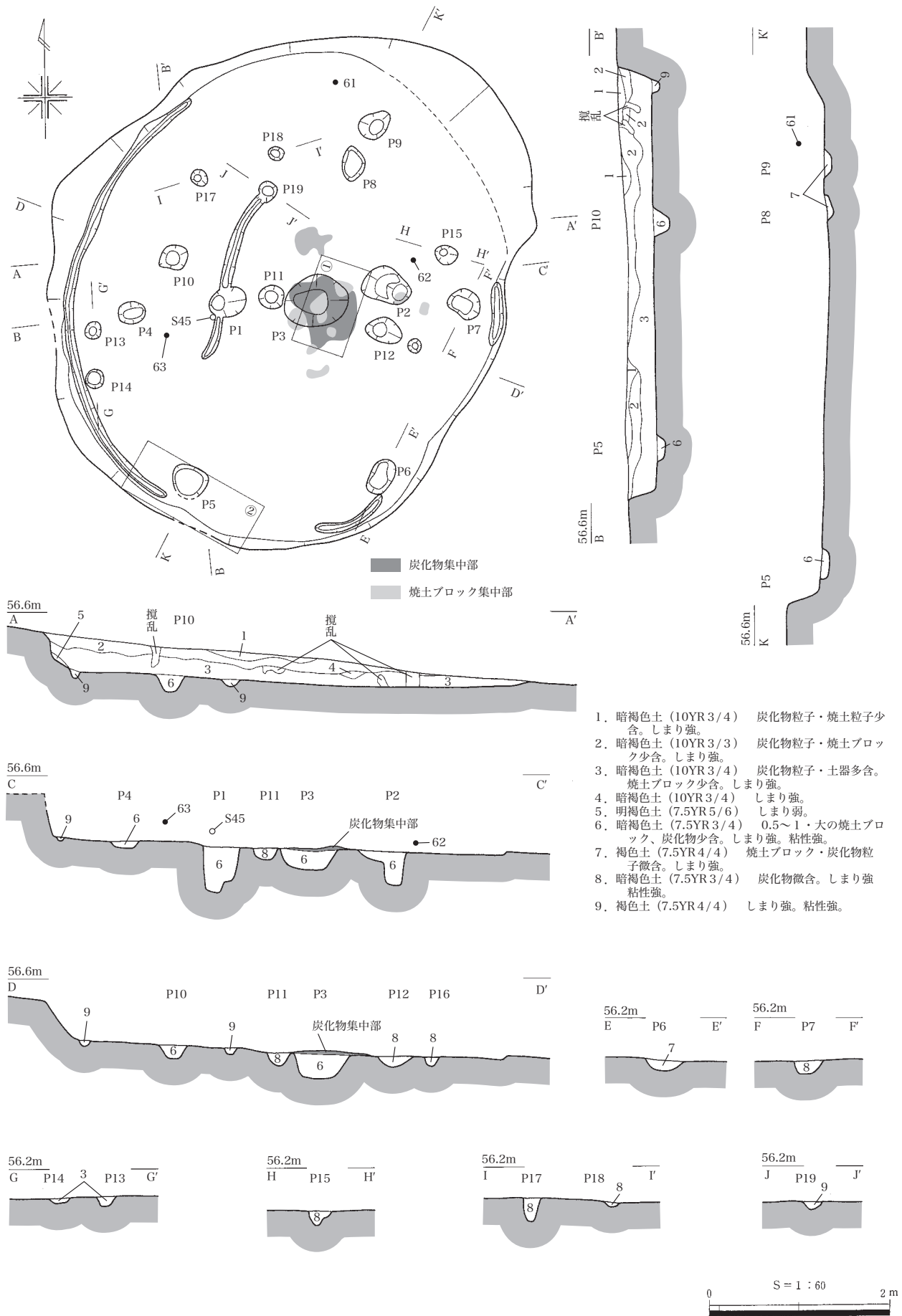
れている。48は内外面とも胴部中位以下までハケ調整が及ぶ。49は胴部中位よりやや上に最大径をもち、底部にかけてすばまるプロポーシヨンの甕で、内面は最大径付近までヘラケズリを行った後、粗くヘラミガキを施している。50は大型の甕で、頸部には小口による刻目を施した貼付突帯をめぐらせ、最後に上半をナデつける。焼成は良好だが、頸部（貼付突帯）の約4/5に黒斑が認められる。内面はタテ方向のハケ後、最大径付近までヨコ方向のヘラミガキを丁寧に施す。口縁部から胴部最大径までほぼ完存するが、以下は打ち欠かれたと推測する。51・52は丸みをもち短く屈曲して立ち上がる口縁がつくもので、全体のプロポーシヨンは不明だが胴は張る。風化のため不明瞭だが調整は内外面とも丁寧なナデか。53・55は壺である。55は頸部に断面三角形の貼付突帯を2条めぐらせる。54は手づくね土器で、指頭調整によって成形されている。56は器台もしくは高坏の脚部と考えられる。外面はヘラミガキで調整した後2～3条の凹線によって2段に画された文様帯に方形の透孔を入れ、上段の透孔間には綾杉文が、下段の透孔間には鋸歯文(L)が施される。綾杉文は左右→中心線



第29図 S17



第30図 S17出土遺物



第31図 S18 (1)

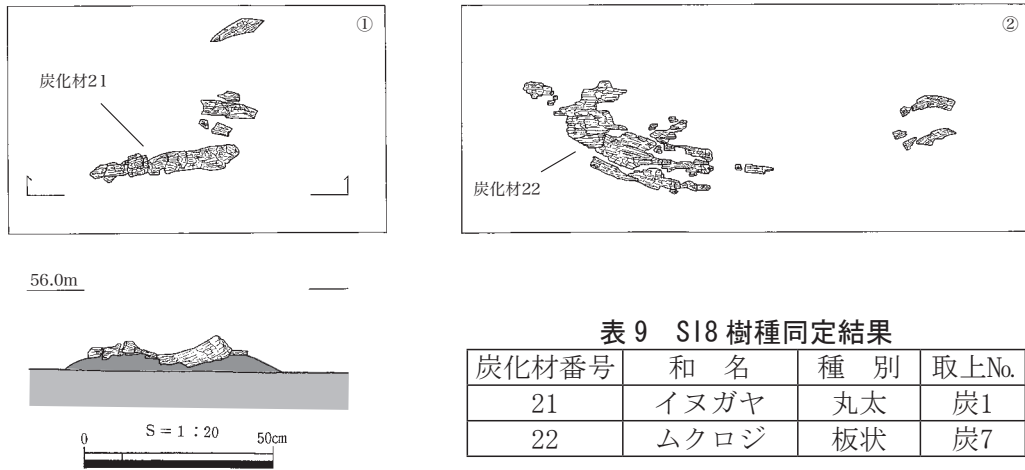


表9 S18 樹種同定結果

炭化材番号	和名	種別	取上No.
21	イヌガヤ	丸太	炭1
22	ムクロジ	板状	炭7

第32図 S18 (2)

の順、鋸歯文は／→\の順でヘラ描きされており、脚裾に接するように施された鋸歯文は下端線を省略している。57は高坏の坏部で、口縁は鋤先状に斜め下方へ拡張される。S31は黒曜石製、S32～34はサヌカイト製の石鏃で、S31～33は凹基式、S34は凸基式である。S34は石材産地分析を実施し、金山産という結果を得た（第4章第3節P.153）。

時期 出土土器より、本遺構の時期は弥生時代中期後葉（IV-1）と考える。なお、炭化材13・17で¹⁴C年代測定を実施しており、それぞれ2460 ± 230、1630 ± 510という測定値が得られた。いずれも土器型式よりもやや古く幅のある測定値であった。

（高尾）

S17（第29・30図、PL.8・41）

位置 G8・9グリッド、標高54.5～55.0mの緩斜面部に位置し、西側約1/2が調査区外となる。北西約5mにSI4が近接する。

調査の経過 III層上面付近で礫・炭が散在し、一部黒褐色～暗褐色を呈す1m程の不定形プランが認められたため、まずそれ

らの出土状況を記録し取り上げた後に同プランを半截した。その結果、II層が浅い窪地に堆積したものと判断されたが、ベースとなる褐色土には炭化物と地山ブロックを含んでおり、土器片も出土したため、改めて褐色土プランの検出を行い径約6mの半円形を呈すことがわかった。よって、そのプランを縦断するように調査区境にサブトレンチを設定して掘り下げたところ、南側で壁溝を確認し、石斧も出土したため、竪穴住居跡であると判断し調査を行った。

規模と形態 調査区外にかかるため全体形は不明だが、径5.6m程の円形プランになるとみてよからう。壁高は南壁で検出面から最大36cmを測る。壁沿いに幅8～14cm、深さ最大6cmの壁溝が断続的にめぐる。床面でピットを6基検出し、このうちP2・P6が支柱穴になると考える。P2が（41 × 38 - 58）cm、床面から下がったサブトレンチ底面で検出したP6が（30 × 29 - 36）cmを測るのに対し、近接するP1は（65 × 52 - 17）cm、P3は（42 × 36 - 31）cmとやや浅く、支柱穴の可能性は低い。

表10 S18 ピット一覧表

P番号	長軸 × 短軸 - 深さ (cm)
P 1	42 × 31 - 48
P 2	52 × 40 - 37
P 3	71 × 55 - 24
P 4	31 × 25 - 7
P 5	39 × 37 - 8
P 6	41 × 25 - 12
P 7	37 × 28 - 14
P 8	38 × 25 - 7
P 9	37 × 28 - 9
P 10	35 × 30 - 18
P 11	27 × 25 - 15
P 12	40 × 26 - 10
P 13	19 × 19 - 11
P 14	21 × 20 - 5
P 15	26 × 21 - 15
P 16	15 × 14 - 9
P 17	19 × 16 - 26
P 18	18 × 15 - 5
P 19	23 × 19 - 8



第33図 S18出土遺物

埋土と遺物の出土状況 竪穴は主に3層によって埋没しており、わずかに窪地となった中央付近にはII層が堆積していた。P2には柱痕跡(11層)が認められ、推定柱径は17cm前後である。遺物は主に3層から出土しており、いずれも埋没過程での流れ込みとみられる。

出土遺物 58は甕で、貼付突帯はヘラ状工具による浅く小さい刺突が施された後頸部に強くナデつけられている。口縁部は風化が顕著だが3条の凹線が確認できる。59は壺で、頸部に凹線をめぐらす。S35はサヌカイト製の石鏃、S36は蛤刃石斧、S37は鑿片片刃石斧、S38は敲石、S39・40は砥石である。S36は5層出土で基部に敲打痕を有す。S38は広範囲に敲打痕が認められる。S39は細粒の砥石で、全面を砥面としている。

時期 出土土器から、本遺構の時期は弥生時代中期後葉(IV-1)と考える。

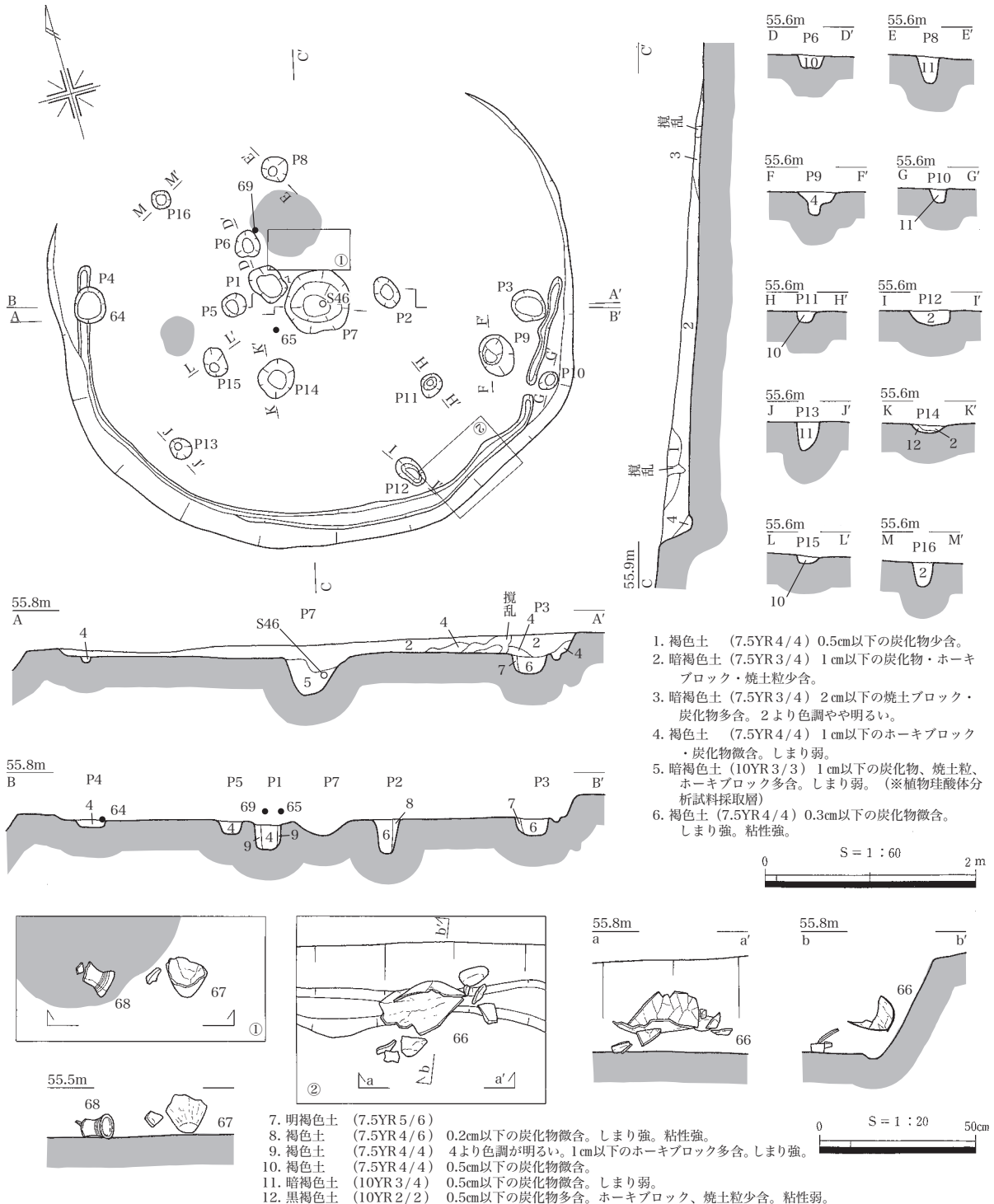
(高尾)

S18 (第31～33図、表9・10、PL.8、9)

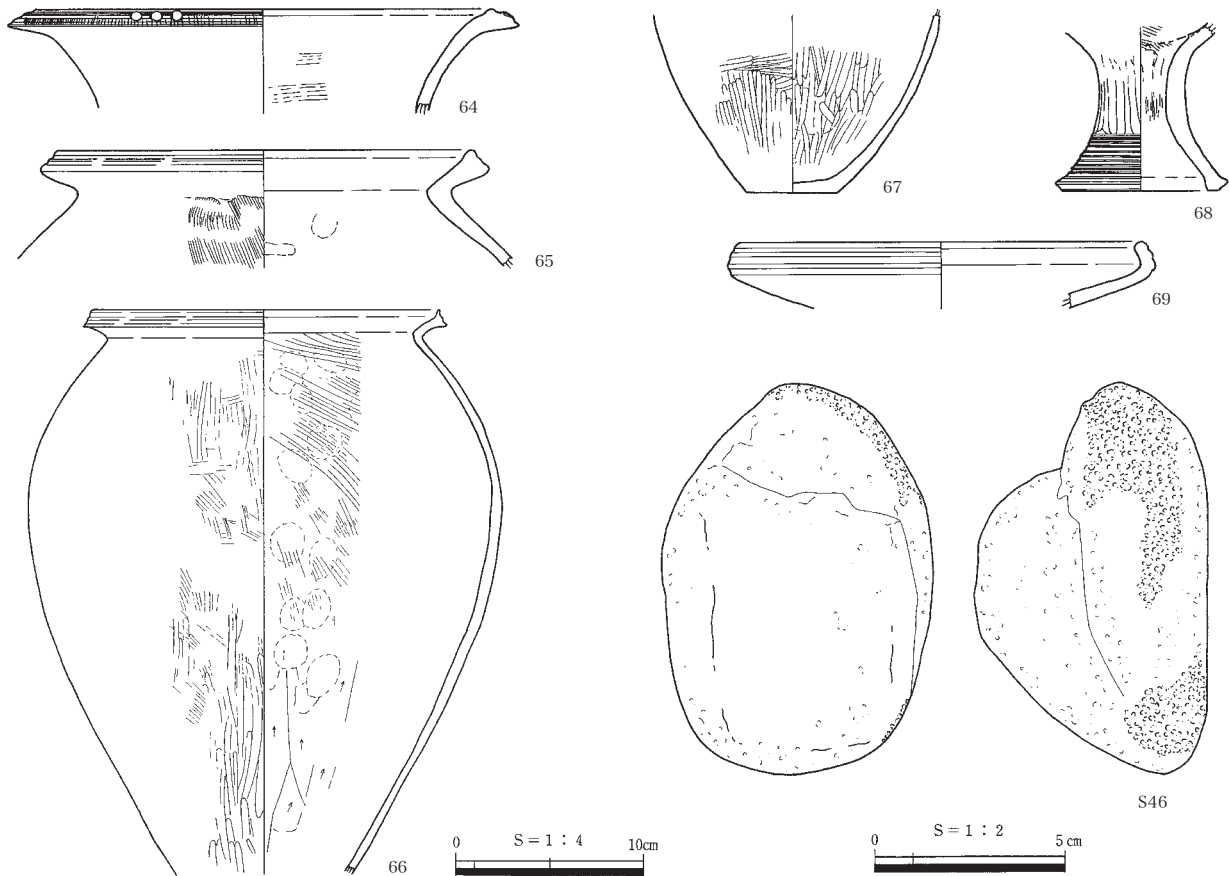
位置 C11～12、D11～12グリッド、標高55.8～56.4mの東側に向かって傾斜する斜面に位置する。

調査の経過 II層を除去したところで炭化物粒子を多く含む暗褐色土の円形プランを検出した。サブトレンチ(A-A'・B-B')により、ピットおよび焼土面が確認でき、竪穴住居と判断して調査を行った。

規模と形態 平面形は長軸6m、短軸5.1mの南北方向にやや長い楕円形を呈する。床面積は約19㎡である。IV層を床面とする。壁高は西側で最も高く、最大44cmを測る。南北の壁面は地形に沿っ



第34図 S19



第35図 S19出土遺物

て東に向かってしだいに低くなり、東側で壁面は無くなる。

床面において、ピット 18 基、焼土面 1 か所、壁溝 1 条、床溝 1 条を確認した。ピットの中で支柱穴と考えられるのは P1、P2 である。柱穴間距離は 2.0 m を測る。P3 は中央ピットである。その両側には P11、P12 が同一直線上にあり、P3 に伴う構造物の存在が考えられる。P4～10 は支柱穴と思われるもので、この中で P4～8 が五角形状に配される。2 本の支柱の周囲を 5 本の支柱で支える構造が推察される。P13～18 は径が 13～20 cm と小さく、深さも 10 cm 前後で浅い。支柱の可能性を挙げておきたい。壁溝は西壁面で確認され、東側では部分的にしか確認することはできなかった。床溝は P1 の南から P1 と P19 をつなぐように伸びている。全長 1.9 m を測る。断面は U 字状を呈し、床面からの深さは 4 cm である。P3 の北側に焼土面が形成されており、床面が被熱し変色していた。

埋土と遺物の出土状況 埋土はしまりのよい暗褐色土を主とし、炭化物粒子を多く含み、焼土ブロックをわずかに含む。B-B' の土層断面から、西側から東に向かって遺構内に流れ込むように堆積した様子が観察できる。まず、壁体が崩落して 5 層が堆積する。次に、3 層が堆積することで遺構はほぼ埋没を終えた状態となる。凹地になっているところへ 2 層が堆積し、最後に僅かな窪み部分に 1 層

表 11 S19 ピット一覧表

P 番号	長軸×短軸—深さ (cm)
P 1	38 × 28 — 24
P 2	30 × 22 — 32
P 3	35 × 30 — 18
P 4	34 × 29 — 8
P 5	23 × 22 — 12
P 6	25 × 24 — 12
P 7	64 × 58 — 36
P 8	24 × 23 — 26
P 9	42 × 33 — 22
P 10	19 × 15 — 13
P 11	24 × 20 — 11
P 12	32 × 20 — 14
P 13	21 × 20 — 28
P 14	36 × 31 — 7
P 15	28 × 21 — 6
P 16	19 × 17 — 22

が堆積して遺構の埋没は終了する。遺物は3層からの出土が主である。P3の検出面上面で炭化物層を検出し、さらにその上および周辺から建築部材と思われる炭化材や拳大の被熱粘土塊を検出した。P5周辺においては遺存状態がよくないものの板状の炭化材を確認することができた。また、P3をはじめ、主柱穴や支柱穴の埋土には径10mm前後の粒状の炭化物が含まれ、焼土ブロックも含まれている。これらのことから、当住居は焼失した可能性が高い。しかし、SI3・6ほど建築部材が遺存していない。これは住居を廃棄する際に意図的に焼失させ、その後ある程度片づけを行ったためであると考えられる。炭化した部材や焼土ブロックが散乱することなく、床面中央に集められたように集中しているのはこのためであろう。

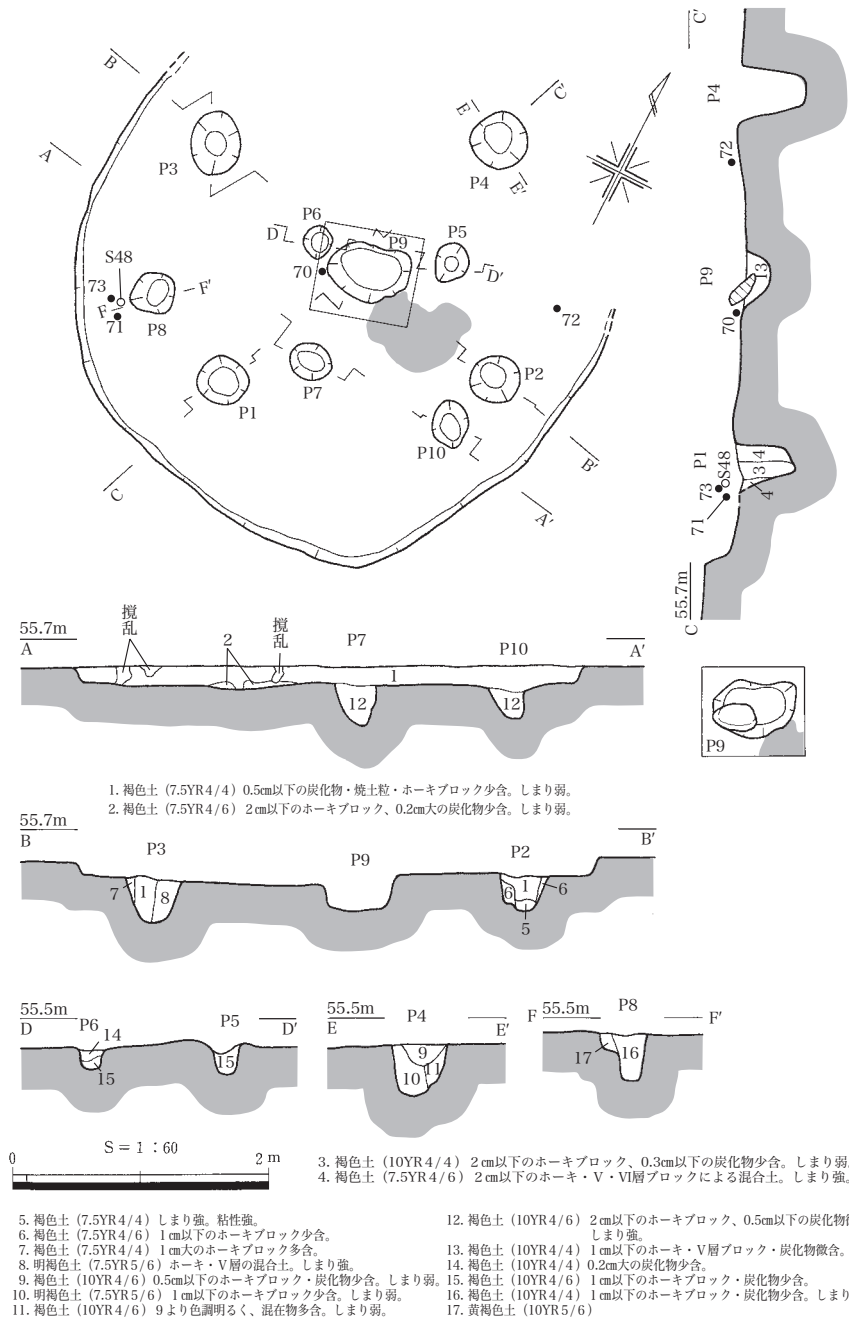
出土遺物 60～62は甕である。口縁部に凹線もしくは刻目を施す。頸部には指頭圧痕もしくは刺突のある貼付突帯を持つ。63は台付鉢と思われるものの口縁部である。口唇部に2本1対の斜格子文、口唇端部に刻目、頸部横方向に3条以上の貼付突帯後縦方向の棒状浮文を施す。注口部の欠損痕が残る。S45は緑色結晶片岩からなる扁平片刃石斧である。在地の石材ではなく、中国山地（津山～勝山）からの搬入の可能性が高いものである。

時期 出土土器はIV-1様式に比定されることから、弥生時代中期後葉には廃絶されていたものと推定される。

(浅田)

表12 SI10ピット一覧表

P番号	長軸×短軸—深さ (cm)
P1	38×37—43
P2	39×36—31
P3	48×38—35
P4	44×43—52
P5	33×26—24
P6	26×23—16
P7	33×29—32
P8	33×32—40
P9	66×43—24
P10	37×28—23



第36図 SI10

S19（第34・35図、表11、PL.10・11・46）

位置 E9グリッド、標高55.3～55.8mの緩斜面部に位置し、西側にほぼ接するようにSI6、東側約2.5mにSI10が位置する。

調査の経過 III層上面で多量の土器を伴い径約5mの範囲に広がる暗褐色土を検出し、サブトレンチ（C-C'）底面で壁溝、焼土面が確認されたため、竪穴住居跡であると判断し調査を進めた。

規模と形態 平面形は長軸5.0m、短軸4.4mの不整円形を呈し、床面積は16.4㎡である。壁高は南側で検出面から最大29cmを測る。幅6

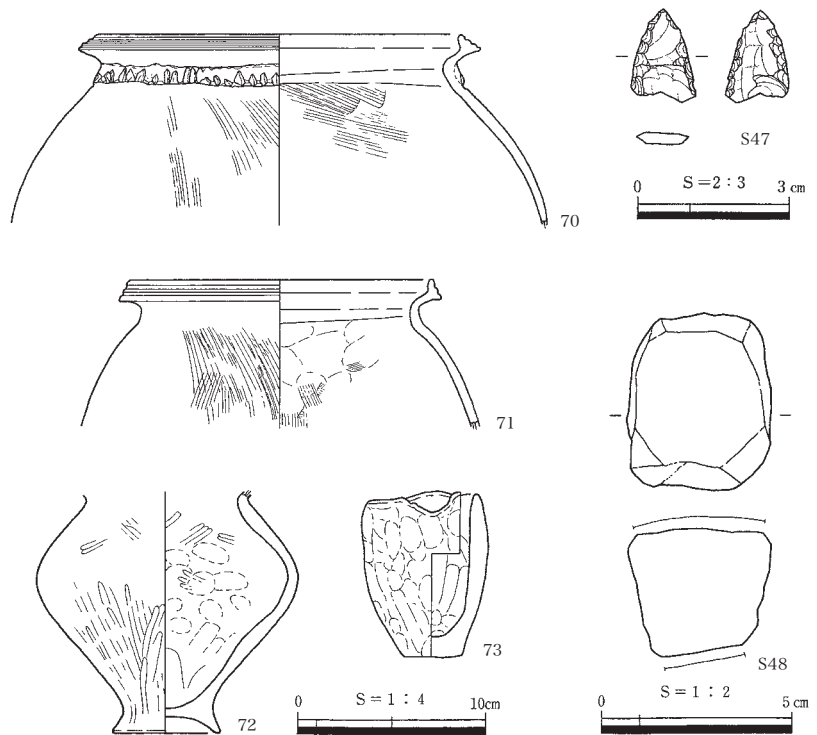
～21cm、深さ最大4cmの壁溝が住居南半部分のみめぐり、全体形はC字状を呈す。南側はIV層（ホーキ層）、北側はIII層を床面としており、ピットを計16基検出した。このうちP1・P2が支柱穴にあると考える。また、P1－中央ピットP7－P2を結ぶラインの東西延長線上に位置し、壁際に掘られたP3・P4も上屋に関する柱穴と推測する。他のピットは規模が小さく浅いものばかりで個々の機能を想定し難いが、P5・6・8・13・15は直線的に並ぶ位置に掘られており、相互に関連のあるピットかもしれない。床面には不整楕円形を呈す焼土面が2箇所存在し、特に北側が強く被熱して表面に小さな凹凸が認められた。

埋土と遺物の出土状況 竪穴は一部壁溝付近の床面に壁体の崩落土とみられる4層が堆積し、その後ほぼ全体が2層によって埋没している。支柱穴P1・2は柱痕跡が認められ、推定柱径は12～15cmである。その他のピットはIII層に由来する褐色土か2層にちかい暗褐色土によって埋没している。P7の5層で採取した試料により植物珪酸体分析を行ったが、イネ科作物に由来する植物珪酸体は検出されなかった（第4章第1節P.140～141参照）。2層には多くの遺物を伴っており、SI4・5ほどではないが埋没の過程で廃棄穴に利用された可能性が高い。床面直上で67・68、床面付近で64、南壁際に転落あるいは投棄された状態で66が出土した。S46はP7の2層から出土している。

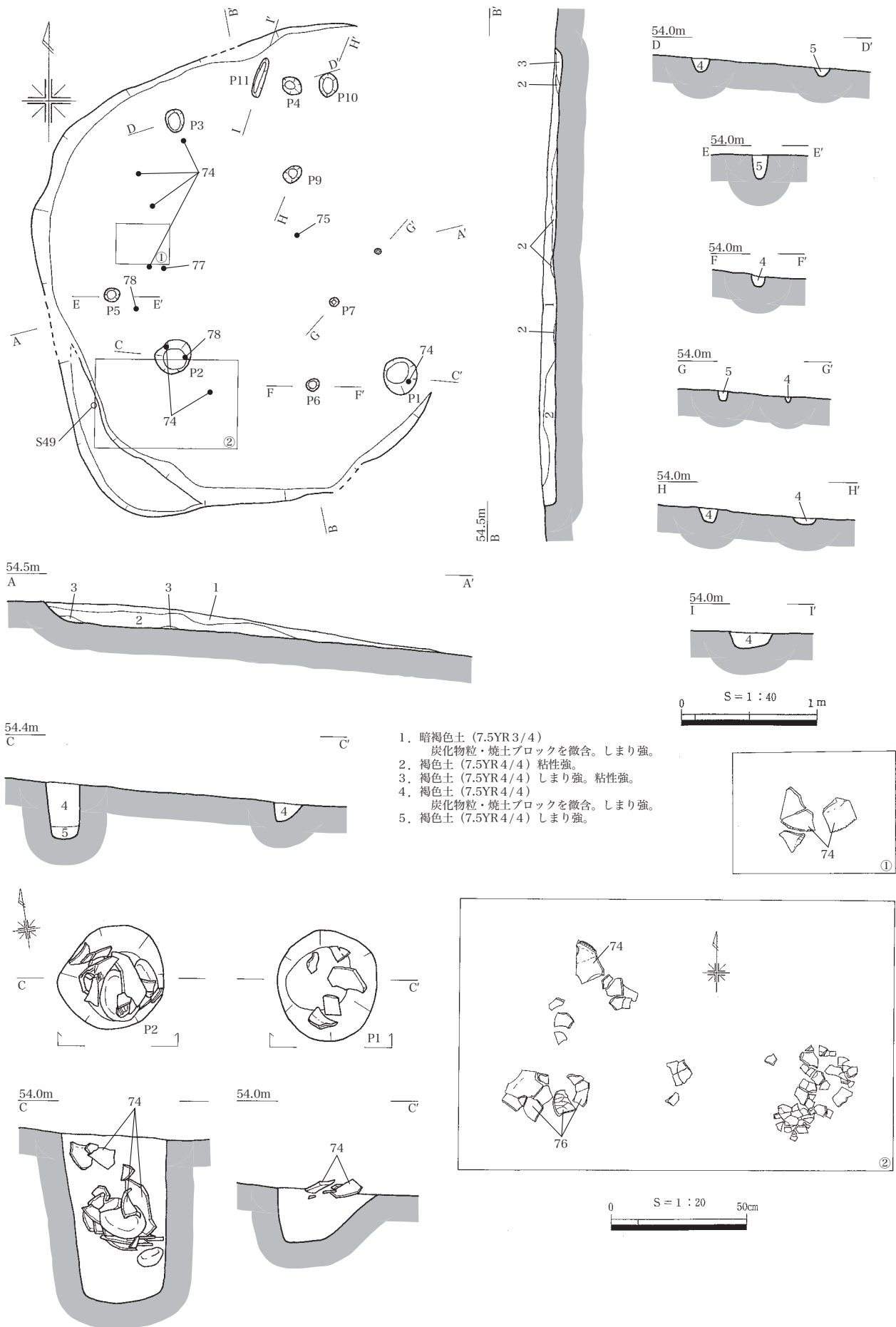
出土遺物 壺64は口縁部に凹線を3条めぐらせた後刻目を施す。67は小型壺の胴～底部で、内外面とも丁寧なヘラミガキで仕上げる。66は胴部高約2/3の位置に最大径をもち底部にかけてすぼまる形態の中型甕で、内面上半をハケ後指押さえ、下半をヘラケズリで調整する。68は高坏の脚部、69は坏部である。68は脚部下半に10条、裾端部に1条の凹線をめぐらせ、坏底部を円盤充填によって成形している。69は内傾する口縁外面に3条の凹線を施す。S46は流紋岩製とみられる敲石である。

時期 出土土器より、本遺構の時期は弥生時代中期後葉（IV-1）と考える。

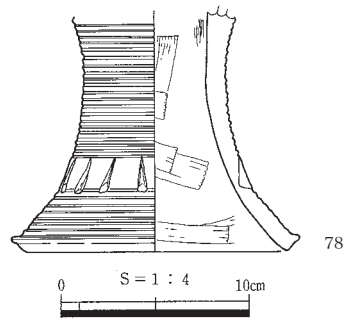
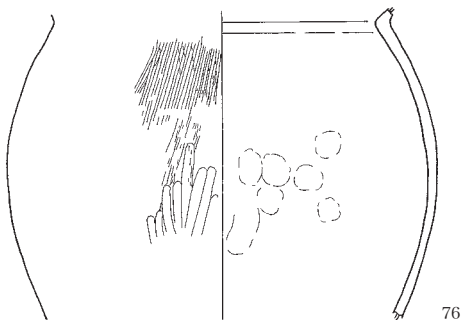
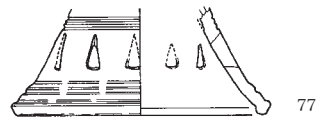
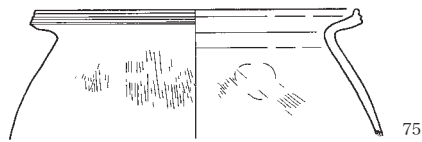
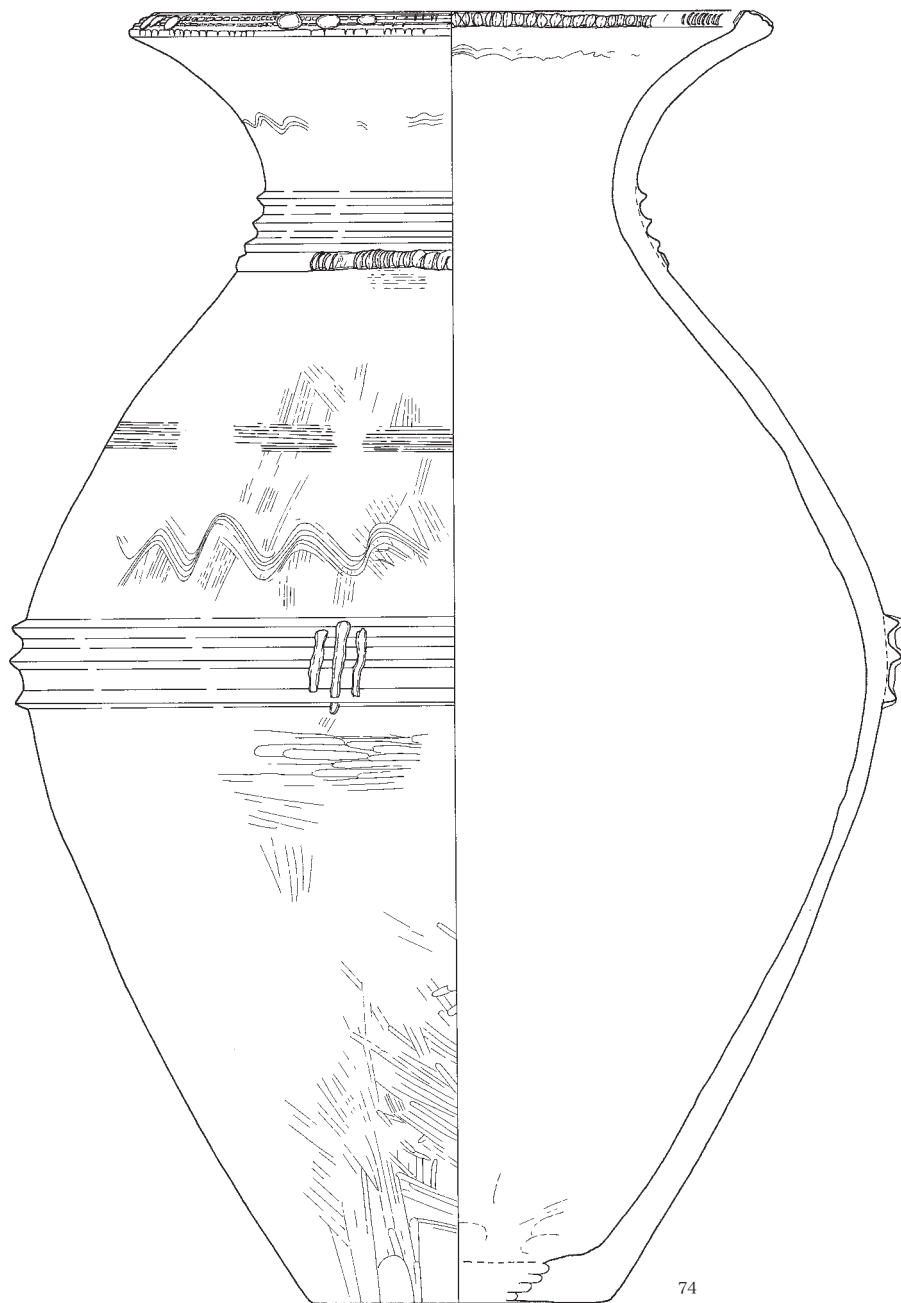
（高尾）



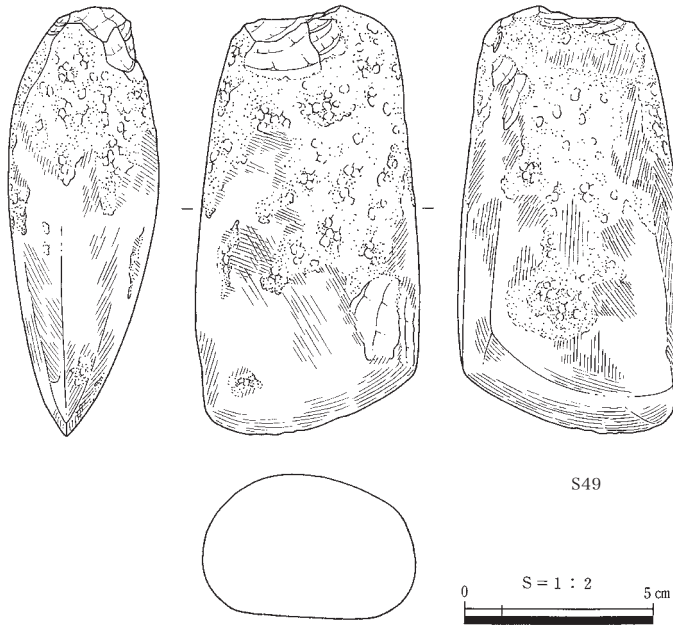
第37図 SI10出土遺物



第38図 SS1



第39図 SS1出土遺物(1)



第40図 SS1出土遺物 (2)

表 13 SS1 ピット一覽表

P 番号	長軸×短軸—深さ (cm)
P 1	41 × 38 — 20
P 2	41 × 35 — 63
P 3	26 × 21 — 14
P 4	24 × 20 — 8
P 5	18 × 14 — 26
P 6	16 × 13 — 13
P 7	10 × 9 — 12
P 8	7 × 6 — 6
P 9	22 × 16 — 15
P 10	26 × 20 — 7
P 11	45 × 11 — 19

SI10(第36・37図、表12、PL.11・46・48・60)

位置 D9グリッド、標高55.3～55.6mの緩斜面部に位置し、周囲にSI9・SS2等が近接する。

調査の経過 当初、長軸約4mの楕円形状の土坑と判断して調査を進めていたが、床面精査において複数のピットが検出され、そのうち柱痕跡が認められるものも存在したことから、竪穴住居と判断して調査を進めた。

規模と形態 竪穴は浅く、緩斜面下方にあたる北壁は検出されなかった。柱穴位置等も含めて推定される平面形は径約

4.2mの円形で、床面積は12.6㎡である。壁高は検出面から最大で22cmを測る。壁溝はみられない。Ⅲ～Ⅳ層を床面としており、10基のピットを検出したが、このうちP1～P4が主柱穴と考えられる。P9が中央ピットで、それを挟むP5・P6は補助柱穴となろう。P9南東際に接するようにⅣ層が被熱した84×66cmの焼土面が広がる。柱間距離はP1-P4→P3-P1の順に2.1m、1.9m、2.2m、1.9mでP4-P3間がわずかに広い。

埋土と遺物の出土状況 埋土はほぼ褐色土の単層で、自然堆積によって埋まったと考える。主柱穴にはいずれも柱痕跡が認められ、そこから推定される柱径は15～16cmである。P8は柱痕跡を残し、P7・10も他の主柱穴に近似した規模を有し、さ

らにP3が埋め戻し後に柱の位置を変えたと思われる堆積を示すことを勘案すれば、ほぼ原位置で建て替えが行われた可能性がある。遺物は少量で、出土位置はいずれも埋土中である。P9では楕円礫が落ち込んだ状態で出土した。台石と思われるが使用痕は認められない。

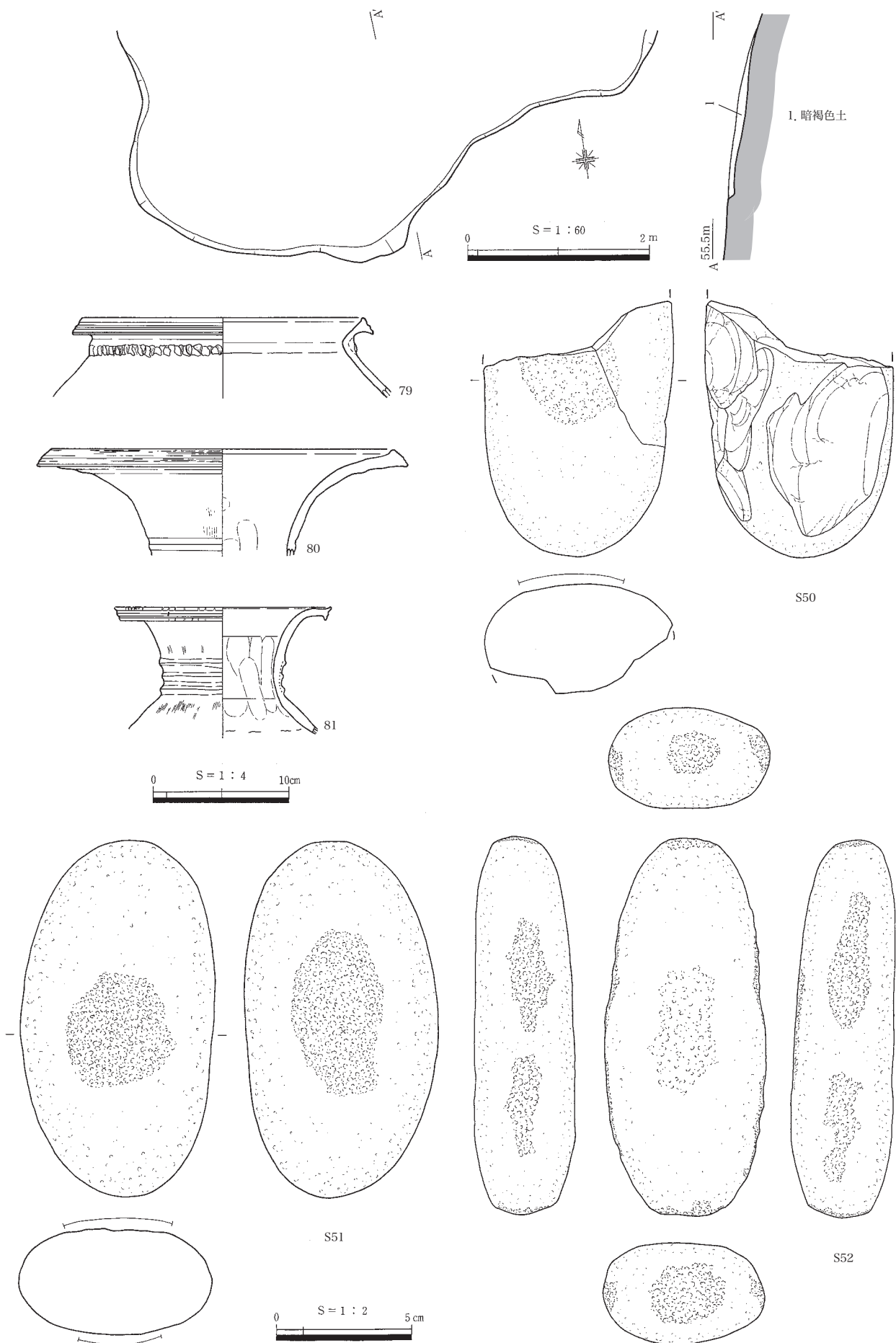
出土遺物 70・71は口縁部に2～3条の凹線をめぐらせる甕で、71は頸部にヘラ状工具による浅い刺突を施す突帯を貼り付けた後上から強くナデつけている。72は台付壺で、算盤玉状に張る胴部に短くハの字に開く脚がつく。外面は全体をヘラミガキし、内面は下半をヘラケズリ、胴部最大径付近を指押さえにより調整している。73はコップ形の手づくね土器で、口縁部を片口状にくぼませる。S47はサヌカイト製の石鏃、S48は砥石である。

時期 出土土器より、本遺構の時期は弥生時代中期後葉(Ⅳ-1)と考える。 (高尾)

(3) 段状遺構

SS1 (第38～40図、表13、PL.28)

位置 B8～9グリッド、標高約53.8m～54.2mの北東側に向かって傾斜する緩斜面に位置する。



第41図 SS2および出土遺物

調査の経過 表土除去後、さらにⅡ層を除去したところで土器片を含む暗褐色土の方形プランを検出した。サブトレンチ（A-A'・B-B'）により、壁面の立ち上がりや床面上の遺物を確認し、竪穴状の遺構と判断して調査を行った。

規模と形態 平面形は長辺 4.4 m、短辺 3.6 m の長方形を呈する。床面積は約 17 m² である。壁高は西側が高く最大 22.2 cm である。東側に傾斜するに従い壁面も低くなり、東側では壁面の立ち上がりは確認できない。床面においてピット 11 基を確認した。壁溝、焼土面貼床は認められなかった。

P1～4 は柱穴と考えられる。このうち、P1 の規模はそれぞれ径 36 cm、床面からの深さ 20 cm であり、P2 の規模は径 40 cm、深さ 62 cm を測る。一方 P3、P4 は径が 20 cm、床面からの深さ 10～13 cm と規模が小さい。主に P1、P2 で上屋を支え、P3、P4 は支柱に近い柱であったことが推察される。他のピットの性格は不明である。

埋土と遺物の出土状況 埋土は主に暗褐色土と褐色土の 2 層からなる。遺物は主に 2 層および床面上から出土している。P1 の上面からは土器がまとまって出土し、また、P2 の埋土中からは円礫に押し潰された状態で壺 74 が出土している。P2 周辺の床面上からは、この壺の口縁部が散乱した状態で出土している。注目すべきはこの P2 の遺物出土状況である。ピット内からは円礫に押しつぶされた状態で口縁部から底部の破片が出土している。この出土状況を踏まえると、柱を抜き去った後に壺を入れ、そこに目かけて円礫を投げ込んで壊したことが分かる。出土した壺は全体の 2/3 程度にしか復元できなかったことから、ピット内に入れる以前にある程度破壊して、ピット内に納まる大きさにしてから円礫でさらに破壊したと推察される。床面上に散らばる破片は礫を投げ入れた時に飛び散ったものであろう。この行為は家屋の廃絶に伴う儀礼行為として捉えることができよう。前述した SI5 の状況も勘案すれば、柱穴への土器廃棄という廃屋儀礼は支柱穴が対象とされていることが分かり、注目すべき例であるといえる。

出土遺物 74 は大型の壺である。P1、2 および床面上からの出土である。口縁部に凹線施文後、3 個 1 対の円形浮文を施す。頸部には断面三角形の貼付突帯を 3 条、指頭圧痕貼付突帯を 1 条、胴部には 9 条の平行沈線、波状文、断面三角形の貼付突帯を 3 条施文後、3 条 1 対の棒状浮文を施す。75、76 は甕、77、78 はともに三角形の透孔を持つ高坏の脚部である。

時期 ピット内出土土器が IV -1 様式に比定されることから、弥生時代中期後葉には廃絶されたものと推定される。 (浅田)

SS2 (第 41 図、PL. 48・56)

位置 D9 グリッド、標高 55.0～55.3 の緩斜面部に位置し、南側に SI9・10、北側に SK41・42 が近接する。

規模と形態 平面形は長軸 5.9 m、短軸 2.5 m を測る不整形形状を呈す。底面は地形に沿ってわずかに北側へ傾斜しており、検出面からの深さは最大でも 8 cm と浅い。

比較的多量の遺物が集中する範囲に堆積した褐色土の広がりや遺構として捉えたものだが、底面に壁溝やピットもなく、旧地形が窪地状となった箇所に遺物が廃棄された状態を検出した可能性がある。

出土遺物 遺物はいずれも底面から浮いており、甕 79、壺 80・81、敲石 S50～52 などが出土した。

時期 出土土器の特徴から、本遺構の時期は弥生時代中期後葉 (IV - 1) と考える。

(高尾)

(4) 土坑

SK1 (第42図、PL.12)

位置 E3グリッド、標高約53mの尾根頂部の平坦面にあり、SI2の西側に位置する。

調査の経過 II層除去後、炭化物粒子を含む暗褐色土の楕円形プランを検出した。半截したところ、炭化材を含む炭層を検出し、椀状の掘り込みも確認した。このため土坑と判断して調査を行った。

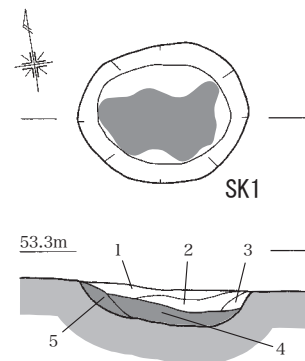
規模と形態 平面形は長軸88cm、短軸73cmを測る。楕円形を呈する。検出面から底面までの深さは最大21cmである。断面は椀形を呈する。炭化物を含んだ青黒色を呈する層が中層から底面まで堆積していることから、製炭土坑の可能性を考え完掘後に壁面および底面の精査を行ったが、被熱した痕跡は認められなかった。よって、製炭が行われていた可能性は低いと考える。

埋土と遺物の出土状況 5層は黄褐色を呈し、しまりが強い土である。基盤層であるIII層に近いことから、土坑がその機能を果たさなくなった直後に浸食作用等により、土坑周囲の地表面から流入し堆積したものであろう。その後4層、3層、2層の順に堆積している。これらの層は青黒色を呈し、炭化物を多く含む。特に3層に炭化物が顕著に見られ、棒状の炭化材も数点認められた。これらの層は自然な流入とは考えにくい。土坑壁面及び底面に被熱の痕跡が認められないことから、埋没途中に窪地になっている部分へ投棄されたものと推察される。その後わずかに窪んでいる部分に1層が流入し、当遺構は完全に埋没する。

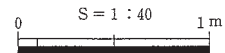
出土遺物 遺物は認められなかった。

時期 遺物が出土していないため詳細な時期は特定できないが、周囲の遺構の状況から、弥生時代中期のものとする。用途は不明である。

(浅田)



1. 暗褐色土 (10YR3/3) 炭化物少含。しまり強。
2. 青黒色土 (10BG2/1) 炭化物少含。しまり強。
3. 黄褐色土 (10YR5/6) 炭化物微含。しまり強。
4. 青黒色土 (5PB2/1) 炭化物層。焼土粒を微含。しまり強。
5. 黄褐色土 (10YR5/6) 炭化物層。しまり強。焼土粒微含。



SK2 (第42図、PL.12)

位置 E2グリッド、標高約52.8mの西側に向かって緩やかに傾斜する斜面地にある。SI2の西、SK1の北西側に位置する。

調査の経過 II層除去後、炭化物を含む楕円形プランを検出した。半截し、断面が箱型の掘り方を確認したため土坑として調査した。

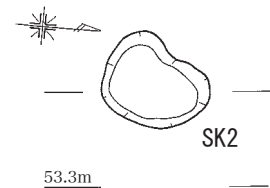
規模と形態 平面形は不整楕円形を呈する。規模は長軸56cm、短軸38cmを測り、検出面から底面までの深さは12cmである。

埋土と遺物の出土状況 埋土は2層からなる。III層に似た2層が凹レンズ状に堆積し、その上に炭化物を少し含む1層が堆積する。土層断面の様子から、自然堆積による埋没と考える。

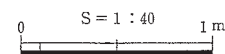
出土遺物 遺物は出土していない。

時期 遺物が出土していないため詳細な時期は特定できないが、検出状況から弥生時代中期のものとする。用途は不明である。

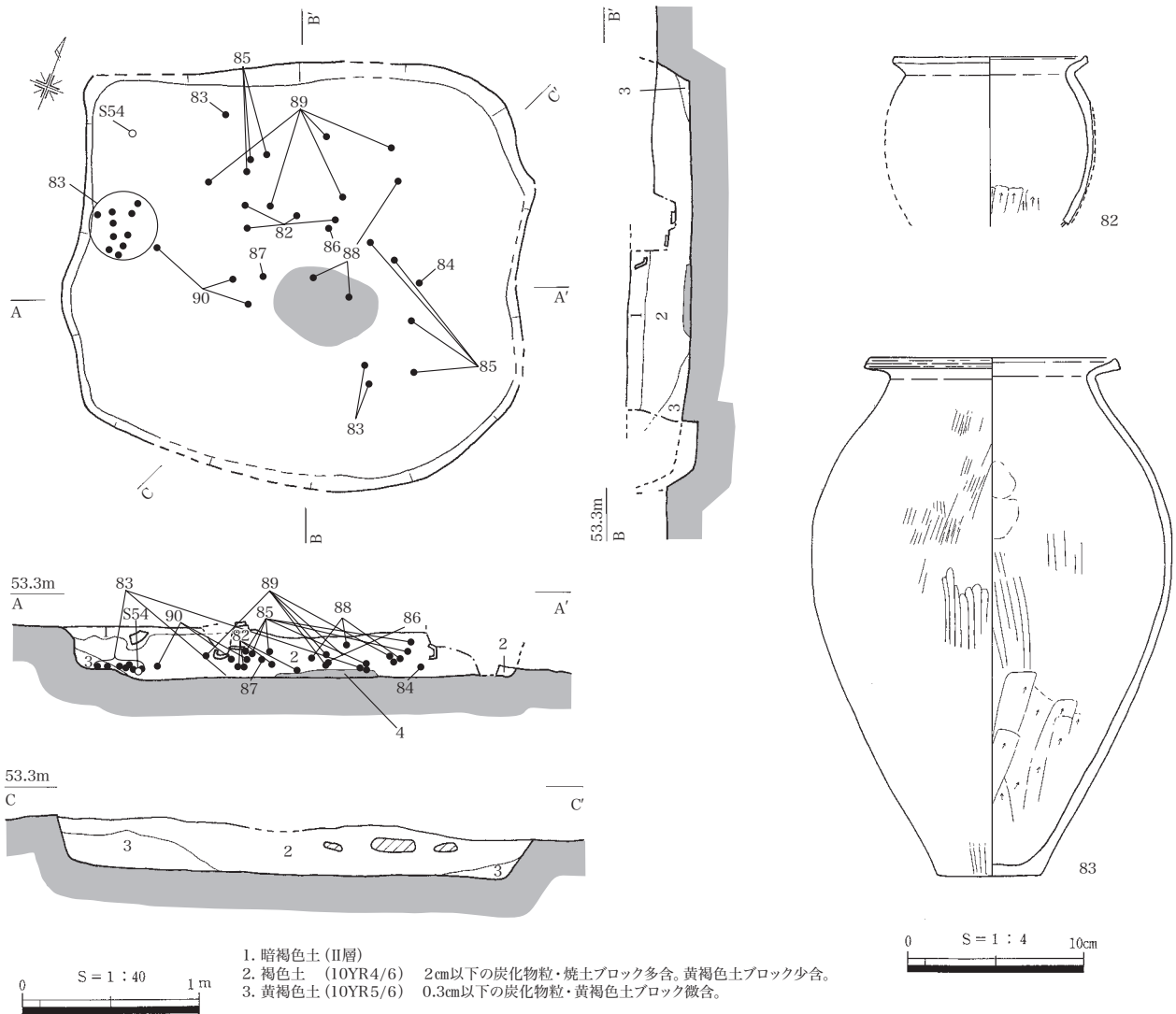
(浅田)



1. オリーブ褐色土 (7.5Y4/3) 0.3~0.5cmの炭化物粒少含。しまり強。
2. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり弱。粘質強。



第42図 SK1・2



第43図 SK3および出土遺物

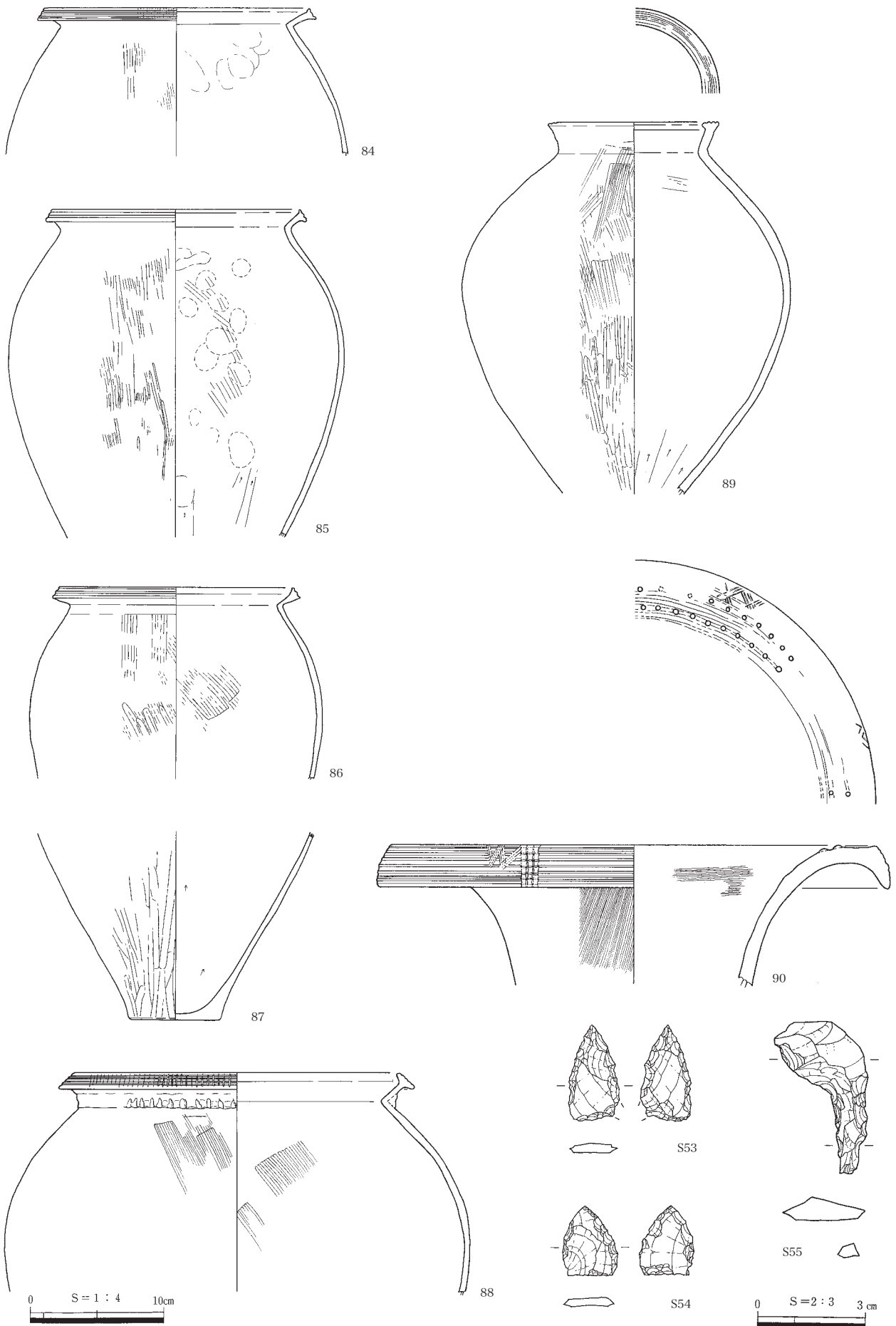
SK3 (第43・44図、PL.12・13・47・61)

位置 D2グリッド、標高53.0mの尾根頂部平坦面に位置し、約0.3m南東にSK4が隣接する。

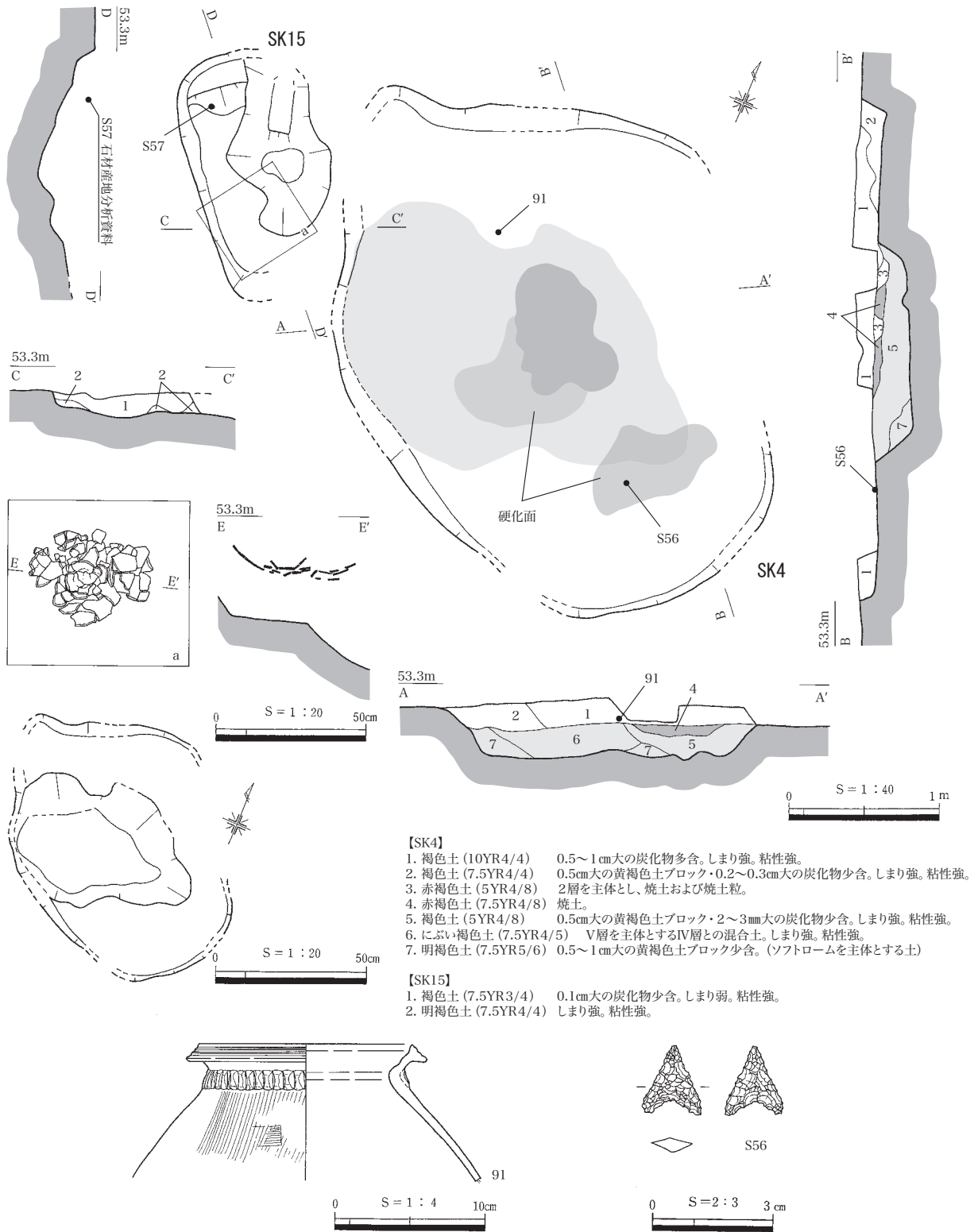
規模と形態 平面形は2.5×2.4mを測る不整な隅丸方形を呈し、検出面からの深さは最大25cmでIV～V層を底面とする。

埋土と遺物の出土状況 浅い竪穴状の土坑である。掘り方の断面形は逆台形を呈し、底面は概ね平坦となる。底面中央に60×40cmの楕円形状の焼土が広がっており、2～5cm程度の厚みをもつ。壁沿いには壁体崩落土とみられる2層が堆積しているが、全体が1層に覆われ埋没する。この1層には多量の遺物が伴っており、焼土ブロックや炭化物粒を多量に含むほか、径30cm程度の扁平な礫なども出土した。遺物は底面からわずかに浮いた状態で平面的には偏り無く出土しているが、同一個体の破片は近接位置になく坑内に散在する。本遺構は廃絶後間もなく遺物の廃棄土坑として利用されており、遺物の出土状況および埋土の所見からすれば、別地点で火を使用した行為の残滓とともに既に破砕状態となった土器等を投棄したと考えられる。サヌカイトの剥片や石鏃、接合関係にある胴部片などが小ブロック状にまとまる範囲が所々認められ、廃棄作業は少量ずつ坑内に放り投げるようなものであったと推測する。

出土遺物 多量の出土遺物のうち、甕82～88、壺89・90、サヌカイト製石鏃S53・54、サヌカイト



第44図 SK3出土遺物



第45図 SK4・15およびSK4出土遺物

製石錐 S55 を図化した。82 は焼成後の二次的な被熱により胴部外面が著しく剥離している。83 ~ 86 はわずかに拡張した口縁に 1 ~ 3 条の凹線をめぐらせるもので、胴部内面上半をハケ・指押さえ、下半 1/3 をヘラケズリによって調整している。83 はやや細長く胴長の甕で、胴部中位付近に最大径をもつ。他の甕は胴部上位 2/3 付近に最大径をもち肩が少し張る形態となる。87 はこのような甕の底部である。88 は T 字状に拡張した口縁に凹線を 4 条めぐらせた後浅い刻目を連続して施す大型の甕である。頸部には突帯を貼り付けヘラ状工具で刺突した後、突帯を上からつまむようにしてナデつけ

る。89は直口壺で、水平方向に拡張した口縁端面に凹線を3条入れる。90は大型の広口壺で、端部を下垂するように大きく拡張した口縁に8条の凹線をめぐらせ、その上から櫛描きの斜格子文を施すとともに3本一對の棒状浮文を貼り付ける。口縁部内面には横断面梯形の貼付突帯を2本以上めぐらせて、その間を凹線状にナデた後、一定間隔で小円孔を連続して穿ち、端部に近い外周部分に櫛描きの斜格子文を施し加飾する。内外面とも目の細かいハケで調整している。S53・54は平基式の鍬である。

時期 本遺構の時期は、出土土器から弥生時代中期後葉(IV-1)と考える。

(高尾)

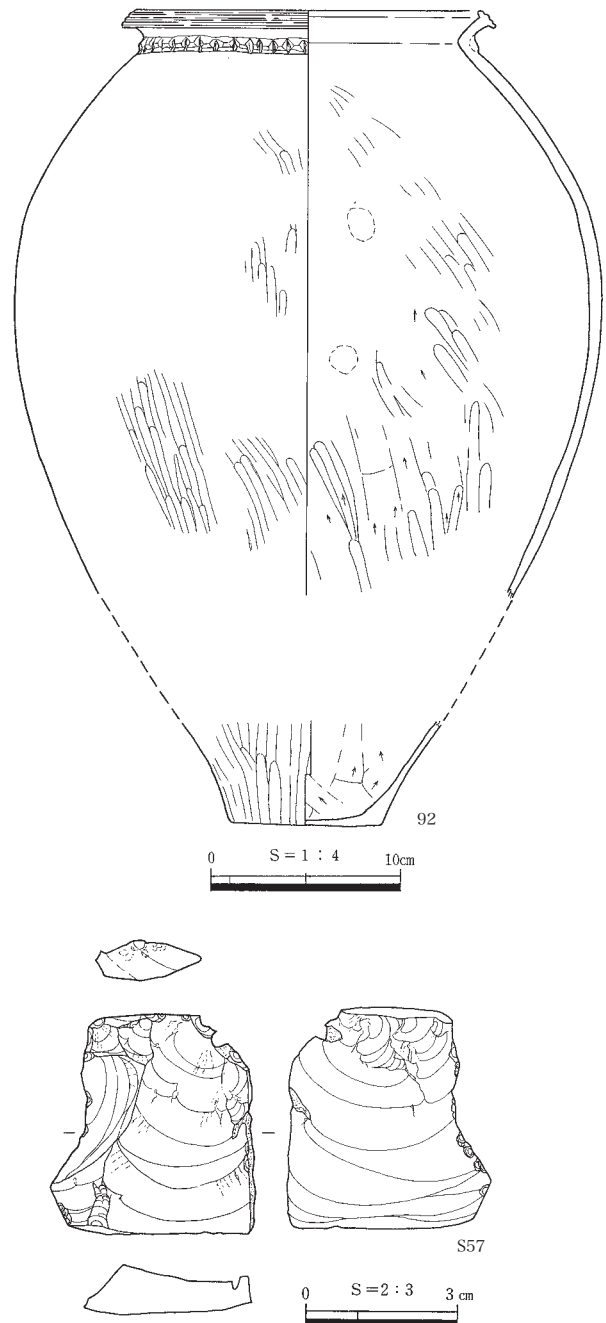
SK4・15 (第45・46図、PL.13・17・47・49・61)
位置 D・E2グリッド、標高53.0mの尾根頂部平坦面に位置する。SK4は南東にSK11が接し、SK15は北西側でSK5と近接する。どちらも遺物を伴う褐色土の広がりをもⅢ層上面で検出したものだが、検出状況からすればSK4がSK15を切って掘り込まれている。またSK4南東壁沿いでP11が重複するが、SK4底面で検出しているため両者の切合関係は不明である。

SK4

規模と形態 SK4は平面形が長軸3.9m、短軸2.9mの不整楕円形を呈し、検出面からの深さは最大で16cmを測る。壁面の立ち上がりは緩やかで、全体は浅い堅穴状となる。

埋土と遺物の出土状況 埋土は大きく2層に分かれ、遺物は1層に伴って出土している。基本的にIV層が底面となるが、中心部から西壁際にかけてはV・VI層の混合土による貼床層が認められた。土坑中央の貼床上面に96×60cmの不整楕円形を呈す焼土面が形成されており、特に南半部の周縁付近が橙色(2.5YR7/8)～暗赤褐色(2.5YR3/6)となり強く被熱していた。また幅80～90cmの硬化面が2箇所形成されていて、1つは焼土面に接する。以上の状況から、貼床を施した後に築炉してそこを中心にならかの作業が行われていたと推測するが、焼土および焼土周辺埋土の水洗選別では鉄片や鍛造剥片等は検出されず、埋土中からも生産関連の遺物は出土していないため性格は不明である。

出土遺物 図化した遺物のうち甕91は底面付近の埋土中から、黒曜石製石鍬S56は底面から出土した。91は指頭圧痕貼付突帯後、さらにナデている。肩はなだらかで、胴部最大径は中位付近に下がるものと推測する。



第46図 SK15出土遺物

SK15

規模と形態 SK15は東側の立ち上がりが不明だが、概ね長軸1.6m、短軸1.1mの不整楕円形を呈すと考えられる。底面は平坦でなく凹凸がある。

埋土と遺物の出土状況 検出面に近い埋土上層でほぼ完形の甕92と黒曜石剥片S57が出土した。92は口縁部～胴部片が皿状に広がり、その中心に底部がのった状態で検出され、さながら花卉状を呈していた。以上のことから、意図的に破碎して廃棄されたものと想定される。

92は肩が張る胴長の甕で、口縁部は磨減が顕著である。頸部に突帯を貼付けた後に刻目を施し、さらにナデ付けている。内面はケズリ後へラミガキを施している。

時期 SK4、SK15の時期はともに弥生時代中期後葉(IV-1)と考える。(高尾)

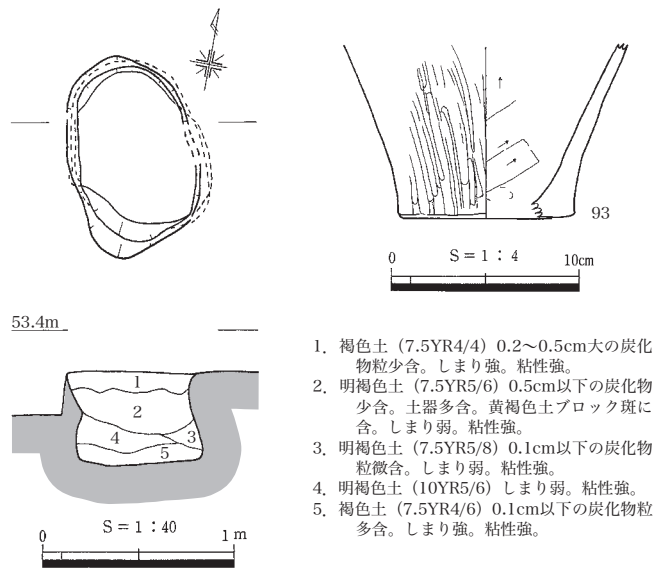
SK5 (第47図、PL.13・48)

位置 E2グリッド、標高53.0mの尾根頂部平坦面に位置し、南側にSK15が隣接する。

規模と形態 平面形は長軸0.9m、短軸0.6mの楕円形を呈し、開口部よりも底面が広く断面形はいびつなフラスコ状となる。

埋土と遺物の出土状況 埋土は5層に分かれ、炭化物を多量に含む5層が堆積した後、壁体が崩落して3・4層が形成され、1・2層が自然堆積し埋没する。遺物は1・2・5層から弥生土器の小片がわずかに出土し、甕底部93を図化した。

時期 出土土器より本遺構の時期は弥生時代中期後葉と考える。形態からすれば貯蔵穴であろう。(高尾)



第47図 SK5および出土遺物

SK6 (第48・49図、写真6、PL.13、14)

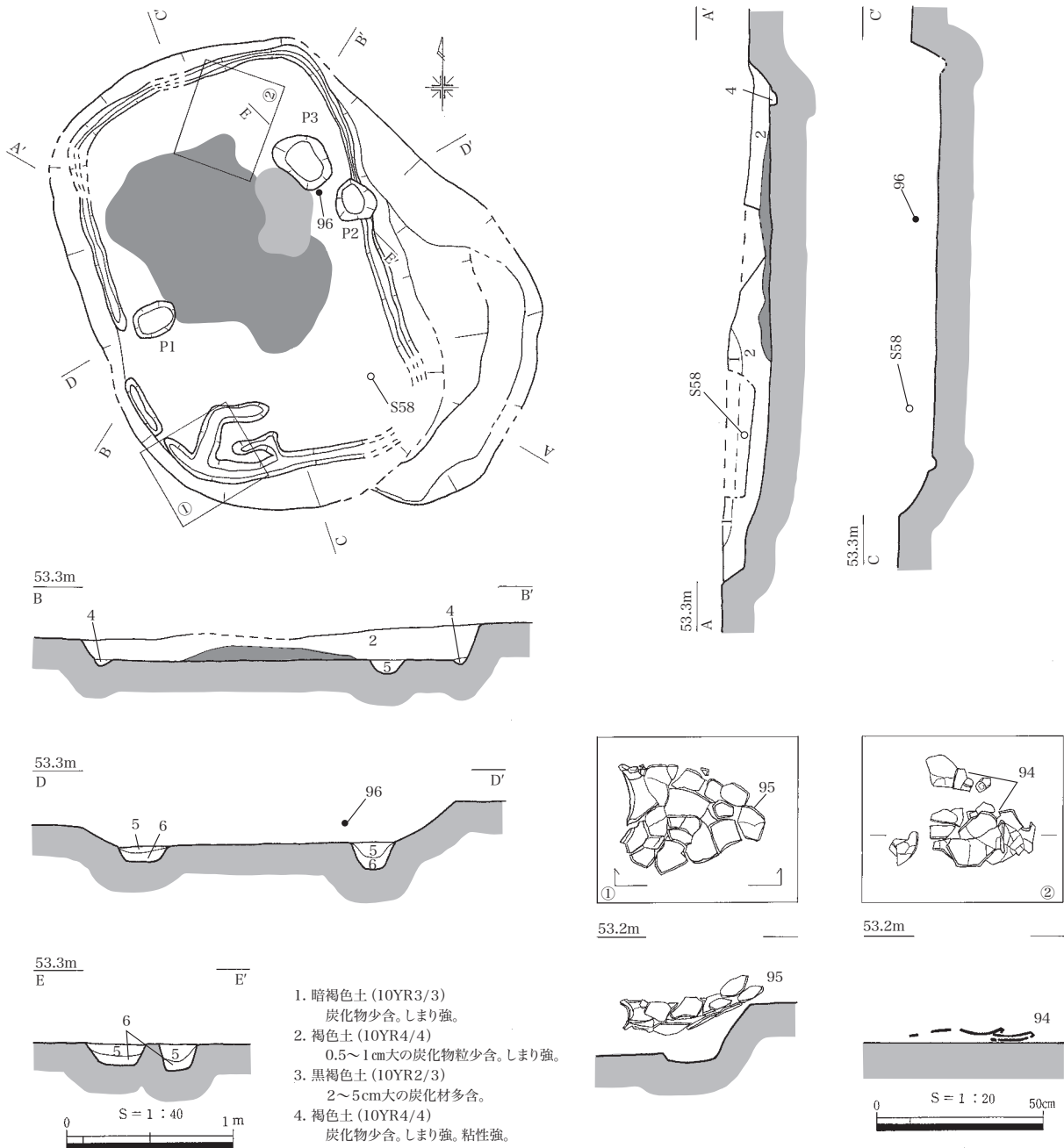
位置 E3グリッド、標高約53.0mの尾根頂部の平坦地にあり、SI1の南西側に位置する。

調査の経過 II層除去後に炭化物を含む暗褐色土が広がる部分を検出した。プランの輪郭が不明瞭であったためIII層上面から面的に掘り下げ、同時にサブトレンチ(A-A'・B-B')を設定した。トレンチにより、壁面の立ち上がりと底面付近の炭層を確認したことから、竪穴状の土坑として調査を行った。

規模と形態 平面形は南西隅がやや張り出した長方形を呈する。規模は長辺2.8m、短辺1.8mを測り、検出面から底面までの深さは約21cmである。底面上にて壁溝およびピットを3基、焼土面を1か所検出した。また、底面中央部分に厚さ5~8cmの炭化物層が堆積していることを確認した。



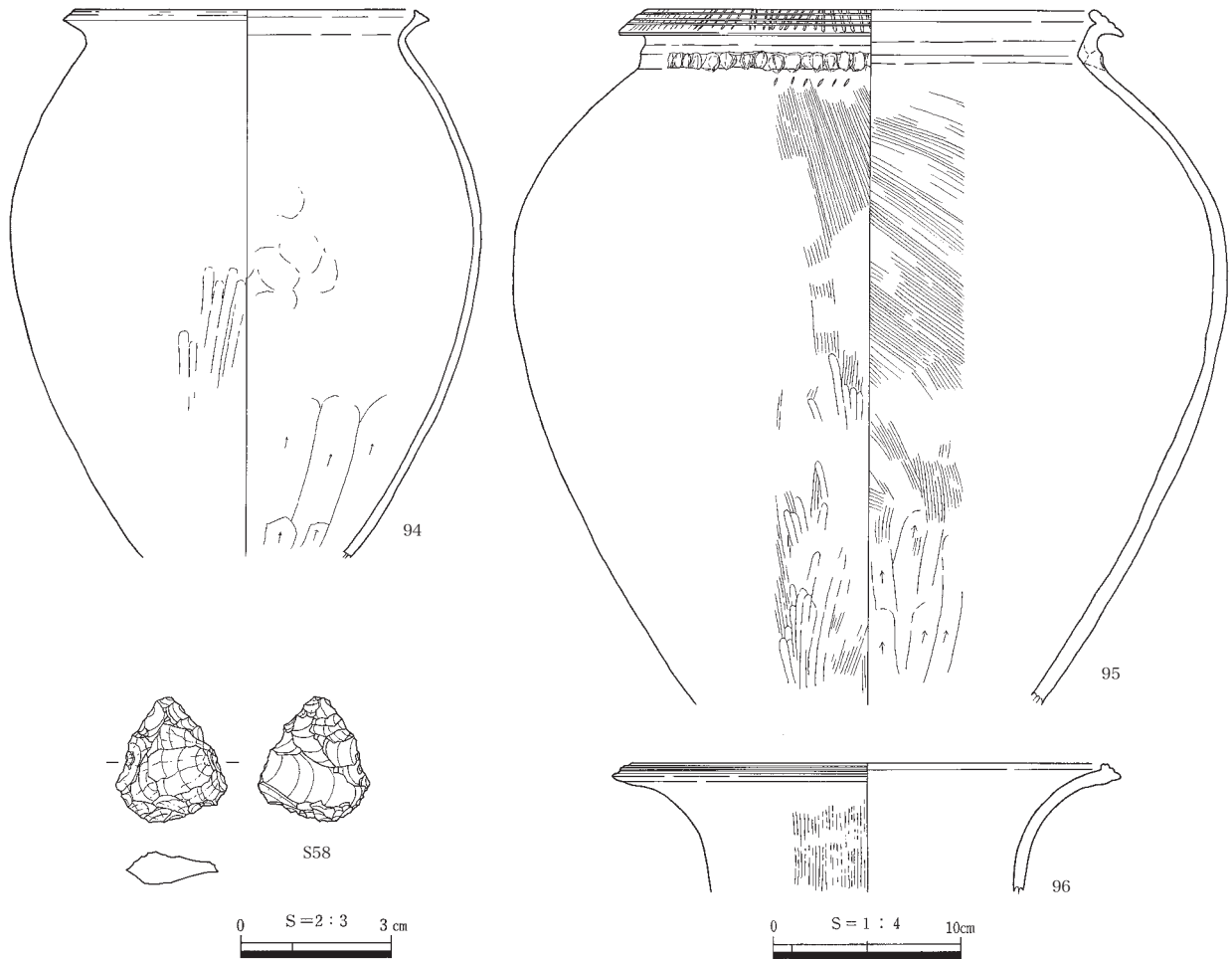
写真6 SK6出土甕94



第48図 SK6

P1、P2は柱穴と考えられる。規模はそれぞれP1が径30cm、深さ10cm、P2が径28cm、深さ16cmである。柱穴が2基しかなく、両者とも浅い掘り込みであることから、上屋の構造は簡易なものであったと推察される。P3は焼土面と接しており、柱穴としては考えにくいため、用途は不明である。焼土面はP3の南西側にあり、炭化物層はさらにその南西側で焼土面を囲むように広がっている。炭化物層の中には棒状の比較的形をとどめているものも見られた(PL.13-5)。焼土面と炭化物層は、その位置から一連のものであり燃やされた物が集められて炭化物層を形成したものとする。焼土面上には炭化物は見られないことから、火を焚く場所と燃え滓を集めておく場所とが区別されていたことが見て取れる。

埋土と遺物の出土状況 遺物は主に2層および床面付近から出土している。遺物の中で注目されるのが、南西側壁面で出土した甕95と北側床面で出土した甕94である。それぞれ全体のほぼ1/2に割ら



第49図 SK6出土遺物

れた状態で出土している (PL. 14-2)。特に 94 は同一固体が半分に割られ、両者の内面を上に向けて重ねられた状態で出土していることから、何らかの意図をもって置かれたことが窺われる。

出土遺物 94 は口縁部に 1 条以上の凹線を持つ。風化により遺存状態が悪いが、外面はヘラミガキ、内面底部上 1/3 程度まではヘラケズリが確認できた。95 は断面 T 字状を呈し大きく拡張した口縁部に、3 条の凹線が施され、頸部に指頭圧痕貼付突帯を持つ大型甕である。96 は壺の口縁部で、3 条の凹線が施される。S58 はチャート製の石鏃で、未成品である。

また、炭化物層を全量持ち帰り水洗選別した結果、アワ、ササゲ属の炭化種子が検出された。(第 4 章第 4 節、P155 ~ 157 参照)

時期 遺構の時期としては、出土遺物が IV-1 様式に比定されることから弥生時代中期後葉のものである。

(浅田)

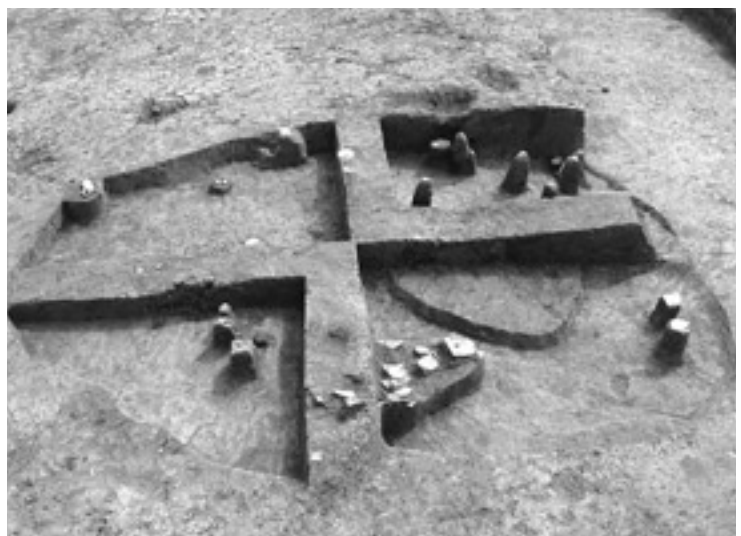


写真7 SK8炭化物層・遺物出土状況 (北東から)

SK7 (第50図、PL.15)

位置 C2グリッド、標高約51.5mの調査区北側尾根の東斜面にある。

調査の経過 II層を除去したところで、炭化物を少し含む暗褐色土の長方形のプランを検出した。

規模と形態 規模は長軸2.4m、短軸1.6mを測り、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。検出面から底面までの深さは中央付近でもっとも深く、最大32cmである。

埋土 埋土は4層からなり、尾根の高所から低所に向かって流れこむように堆積している。このことから、埋没は自然堆積によるものと考えられる。

出土遺物 遺物は主に4層中から土器片が数点出土している。しかし、いずれも小片で図示できるものはなかった。

時期 出土した土器片が弥生土器と思われ、周囲の遺構の状況からすれば弥生時代中期後葉の可能性があろう。用途については不明である。

(浅田)

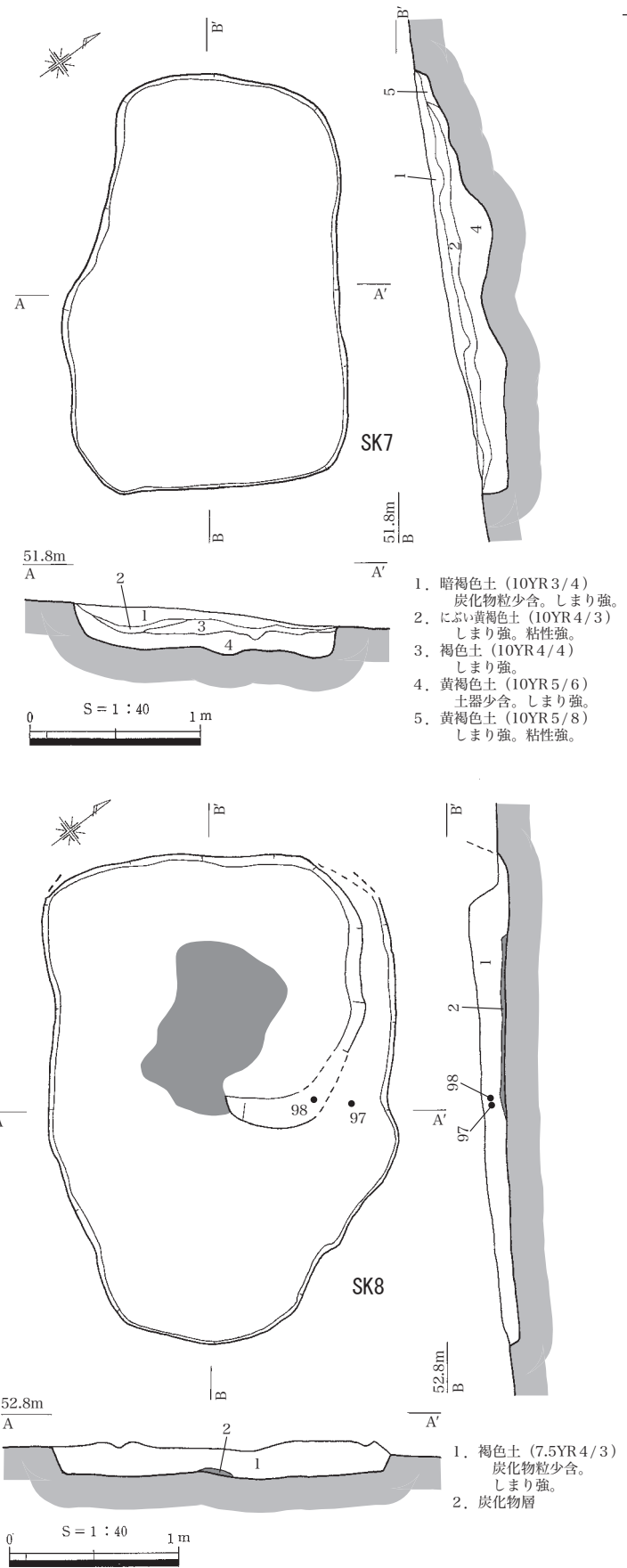
SK8 (第50・51図、写真7、PL.15)

位置 調査区北側のE4グリッド、標高約52.7mの尾根頂部付近の傾斜変換点に位置する。

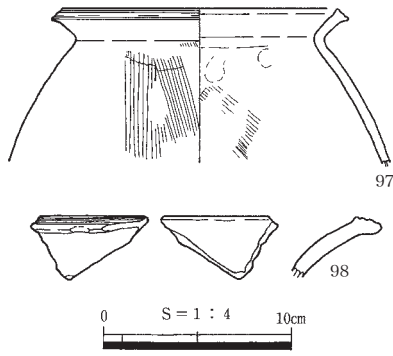
調査の経過 II層を除去したところで、炭化物と土器片を含む褐色土の長方形プランを検出した。また、北西側は試掘トレンチにより、底面の一部と掘り方を確認することができた。

規模と形態 本遺構は試掘調査によって当初竪穴住居(SI-03)と想定されていた(小泉・石賀編2002)が、調査の結果土坑であることを確認した。

規模は長軸2.9m、短軸2.0mを測り、検出面から底面までの深さは北西側で最も深く28cmである。壁面はやや外側に傾斜して立ち上がる。底面はIV層で、ほぼ平坦である。



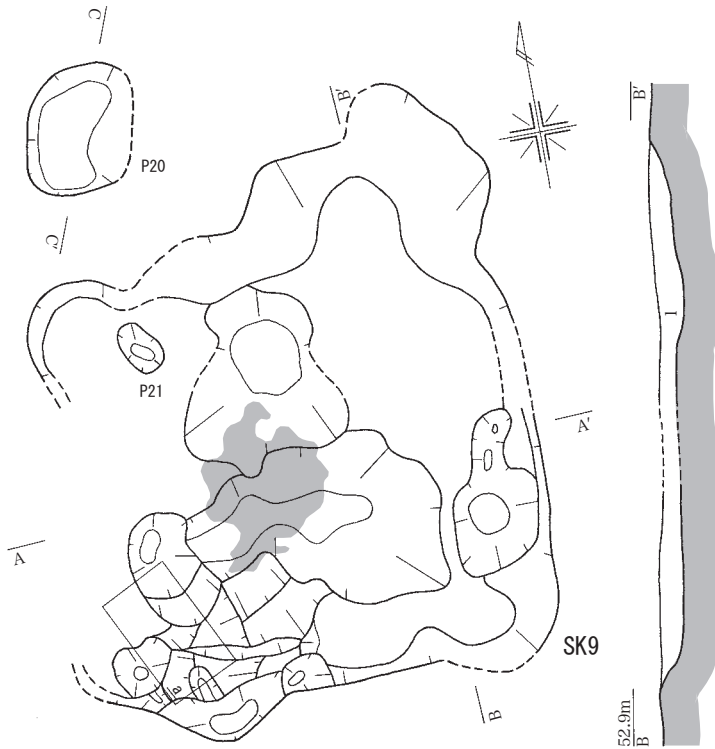
第50図 SK7・8



第51図 SK8出土遺物

埋土と遺物の出土状況 底面中央付近で、土器片が比較的まとまって出土し、その下には炭化物層が堆積していることが確認された。炭化物層周辺およびその下には被熱の痕跡は認められなかった。このことから、炭化物は土器と共に土坑内に投棄された可能性が考えられる。

出土遺物 遺物は2点図示した。97は甕、98は壺の口縁部である。いずれも口縁部に2～3条の凹線が施されるもので、ともにIV-1様式の範疇に収まるものである。



時期 時期は出土した遺物から、弥生時代中期後葉と考えられる。用途は不明である。

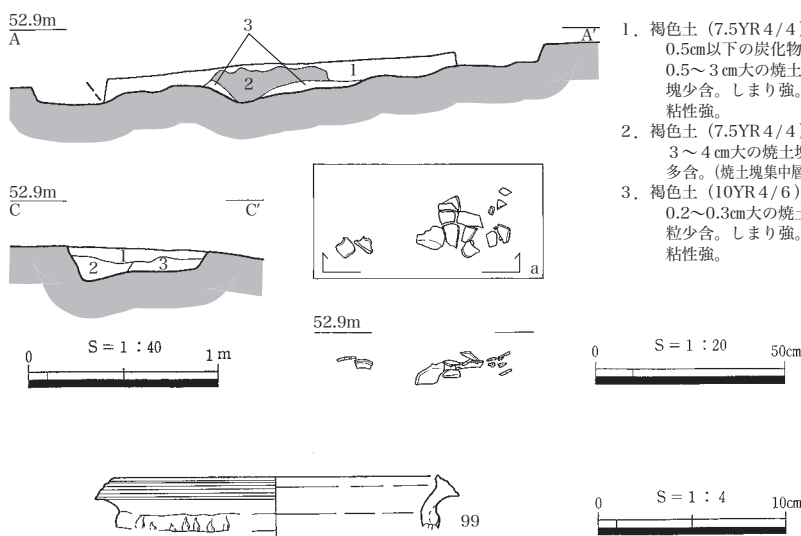
(浅田)

SK9 (第52図、PL.15・48・60)

位置 F4グリッド、尾根頂部からやや下った標高52.6mの平坦面に位置し、北東約2.5mにSK6、南側1.5mにSX4がある。

調査の経過 III層上面精査中、焼土ブロックが集中する褐色土の広がりとして検出した。

規模と形態 規模は長軸3.6m、短軸3.2mを測るが平面不定形で、底面もいびつで凹凸が著しい。規模に比して非常に浅いこともあり、旧地形の窪みという可能性もある。土坑中央に1～6cm大の焼成粘土塊がまとまって出土したが集中する範囲の底面に被熱痕跡がみられないため、原位置で焼成したものではない。焼成粘土塊は大小あり多様な形状を呈すが、4～6cm大の塊の中には焼成前に成形された平坦面をもつものが複数認められるので、これらは本来的には粘土で作られた構築物で、それが破壊された後に遺棄されたものと推測する。



第52図 SK9・P20および出土遺物

焼成粘土塊は大小あり多様な形状を呈すが、4～6cm大の塊の中には焼成前に成形された平坦面をもつものが複数認められるので、これらは本来的には粘土で作られた構築物で、それが破壊された後に遺棄されたものと推測する。

時期 出土土器の特徴から、本遺構の時期は弥生時代中期後葉（IV - 1）と考える。なお、隣接するP20でも焼成粘土塊が多量に出土しており、同様の性格が想定される。土器は出土していないが、埋土は同じであり、同時期の可能性が高い。（高尾）

SK10（第53図、PL. 15）

位置 F4グリッド、標高約52.3mの緩斜面地にあり、SX2の西側に位置する。

調査の経過 II層除去後に炭化物を含む黒褐色土の楕円形プランを検出した。人頭大の礫がプランに接するように南側に検出されており、また東側にはSX2が検出されていたことから、当遺構も当初は墓の可能性を考えたが、埋土や掘方に墓の痕跡が認められなかったことから土坑と判断した。

規模と形態 規模は長軸約1.8m、短軸約1.2mを測り、検出面から底面までの深さは最大55.9cmである。埋土は主に褐色系の土からなる。7層は壁体の崩落によるもので、地山と酷似した赤褐色を呈する。次に3～6層は地山のブロックを含む層がレンズ状に堆積し、最後に1層が窪み状になっている部分に堆積し、埋没が終了する。底面に壁体の崩落による堆積が見られ、その上位の層がレンズ状の堆積を呈していることから、自然堆積による埋没と考えられる。

出土遺物 遺物は1層中から、甕の口縁部100が出土している。風化が著しく、調整は不明瞭であるが、口縁内面はヨコナデが施される。

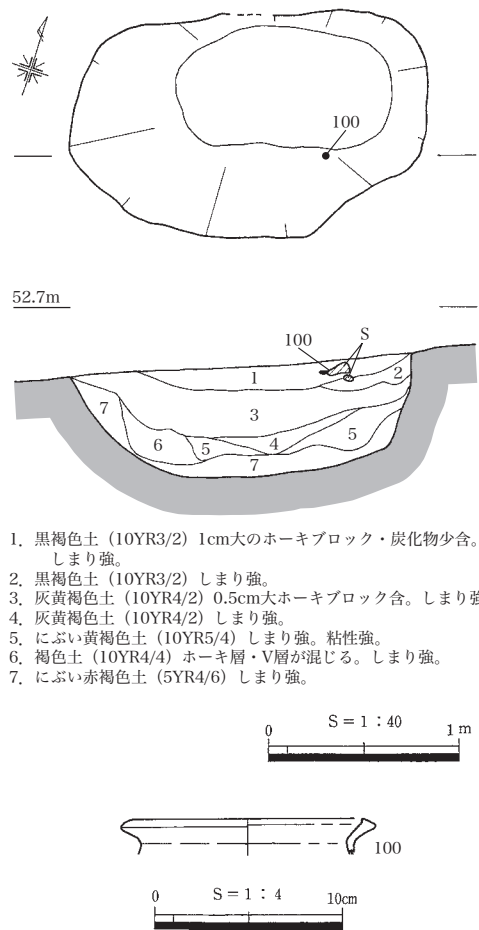
時期 遺構の時期は、検出面の状況や、出土遺物がIV様式の範疇に収まることから、弥生時代中期後葉には埋没していたものと考えられる。

（浅田）

SK11（第54図、PL. 15）

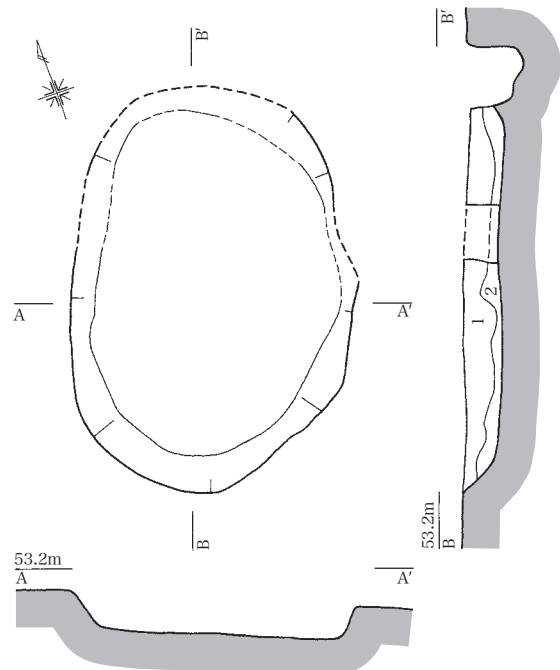
位置 D2・3グリッド、標高53.0mの尾根頂部平坦面に位置し、西側にSK4が隣接する。

規模と形態 平面形は長軸約2.1m、短軸1.5mの不整楕円形を呈す浅い皿状の土坑で、検出面からの深さは最大で18cmを測る。



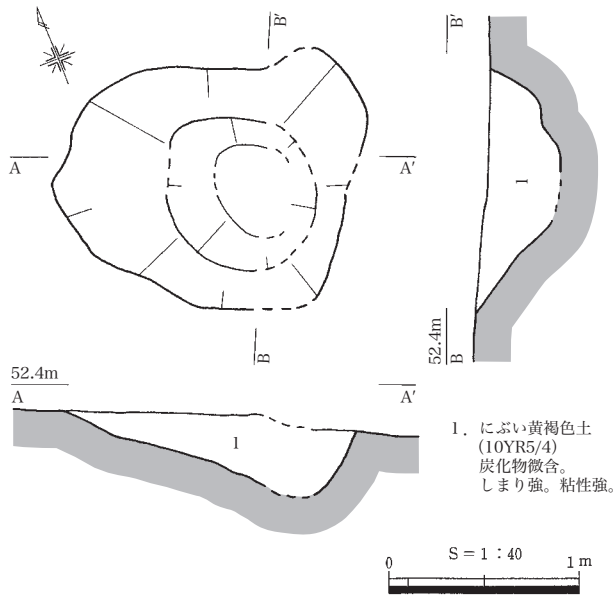
1. 黒褐色土（10YR3/2）1cm大のホーキブロック・炭化物少含。しまり強。
2. 黒褐色土（10YR3/2）しまり強。
3. 灰黄褐色土（10YR4/2）0.5cm大ホーキブロック含。しまり強。
4. 灰黄褐色土（10YR4/2）しまり強。
5. にぶい黄褐色土（10YR5/4）しまり強。粘性強。
6. 褐色土（10YR4/4）ホーキ層・V層が混じる。しまり強。
7. にぶい赤褐色土（5YR4/6）しまり強。

第53図 SK10および出土遺物



1. 褐色土（10YR4/6）0.5cm以下の炭化物粒多含。しまり強。粘性強。
2. 明褐色土（7.5YR5/6）0.3cm以下の炭化物粒・白色砂礫少含。しまり強。粘性強。

第54図 SK11



1. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 炭化物微含。しまり強。粘性強。

第55図 SK12

埋土と遺物の出土状況 埋土は多量の炭化物を含む1層を主体とし、弥生土器の胴部片が少量出土した。

時期 出土遺物で図化できるものはないが、周囲の状況等から弥生時代中期後葉の遺構である可能性が高い。

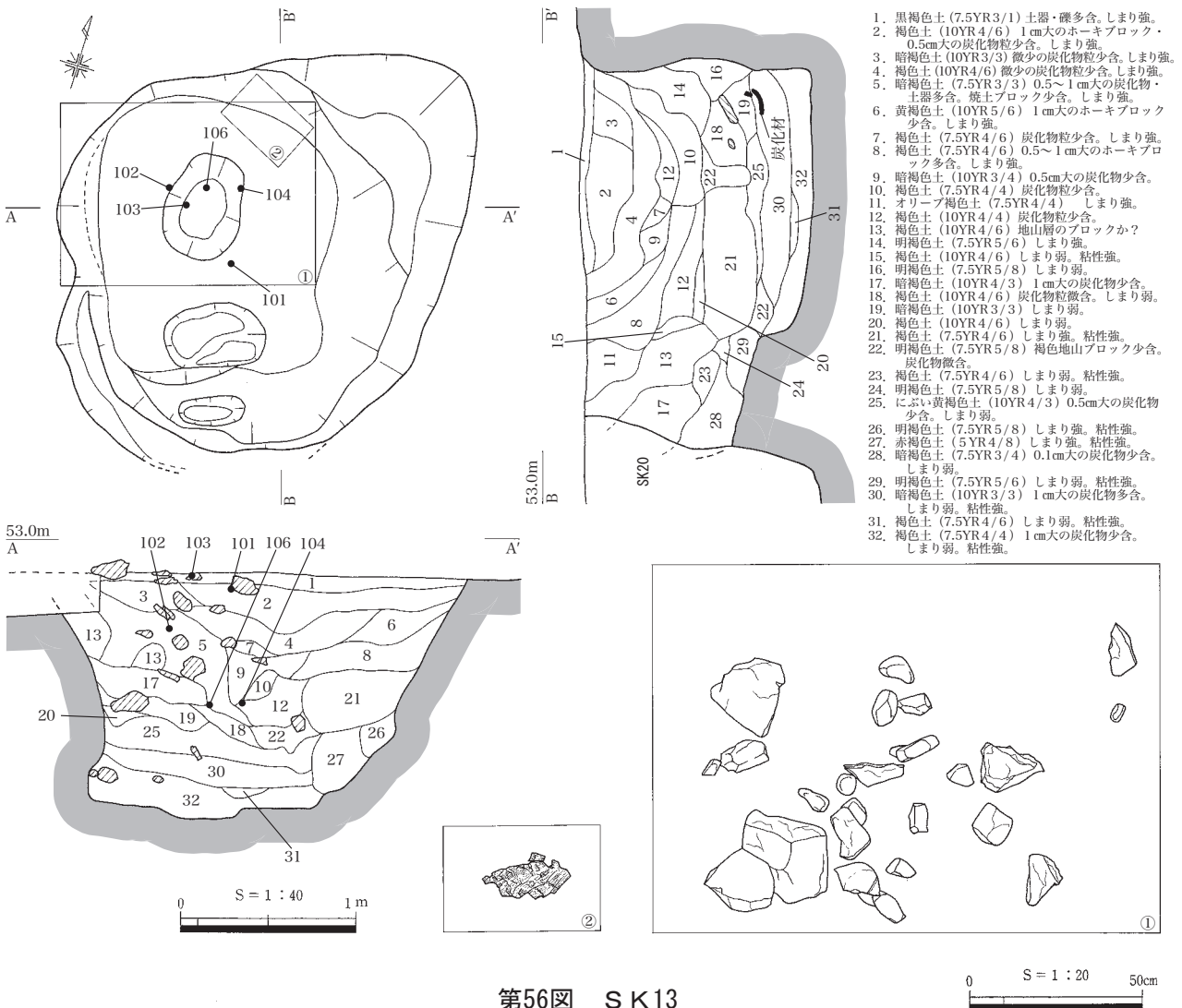
(高尾)

SK12 (第55図、PL. 15)

位置 F4～5グリッド、標高約52.2mの尾根鞍部の傾斜変換点にあり、SK10の南西約3mの場所に位置する。

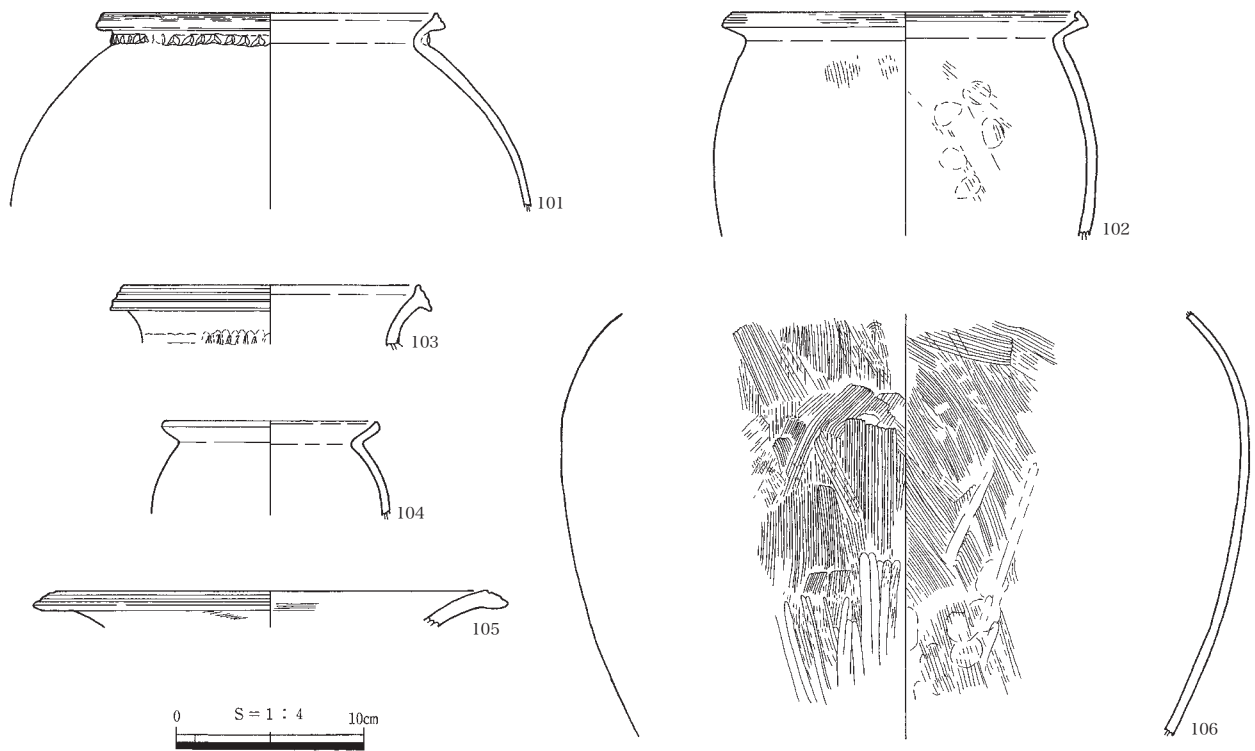
調査の経過 II層除去後、炭化物をわずかに含む

黄褐色土の広がる部分を検出した。埋土が基盤層であるIII層に似ておりプランが明瞭に検出できなかったため、さらにIII層上面を掘り下げてトレンチ(A-A'、B-B')を設定した。これにより掘



1. 黒褐色土 (7.5YR3/1) 土器・礫多含。しまり強。
2. 褐色土 (10YR4/6) 1cm大のホーキブロック・0.5cm大の炭化物粒少含。しまり強。
3. 暗褐色土 (10YR3/3) 微少の炭化物粒少含。しまり強。
4. 褐色土 (10YR4/6) 微少の炭化物粒少含。しまり強。
5. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 0.5～1cm大の炭化物・土器多含。焼土ブロック少含。しまり強。
6. 黄褐色土 (10YR5/6) 1cm大のホーキブロック少含。しまり強。
7. 褐色土 (7.5YR4/6) 炭化物粒少含。しまり強。
8. 褐色土 (7.5YR4/6) 0.5～1cm大のホーキブロック多含。しまり強。
9. 暗褐色土 (10YR3/4) 0.5cm大の炭化物少含。
10. 褐色土 (7.5YR4/4) 炭化物粒少含。
11. オリーブ褐色土 (7.5YR4/4) しまり強。
12. 褐色土 (10YR4/4) 炭化物粒少含。
13. 褐色土 (10YR4/6) 地山層のブロックか?
14. 明褐色土 (7.5YR5/6) しまり強。
15. 褐色土 (10YR4/6) しまり弱。粘性強。
16. 明褐色土 (7.5YR5/8) しまり弱。
17. 暗褐色土 (10YR4/3) 1cm大の炭化物少含。
18. 褐色土 (10YR4/6) 炭化物粒微含。しまり弱。
19. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり弱。
20. 褐色土 (10YR4/6) しまり弱。
21. 褐色土 (7.5YR4/6) しまり強。粘性強。
22. 明褐色土 (7.5YR5/8) 褐色地山ブロック少含。炭化物微含。
23. 褐色土 (7.5YR4/6) しまり弱。粘性強。
24. 明褐色土 (7.5YR5/8) しまり弱。
25. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 0.5cm大の炭化物少含。しまり弱。
26. 明褐色土 (7.5YR5/8) しまり強。粘性強。
27. 赤褐色土 (5YR4/8) しまり強。粘性強。
28. 暗褐色土 (7.5YR3/4) 0.1cm大の炭化物少含。しまり弱。
29. 明褐色土 (7.5YR5/6) しまり弱。粘性強。
30. 暗褐色土 (10YR3/3) 1cm大の炭化物多含。しまり弱。粘性強。
31. 褐色土 (7.5YR4/6) しまり弱。粘性強。
32. 褐色土 (7.5YR4/4) 1cm大の炭化物少含。しまり弱。粘性強。

第56図 SK13



第57図 SK13出土遺物

り方と平面プランが確認でき、土坑と判断して調査を行った。

規模と形態 検出した規模は長軸 1.5 m、短軸 1.3 m で、平面形は不整楕円形を呈する。検出面から底面までの深さは最大 38 cm を測る。底面はV層であり、断面は楕鉢状を呈する。遺物は出土していない。

時期 遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが、周囲の状況から弥生時代中期と想定される。用途についても、詳細は不明である。

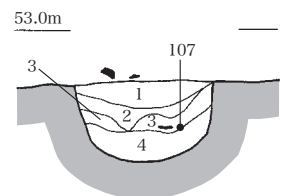
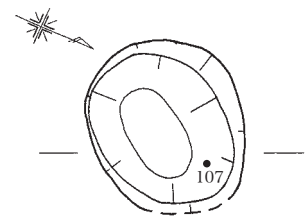
(浅田)

SK13 (第56・57図、PL.16)

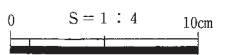
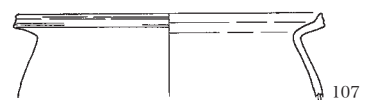
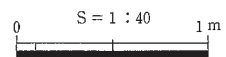
位置 E4 グリッド、標高約 52.8 m の平坦地にある。南東側で SK20 と重複しており、SK13 が切られる。

調査の経過 III層上面において、土器と共に人頭大の礫が集中する部分を検出した。周囲を精査したところ、不整台形状のプランを検出した。

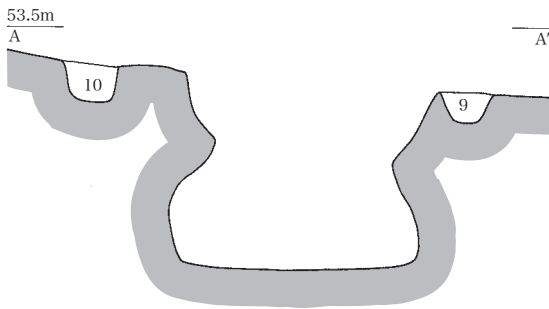
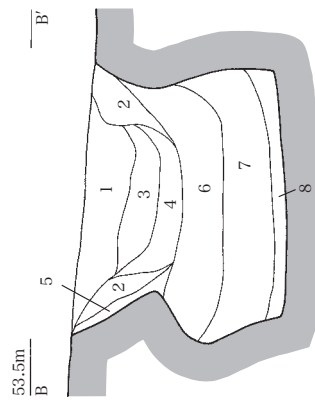
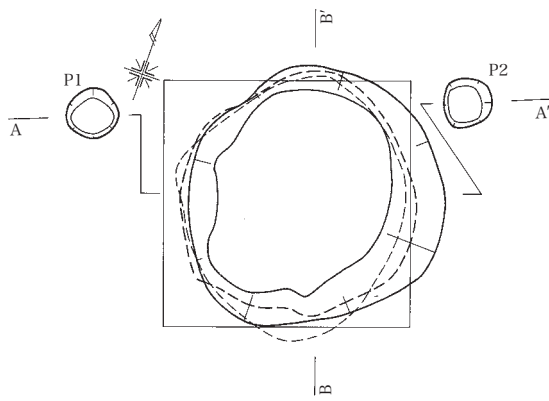
規模と形態 検出した規模は長軸 2.5 m、短軸 2.2 m であり、検出面から底面までの深さは 1.4 m である。底面はVI層まで掘り込まれており、ほぼ平坦になっている。壁面はほぼ垂直に立ち上がるが、北西側はなだらかに外側に傾斜して立ち上がる。また、その反対側の南西側では底面付近が外側に広がり、部分的に袋状の掘り込みを呈している。底面中央付近から南側壁面にかけて、深さ 5 cm 程度で平面が楕円形を呈するピット状の浅い落ち込み 3箇所確認された。当遺構の用途としては、その形態から貯蔵施設を想定するが、開口部分が短軸でも 2.2 m と大変広くなっており、貯蔵施設とするなら、当然開口部をふさぐ上屋の存在が想定さ



1. 褐色土 (10YR4/6)
0.5cm大の炭化物少含。しまり強。
2. 褐色土 (10YR4/4)
しまり強。粘性強。
3. 褐色土 (7.5YR4/4)
0.3cm大の炭化物少含。しまり強。
4. にぶい褐色土 (7.5YR5/4)
炭化物少含。しまり強。粘性強



第58図 SK14および出土遺物

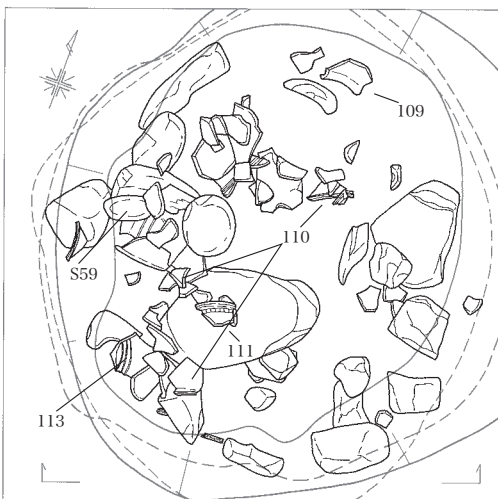


1. 暗褐色土 (10YR 3/4) 0.5 cm炭化物・焼土粒少含。しまり強。
2. 褐色土 (10YR 4/6) しまり強。
3. 暗褐色土 (10YR 3/4) 炭化物粒微含。しまり強。
4. 暗褐色土 (10YR 3/4) しまり強。
5. 黄褐色土 (10YR 5/6) ホーキブロック多含。しまり強。
6. 黒褐色土 (10YR 3/2) 1 cm大の炭化物多含。礫・土器多含。
7. 褐色土 (10YR 4/4) 炭化物多含。しまり弱。粘性強。
8. にぶい褐色土 (7.5YR 5/4) しまり強。粘性強い。(貼床層)
9. 暗褐色土 (10YR 3/4) ホーキブロック・炭化物粒子少含。粘性強。
10. 暗褐色土 (10YR 3/4) 粘性強。

S = 1 : 40
0 1 m

れる。底面中央のピットはこの上屋を支えるために棒状に立て置かれた支柱の痕跡と考えた。壁面近くのピットは長軸が壁面に対して平行になっていることから、土坑内に降りるための梯子状の構造物を固定した痕跡と推測する。

埋土と遺物の出土状況 遺物は上層から下層に至るまで各層に見られ、円礫、角礫に加えて土器片も多く出土している。いずれも遺構に伴うものではなく、埋没過程において、窪地になっ

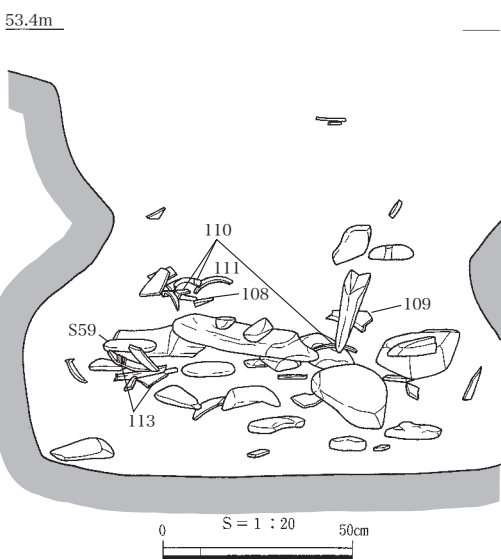


たところへ投棄されたものと考えられる。底面付近に堆積する23、25層は他の層に比べ炭化物を多く含むしまりの弱い層である。23層の中からは長さ24 cm、幅1 cm、厚さ1 cmの板状の炭化材も出土している。また礫の中には被熱の痕跡をとどめるものが含まれていたことから、別の場所で礫と火を使用する行為が為された後に、燃え滓や礫を廃棄された土坑内に投げ入れたことが推察される。

埋土は主に炭化物を含む暗褐色土及び褐色土からなり、壁体の崩落に由来する地山のブロック状の堆積も見られる。全体としてレンズ状に堆積しており、壁体の崩落も見られることから、自然堆積と人為的な埋め戻し(廃棄)を繰り返して埋没していったと理解できる。

出土遺物 遺物は甕101～104、壺105が出土している。いずれもIV-1様式に比定されるものである。

時期 当遺構の時期は、出土遺物から弥生時代中期後葉のものとする。(浅田)



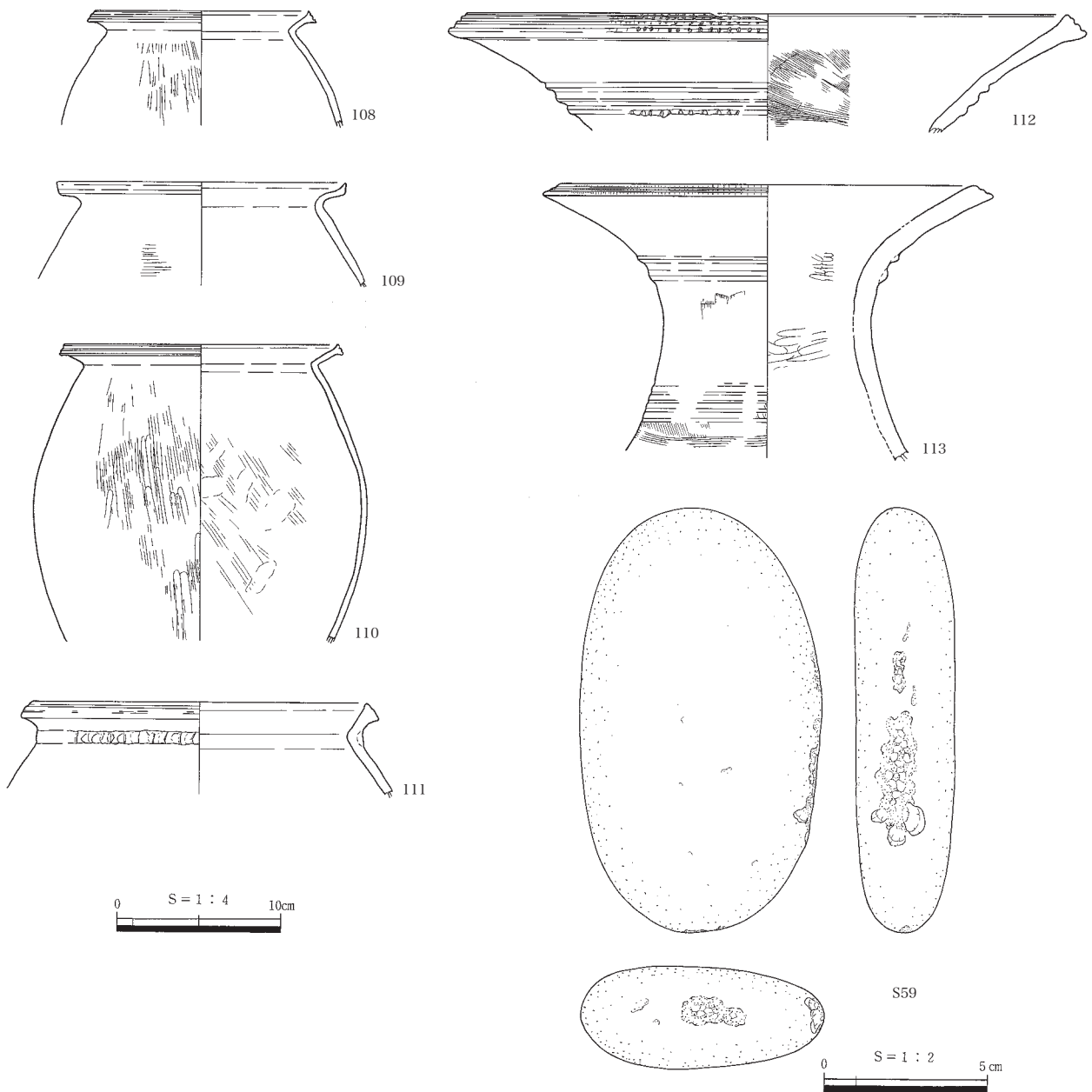
S = 1 : 20
0 50 cm

第59図 SK16

SK14 (第58図、PL. 17)

位置 F3グリッド、標高約52.7 mの傾斜変換点に近い緩斜面地にあり、SK1の南西側に位置する。

調査の経過 調査区内に設定したサブトレンチにより掘り方が確認され、Ⅲ層上面にて円形プランを検出した。



第60図 SK16出土遺物

規模と形態 規模は長軸 95 cm、短軸 85 cmで、検出面から底面までの深さは 40 cmである。掘り方断面は碗状を呈する。

出土遺物 遺物は検出面から底面付近にかけて土器片が出土している。甕 107 はIV-1 様式の特徴を示すものである。

時期 遺構の時期としては、出土遺物から弥生時代中期後葉である。用途は不明である。

(浅田)

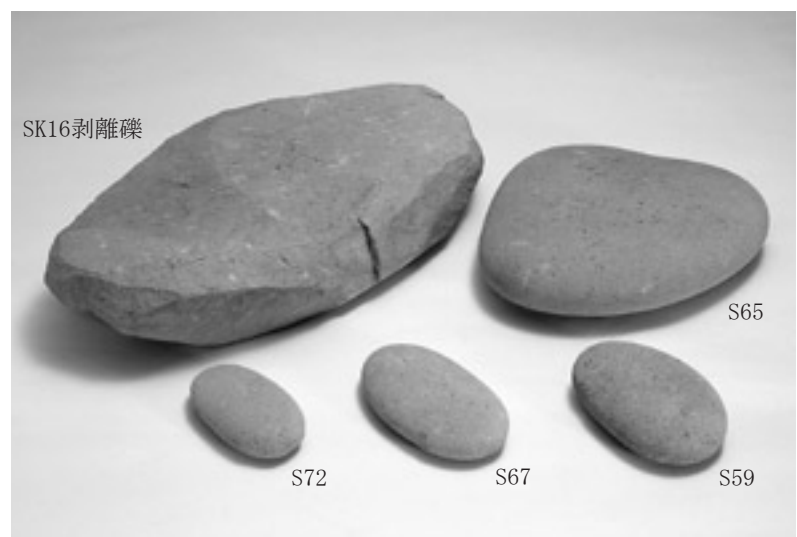
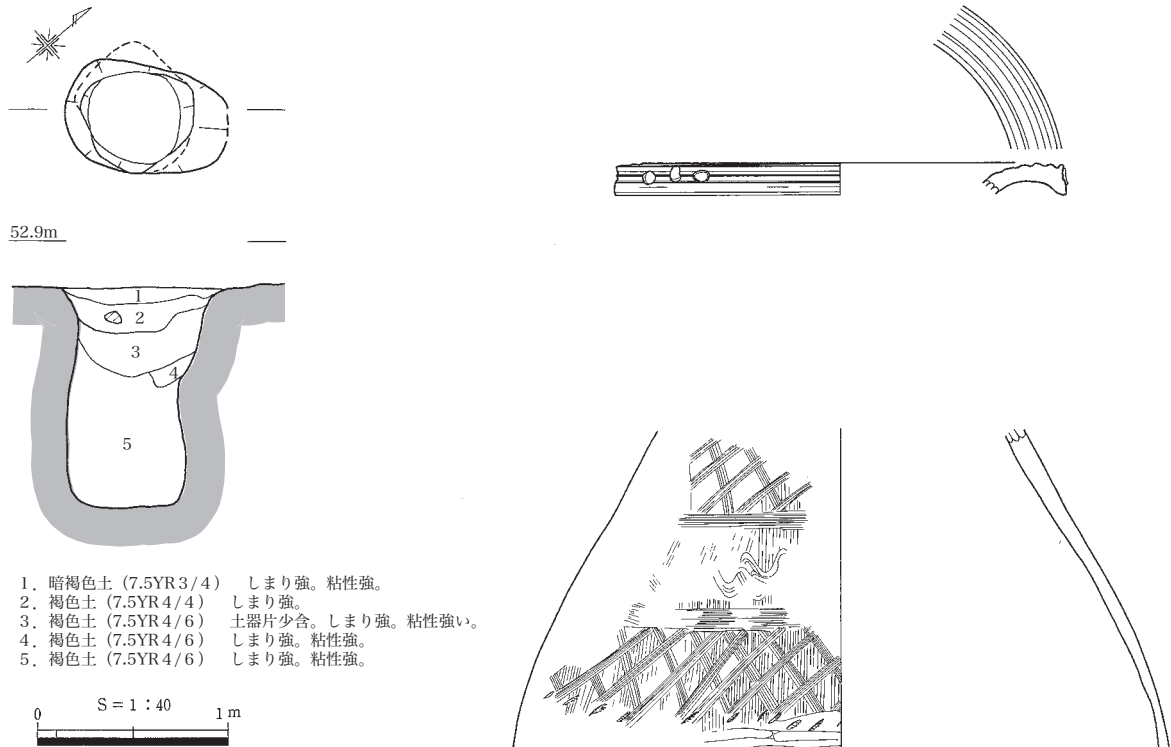


写真8 SK16・33・36・53出土礫・石器



- 1. 暗褐色土 (7.5YR3/4) しまり強。粘性強。
- 2. 褐色土 (7.5YR4/4) しまり強。
- 3. 褐色土 (7.5YR4/6) 土器片少含。しまり強。粘性強い。
- 4. 褐色土 (7.5YR4/6) しまり強。粘性強。
- 5. 褐色土 (7.5YR4/6) しまり強。粘性強。

0 S = 1 : 40 1m

SK16 (第59・60図、写真8、PL. 18)

位置 F7グリッドの、標高約53.2mの緩斜面地にある。

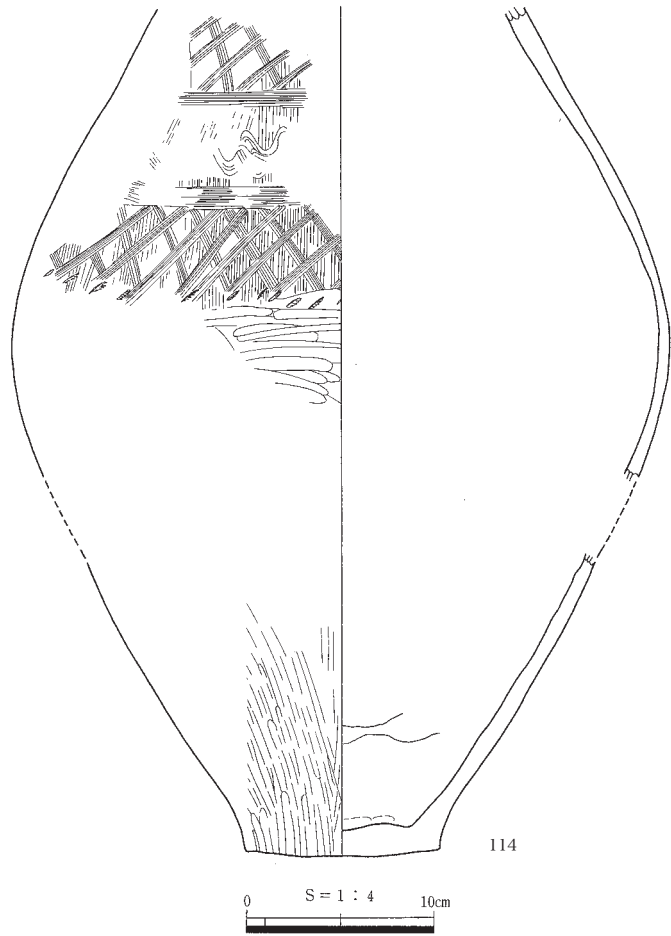
調査の経過 III層上面において、焼土粒と炭化物を含む暗褐色土の不整楕円形プランを検出した。

サブトレンチによって多量の遺物が出土し、ややくびれた下部からさらに広がる形態を確認したため、貯蔵穴の可能性が高いと判断して調査を進めた。

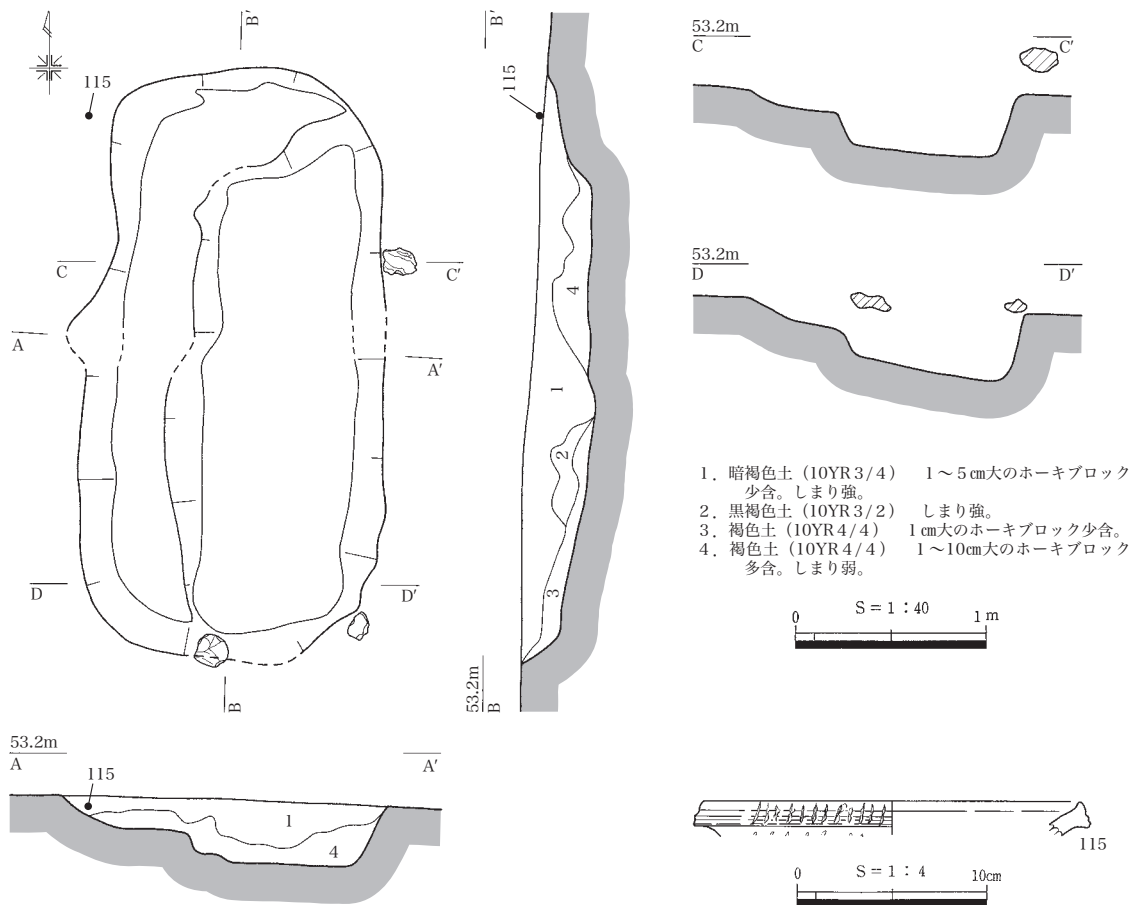
規模と形態 検出規模は開口部で長軸120cm、短軸94cmで、検出面から底面までの深さは約1mである。掘り方断面は中ほどに内側にくびれる部分があり、フラスコ状を呈する。底面は平坦になっており、しまりの良いにぶい褐色を呈する土で、7cmほどの厚さの貼床が施されていた。

開口部北側に径約26cm、深さ約18cmのピットが2基ある。検出面が同じであり、埋土が暗褐色土(Hue10YR3/4)で土坑埋土と同じものであることから、土坑と一連の物である可能性が高い。ピットが存在することから、土坑の開口部を塞ぐ簡易な上屋が存在していた可能性が高い。遺構の性格としては、掘り方断面がフラスコ状を呈することから貯蔵穴が想定される。

埋土と遺物の出土状況 埋土は8層に分層できるが、主に炭化物を含む暗褐色土からなる。遺物は主



第61図 SK17および出土遺物



第62図 SK18および出土遺物

に6、7層に多く含まれており、礫や土器が折り重なるような状態で埋土中層から底面付近にかけて出土している。また、出土した土器は一個体分に復元可能となるものは無く、破片状のものが多く含まれている。こうしたことから、土坑が廃絶された時点から、穴の中に不要となった土器や石器などが投げ入れられ、下半は埋没していったものと思われる。上半の1~5層は遺物が少なく、レンズ上の堆積を示すことから自然堆積によるものと考えられる。

出土遺物 遺物は甕108~111、壺112、113、敲石S59がある。甕、壺はいずれも口縁部に凹線が施される。111は頸部に指頭圧痕貼付突帯を持つ。113は頸部上半に断面三角形の貼付突帯を持つが、肩部付近には浅く凹線をめぐらせている。112は広口壺の口縁部で、頸部上端に刻目を施した突帯を貼り付けて加飾している。113より一回り大きなものとなろう。

時期 出土土器がIV-1様式に比定されることから、弥生時代中期後葉である。

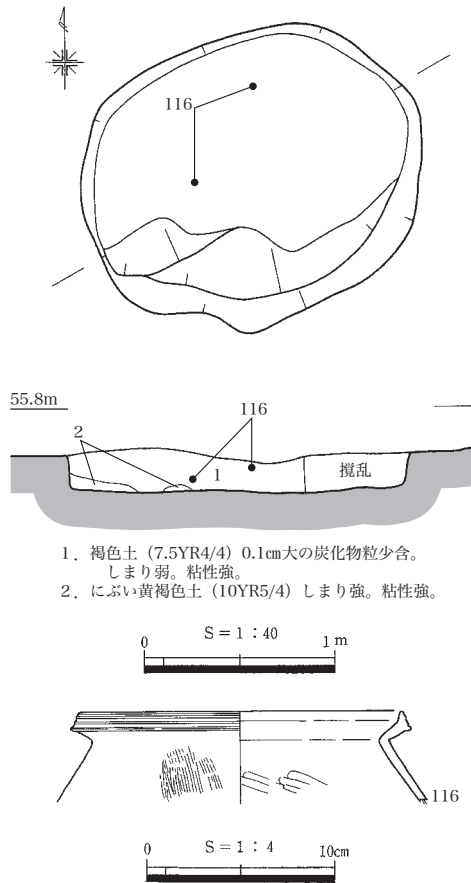
(浅田)

SK17 (第61図、PL.17)

位置 F6グリッド、標高約52.7mの東側谷部に向かってわずかに傾斜する谷頭部にある。SX3の南東側、SK18の北側に位置する。

調査の経過 II層上面で、弥生土器が集中して出土する部分検出した。土器が集中する地点を中心に検出の精査を試みたところ、楕円形のプランを確認したため土坑として調査を行った。

規模と形態 規模は長軸68cm、短軸56cmであり、検出面から底面までの深さは117cmを測る。掘り



1. 褐色土 (7.5YR4/4) 0.1cm大の炭化物粒少含。しまり弱。粘性強。
2. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) しまり強。粘性強。

第63図 SK19および出土遺物

方断面は中ほどでわずかに内側にくびれる部分があり、フラスコ状を呈する。底面はほぼ平らになっている。

出土遺物 遺物は検出面、および3層中から土器片が出土している。壺114は検出面からの出土である。口縁部に3条の凹線、円形浮文を、内面には4条の凹線を施す。胴外面上部には櫛描きの斜格子文、波状文が施される。Ⅲ-3様式に比定されるものである。

時期 出土遺物は検出面、および埋土上層からのもので、遺構に直接伴うものではない。よって出土土器からは遺構の時期を決定することはできないが、遺物の出土状況から弥生時代中期後葉には埋没していたものと考えられる。用途は、その形態から貯蔵穴を想定する。

(浅田)

SK18 (第62図、PL.17)

位置 F7グリッド、標高約52.7mの東側谷部に向かってわずかに傾斜する谷頭部にある。SK17の南側、SK16の北側に位置する。

調査の経過 Ⅱ層上面において、ホーキブロックを含む暗褐色土の長方形プランを検出した。南側と東側に径10～18cmの礫がプランと接する位置で出土しており、墓の可能性を想定しながら調査を行った。

規模と形態 規模は長軸3.1m、短軸1.6mであり、検出面から底面までの深さは最大35cmである。壁面はやや外側に傾斜して立ち上がる。西側から北側にかけて二段掘りになっており、底面の規模は長軸2.5m、短軸0.8mの方形で、やや凹凸がある。

土層断面や底面に小口の痕跡が認められなかったことや底面に凹凸があることから、棺を納めた可能性は無いと考え、土坑と判断した。

出土遺物 遺物は主に1層中から出土している。いずれも小片で、図示できたものは1点だけである。115は甕の口縁部である。2条の凹線後、刻目を施す。内面調整はヨコナデである。出土位置は平面プランの外側であるが、検出の段階で上面が掘り下がっていること、壁面が外側に向かって立ち上がることを踏まえると、平面プランは少し広がることが予想されるため、遺構に伴うものとして扱った。

時期 出土遺物がⅣ様式の範疇に収まるものであることから、弥生時代中期後葉を想定する。用途は不明である。

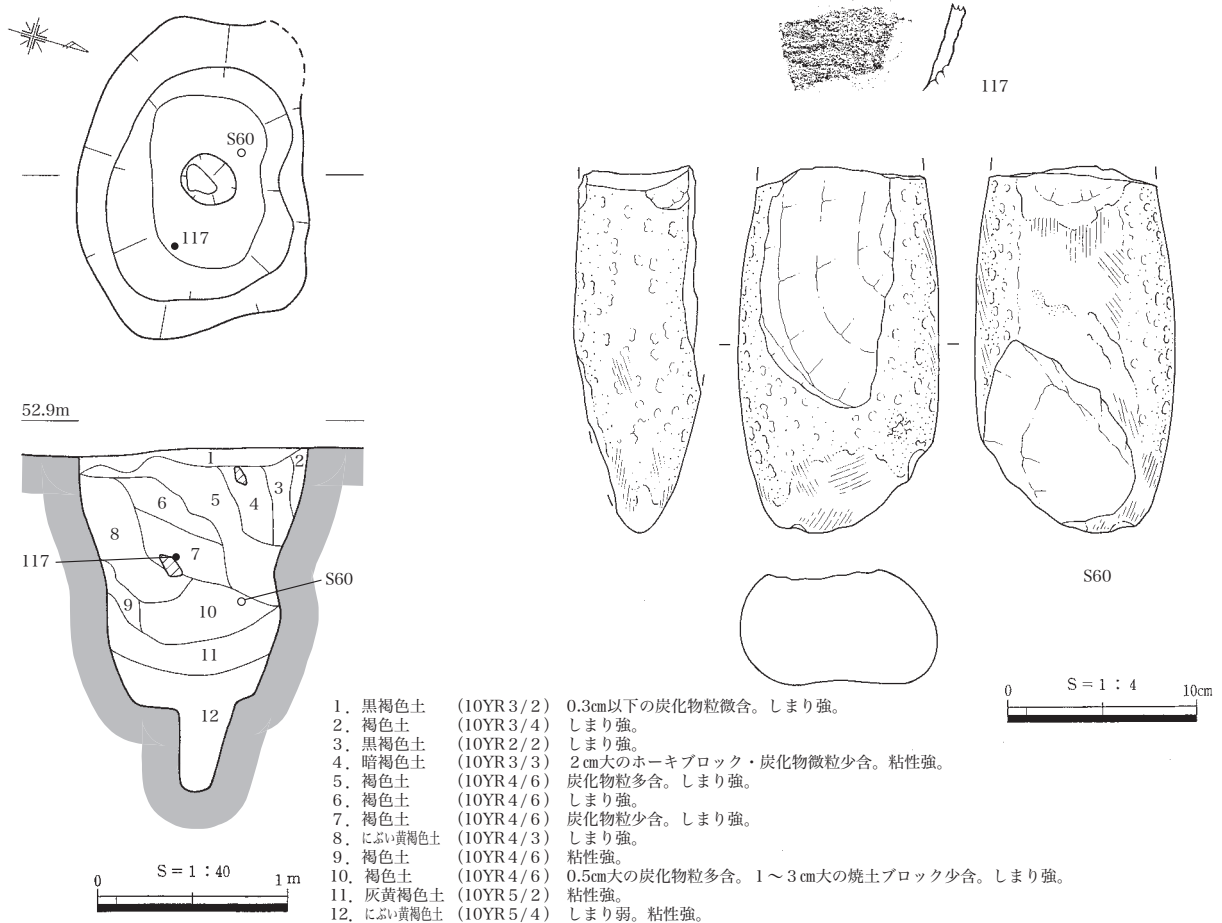
(浅田)

SK19 (第63図、PL.17・50)

位置 G9グリッド、標高55.5mの緩斜面部に位置し、北側2.6mにSI7が近接する。

規模と形態 平面形は長軸1.9m、短軸1.5mの不整楕円形を呈す浅い皿状の土坑で、南東壁は緩やかに立ち上がる。検出面からの深さは最大で19cmを測る。

埋土と遺物の出土状況 埋土は褐色土を主体とし、1層から小片化した土器が出土した。土器は散在



第64図 SK20および出土遺物

状態であったため、流れ込みであろう。甕 116 は口縁部に 3 条の凹線をめぐらせ、外面ハケ、内面ヘラミガキで調整している。

時期 本遺構の時期は弥生時代中期後葉 (IV - 1) と考える。

(高尾)

SK20 (第 64 図、PL. 19)

位置 E5 グリッド、標高約 52.8 m の平坦地にあり、SK13 と北西側で接する位置にある。SK13 を切る。

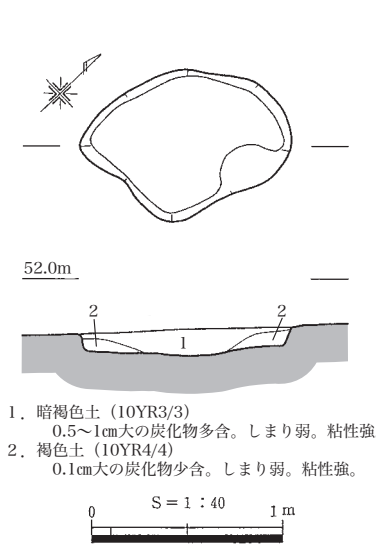
調査の経過 調査当初は、SK13 として掘り下げていたが、ひとつの土坑としては規模が大きいことから、土層断面の精査を行い 2 つの土坑が重複していることを確認した。また、東側は町の試掘トレンチにより削平されていたため上端は部分的に掘り下げた形での検出である。

規模と形態 平面形はやや方形を呈する不整楕円形である。検出規模は長軸 1.6 m、短軸 1.2 m であり、検出面から底面までの深さは 1.4 m である。底面ほぼ中央に楕円形を呈するピットを有し、その規模は長軸 30 cm、短軸 24 cm、底面からの深さは 44 cm である。



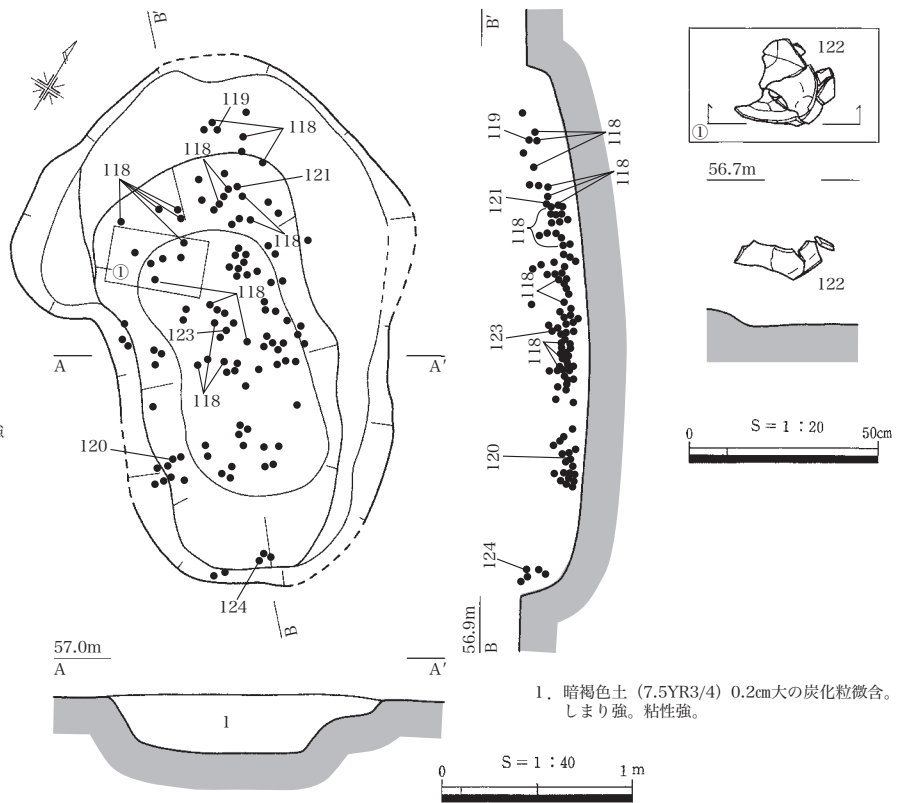
写真9 SK22 甕122出土状況 (東から)

第2節 遺構の調査



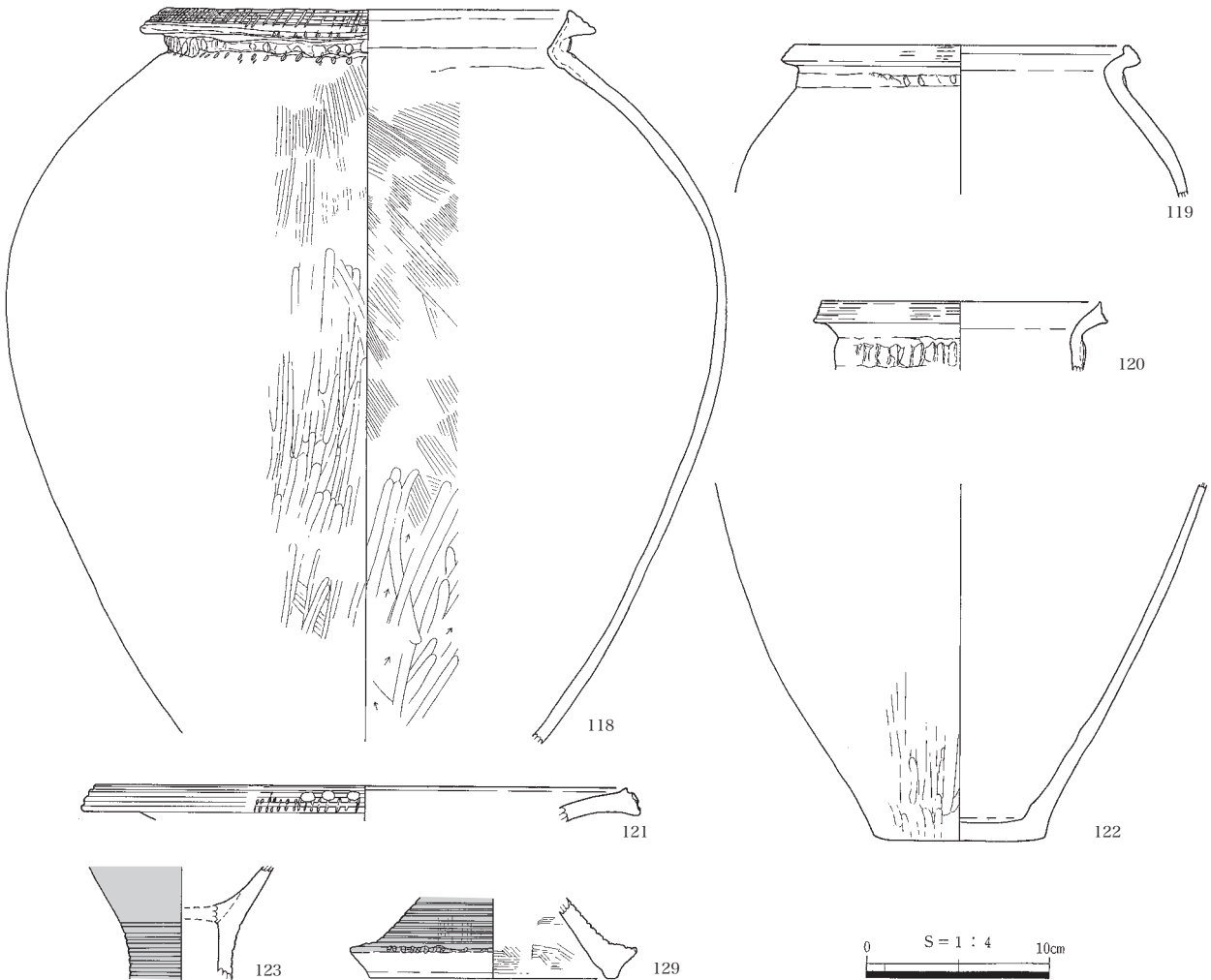
1. 暗褐色土 (10YR3/3)
0.5~1cm大の炭化物多含。しまり弱。粘性強
2. 褐色土 (10YR4/4)
0.1cm大の炭化物少含。しまり弱。粘性強。

第65図 SK21

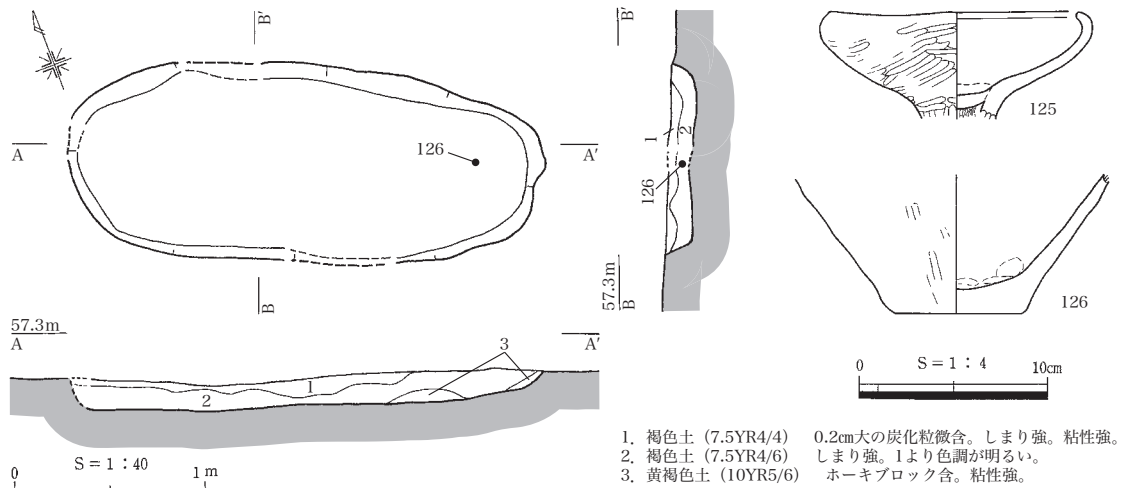


1. 暗褐色土 (7.5YR3/4) 0.2cm大の炭化粒微含。
しまり強。粘性強。

第66図 SK22

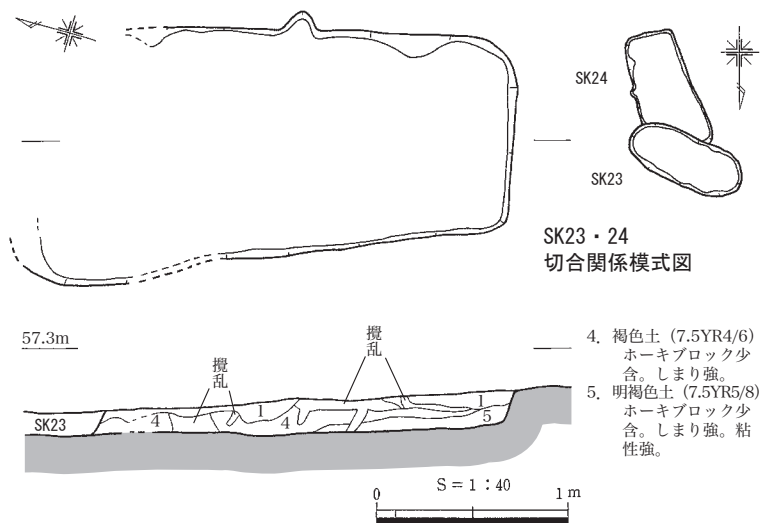


第67図 SK22出土遺物



第68図 SK23および出土遺物

形態的特徴を見ると落とし穴の可能性が考えられるが、当遺構の周辺には住居や木棺墓などが点在し、集落域の様相が強い。こうした中で、狩猟を目的とする遺構の存在を想定するのは難しい。よってここでは、周辺の住居に伴う貯蔵穴としての機能を想定する。底面ピットは貯蔵穴の開口部を覆っていたと思われる上屋を支えるための柱穴の可能性はある。



第69図 SK24

出土遺物 遺物は埋土中層から、縄文土器 117 と石斧 S60 が出土している。117 は深鉢の胴部と思われるもので、外面は粗いナデ調整である。内面は風化のため調整は不明瞭である。これらの遺物は埋没過程に混入したものと考えられる。

時期 SK13 との重複関係から弥生時代中期後葉以降と考えられる。

(浅田)

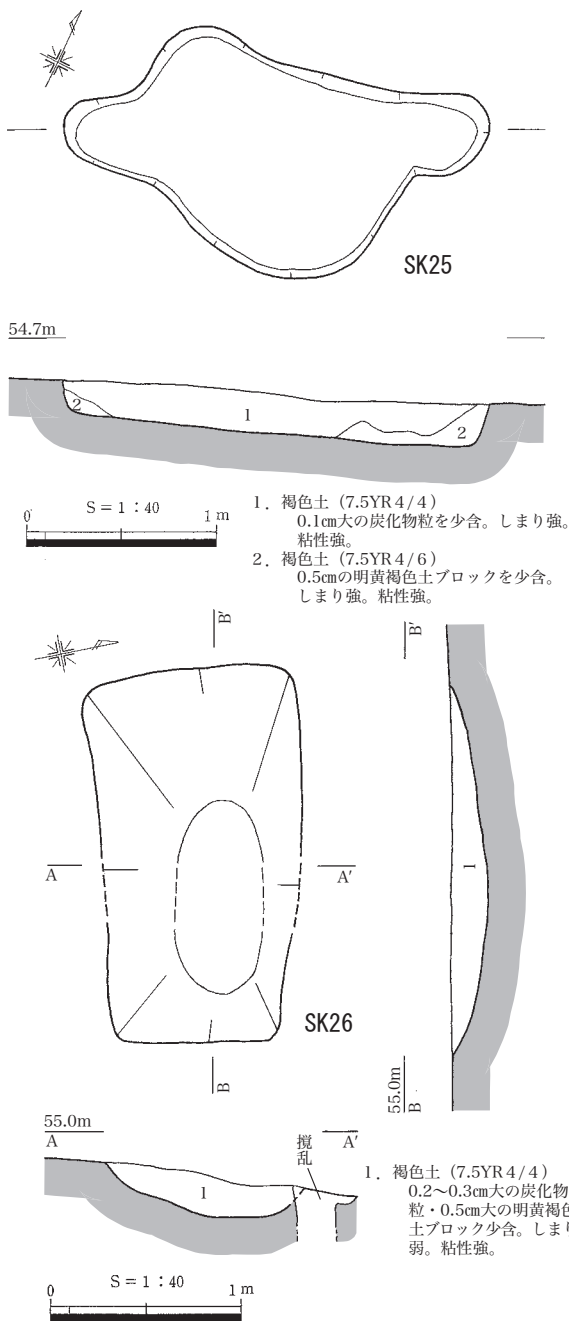
SK21 (第65図)

位置 G4 グリッド、標高 51.8 mの斜面部に位置する。

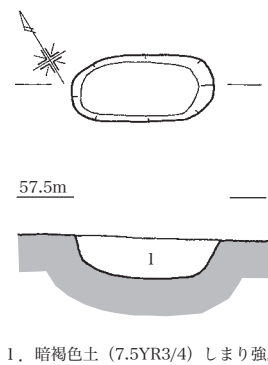
規模と形態 長軸 1.1 m、短軸 0.8 mを測る不整楕円形の浅い土坑で、炭化材片・炭化物を多量に含む暗褐色土が堆積していた。底面に被熱痕跡は無く、炭化材等はこの場所で生成されたものではない。本遺構は同グリッドを中心とする西側斜面部に堆積した褐色土(谷部③-1相当層)中に形成され、II層に由来する埋土によって埋没している。

時期 遺物は出土していないが、堆積状況等からすれば弥生時代中期以降に形成されたものと推測する。近接位置にあり同様の埋土をもつ P22・23 も関連する遺構であろう。

(高尾)



第70図 SK25・26



第71図 SK27

SK22 (第66図、写真9、PL.19)

位置 E11 グリッド、標高約 56.7 m の調査区南側平坦部に位置する。

調査の経過 II層除去後に、土器片と炭化物粒子が集中する部分を検出した。検出プランは明瞭ではなかったが、土器片や炭化物が分布する範囲が長方形状になっていることから、当初は竪穴状遺構と考えて調査を進めた。長軸と短軸の方向にトレンチを設定し掘り下げたところ、掘り方の浅い平面が不整楕円形状を呈する土坑であることが判明した。また、埋土は暗褐色土の単層で底面付近から底面上に多量の土器を包含することを確認した。

規模と形態 検出規模は長軸 2.8 m、短軸 1.9 m であり、検出面から底面までの深さは約 30 cm ほどである。壁面は緩やかに外側に傾斜して立ち上がる。底面は中央に向かって窪む椀状になっている。壁溝、焼土面は確認されなかった。

埋土と遺物の出土状況 遺物は床面上からの出土のものは無く、床面からわずかに浮いた状態のものから、検出面まで見られる。このことから、遺構に直接伴うものではなく、遺構が破棄され埋没が始まりかけたころに、中に投棄されたものとする。

出土遺物 底面付近から、甕の口縁部や底部などが多く出土している。これらの内、図示したものは7点である。118～120は甕である。118、120は頸部に指頭圧痕貼付突帯、119は頸部に刻目貼付突帯をもつものである。ともに口縁部に3～4条の凹線が施される。118は突帯下に指頭圧痕時についた爪痕が残る。121

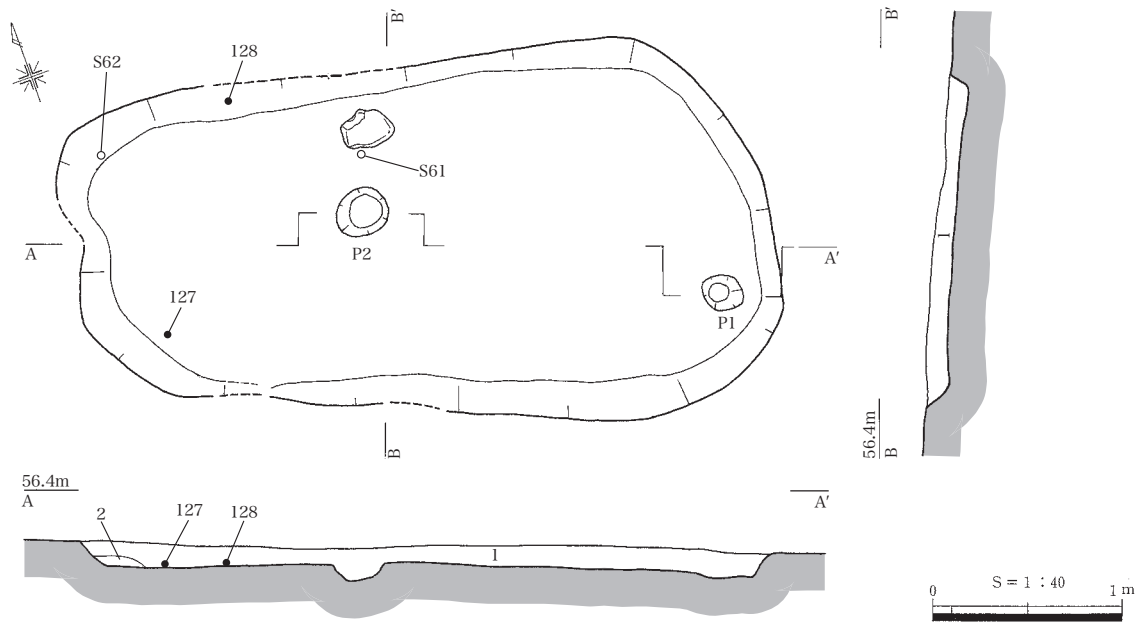
は広口壺の口縁部で、3条の凹線後にキザミを施し、さらに3個1対の円形浮文を施す。123、124は高坏の脚部である。ともに外面に凹線が施される。遺物はいずれも概ねIV-1様式の範疇に収まるものである。

時期 出土遺物から、弥生時代中期後葉である。用途については不明である。

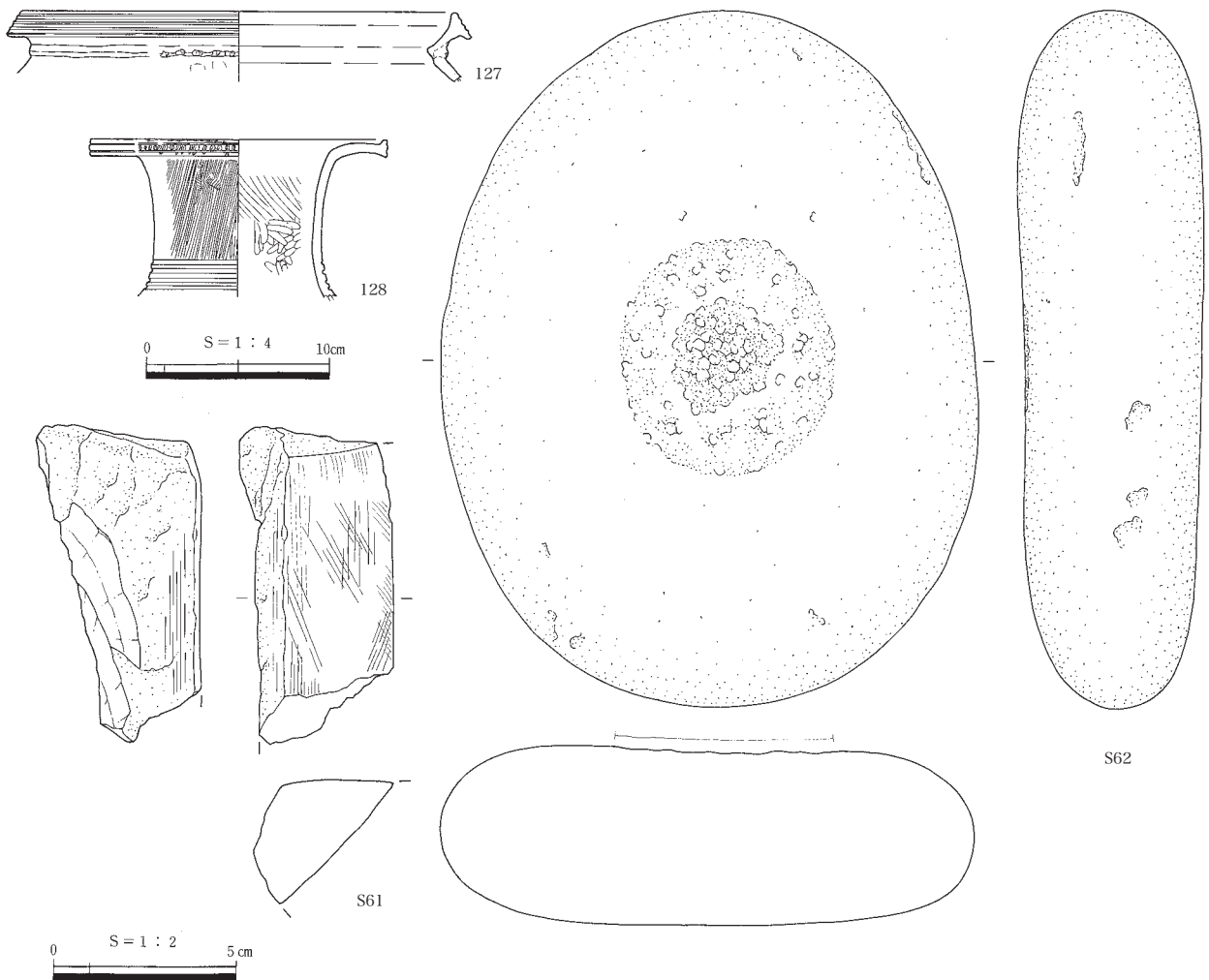
(浅田)

SK23 (第68図、PL.20)

位置 G11 グリッド、標高約 57 m の調査区南端部の平坦部に位置する。SK24 と重複関係にあり、SK24 を切る。



1. 褐色土 (10YR4/6) 0.1cm以下の炭化物粒多含。明黄褐色土が斑状に混じる。しまり強。粘性強。遺物包含。
2. 褐色土 (7.5YR4/6) 1cm大の明黄褐色土ブロック少含。しまり弱。粘性強。



第72図 SK28および出土遺物

調査の経過 III層上面において、土器を包含する褐色土の楕円形プランを検出した。

規模と形態 検出規模は長軸 2.5 m、短軸 1.3 m で、検出面から底面までの深さは約 16 cm である。掘り方断面は皿状を呈する。

出土遺物 埋土中から高坏の坏部 125、甕もしくは壺のものと考えられる底部 126 が出土している。125 は口縁がわずかに内湾する浅い椀状の坏をもつ。外面の調整はヘラミガキで、内面脚部上端にはシボリ痕が見られる。坏部底面は円盤充填による。126 は内外面ともに調整は不明であるが、底部には指オサエが認められる。いずれも、その形態的特徴はIV様式のものである。

時期 遺構の時期は、出土した土器から弥生時代中期後葉である。用途については不明である。

(浅田)

SK24 (第 69 図、PL. 20)

位置 G11 グリッド、標高約 57 m の調査区南端の平坦部に位置する。

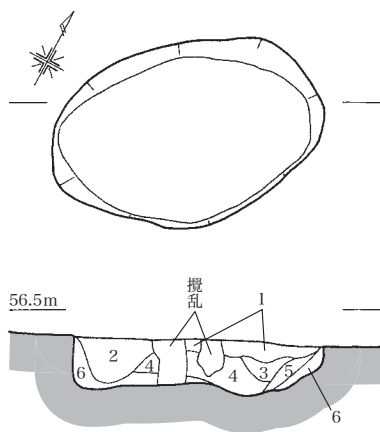
調査の経過 SK23 と重複関係にあり、SK23 に切られる。SK23 と同様、III層上面において炭化物粒を含む褐色土の楕円形プランを検出した。

規模と形態 検出規模は長軸 2.6 m、短軸 1.2 m で、検出面から底面までの深さは約 16 cm である。掘り方断面は方形を呈する。底面はほぼ平坦で、IV層まで掘り込まれている。

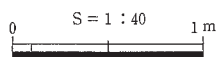
出土遺物 遺物は弥生土器と思われる土器片が数点出土しているが、いずれも小片で図示するには至っていない。

時期 遺構の詳細な時期については出土土器から判断することは難しいが、SK23 との重複関係を考慮すると、弥生時代中期後葉と想定される。用途については不明である。

(浅田)



1. 褐色土 (7.5YR4/4) しまり強。
2. 暗褐色土 (10YR3/4) しまり強。炭化物粒少含。
3. 暗褐色土 (10YR4/6)
4. 褐色土 (10YR4/6) しまり強。粘性強。
5. 褐色土 (7.5YR4/6) ホーキブロック少含。粘性強。
6. 褐色土 (7.5YR4/6) しまり強。粘性強。



第73図 SK29

SK25 (第 70 図)

位置 F8 グリッド、標高 54.4 m の緩斜面部に位置し、西側 0.5 m に P56、南西側 1.6 m に SK26 が近接する。

規模と形態 長軸 2.3 m、短軸 1.4 m のいびつな形状を呈し、検出面からの深さは最大 21 cm を測る。平面形態からすれば、ピットと土坑が切り合うように見えるが、土層の所見では切合関係等は認められなかった。

埋土 壁体崩落土の 2 層が形成された後、自然堆積による 1 層が覆う。

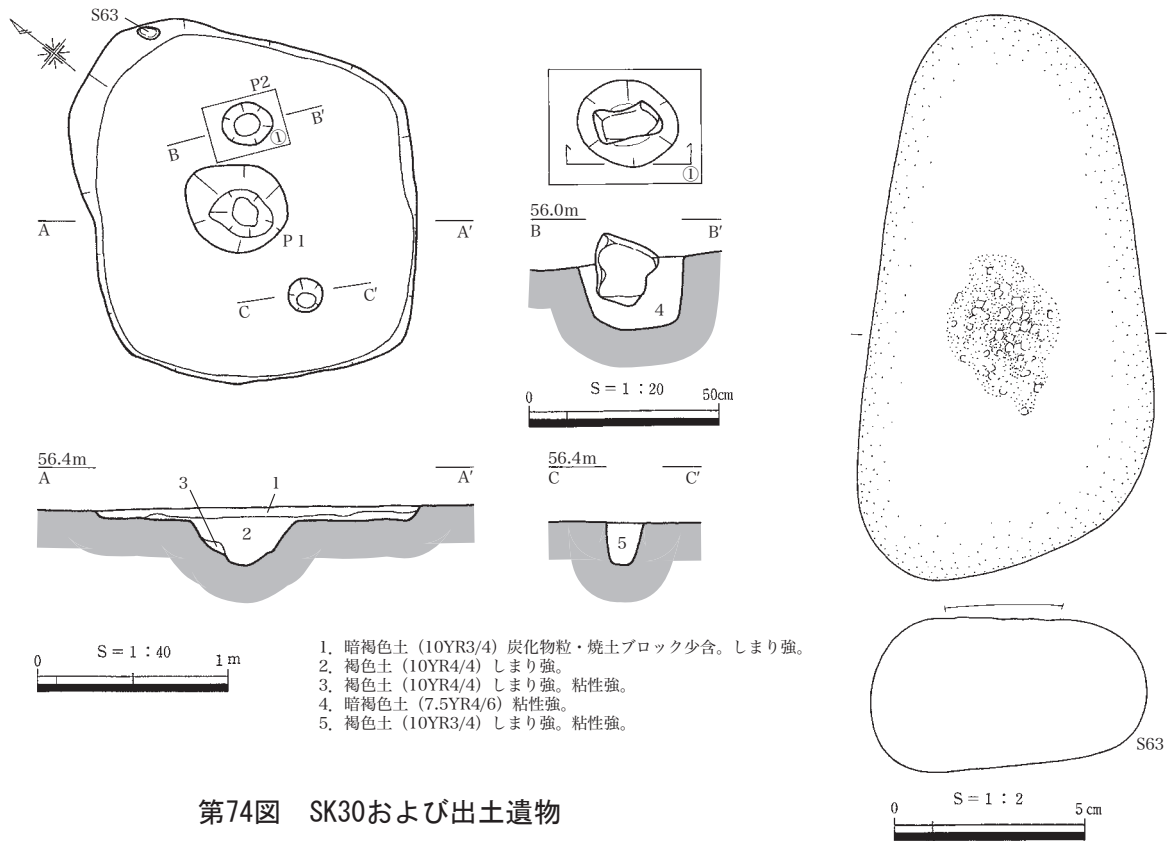
時期 遺物は出土しておらず、時期・性格とも不明である。

(高尾)

SK26 (第 71 図、PL. 20)

位置 F8 グリッド、標高 54.8 m の緩斜面部に位置し、北東側 1.6 m に SK25 が近接する。

規模と形態 検出面での平面形は長軸 2.0 m、短軸 1.1 m の長方



第74図 SK30および出土遺物

形を呈すが、底面は長軸 1.0 m の長楕円形となる。検出段階では平面形等から土坑墓の可能性を考えたが、底面からの立ち上がりは緩やかで、深さも最大で 18 cm と浅いため、墓ではない。

遺物と埋土の状況 埋土は褐色土で、弥生土器と思われる小破片が数点出土したが図化できるものは無い。

時期 周囲の状況からすれば、本遺構の時期は弥生時代中期後葉の可能性が高い。

(高尾)



写真10 SK30出土礫・石器

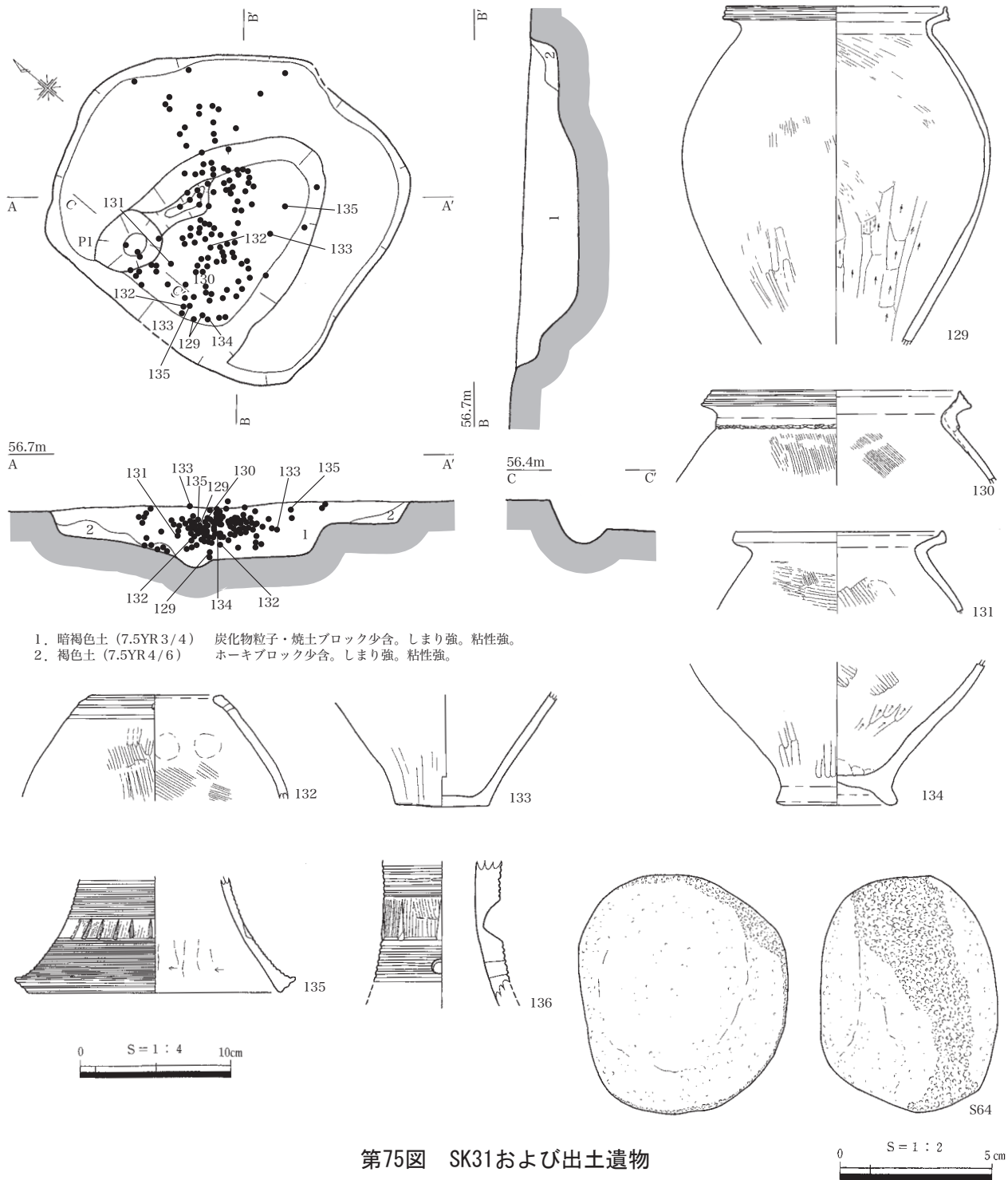
SK27 (第71図、PL. 17)

位置 E12 グリッド、標高約 57.5 m の調査区南端の平坦地にある。SX12 の北側、SK40 の北西側に位置する。E12 ~ 13 グリッドに墓が存在することが考えられ、それに伴って遺構検出のためⅢ層を除去した。

規模と形態 Ⅳ層上面を検出したところで、暗褐色土の楕円形プランを確認した。検出規模は長軸 76 cm、短軸 34 cm であり、検出面から底面までの深さは 22 cm である。

時期 遺物が出土していないため、時期については不明である。用途についても不明である。

(浅田)



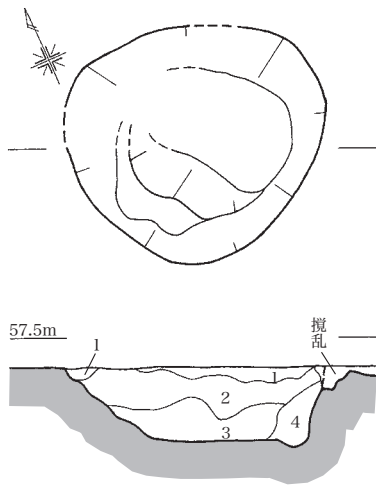
第75図 SK31および出土遺物

SK28 (第72図、PL. 19・52)

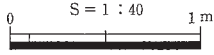
位置 F10 グリッド、標高 56.1 m の尾根平坦面に位置する。

規模と形態 平面形は長軸 3.9 m、短軸 2.0 m を測る不整隅丸長方形を呈す。検出面からの深さは最大でも 12 cm しかなく、底面はほぼ平坦で浅い竪穴状となる。底面にはピットが 2 基存在するが、どちらも皿状で浅く柱穴とは考え難い。

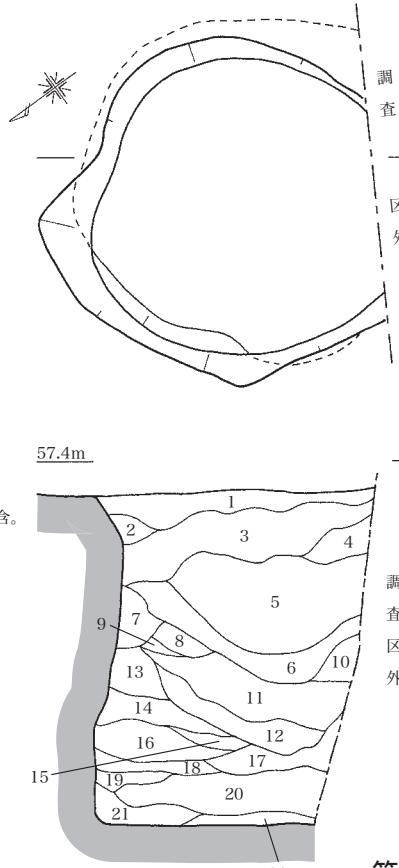
埋土と遺物の出土状況 埋土は 2 層に分かれ、自然堆積によって埋没したとみられる。埋土中に散在した状態で遺物が少量みられ、甕 127 と砥石 S61 は底面直上で、壺 128 と台石 S62 は底面からやや浮いた埋土中で出土している。



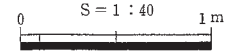
1. 暗褐色土 (7.5YR3/4) 焼土ブロック・炭化物粒微含。粘性強。
2. 褐色土 (7.5YR4/4) しまり強。粘性強。
3. 褐色土 (7.5YR4/6) 粘性強。
4. 明褐色土 (7.5YR5/8) しまり強。粘性強。



第76図 SK32



1. 褐色土 (7.5YR4/4) 0.2cm以下の炭化物・焼土粒少含。しまり強。粘性強。
2. 褐色土 (7.5YR4/6) 0.2cm以下の炭化物・焼土粒少含。しまり強。粘性強。
3. 褐色土 (7.5YR4/4) 0.2cm以下の炭化物・焼土粒少含。しまり弱。粘性強。
4. 褐色土 (7.5YR4/6) 0.1cm以下の炭化物・焼土粒少含。しまり強。粘性強。
5. 褐色土 (7.5YR4/4) 0.1cm以下の炭化物・2cm以下のホーキブロック多含。しまり強。粘性強。
6. 褐色土 (7.5YR4/4) 0.5cm以下の炭化物・6cm以下のホーキブロック少含。しまり強。粘性強。
7. 明褐色土 (7.5YR5/6) ホーキ・V・⑥層が混在する壁体崩落土。2cm以下のホーキブロックが斑状に混じる。しまり弱。粘性強。
8. 褐色土 (7.5YR4/6) 0.2cm以下の炭化物・1cm以下のホーキブロック微含。しまり強。粘性強。
9. 明褐色土 (7.5YR5/8) しまり弱。粘性強。(7に同じもブロック見えないほど細粒化)
10. 明褐色土 (7.5YR5/6) 5cm以下のホーキブロック多含。わずかに炭化物が混じる。しまり強。粘性強。
11. 褐色土 (7.5YR4/4) 1cm以下の炭化物・ホーキブロック・V層ブロック少含。しまり強。粘性強。
12. 褐色土 (7.5YR4/4) 0.5cm以下の炭化物・2cm以下のホーキ・⑥層ブロック、および黄褐色砂礫少含。しまり弱。粘性強。
13. 明褐色土 (7.5YR5/6) しまり強。粘性強。
14. にぶい黄褐色土(7.5YR5/4) V・⑥層が混在。3cm以下のホワイトロームブロック含。しまり強。粘性強。
15. 褐色土 (7.5YR4/6) 0.2cm以下の炭化物微含。しまり弱。粘性強。
16. 明褐色土 (7.5YR5/6) ⑥層を主体とする壁体崩落土。しまり強。粘性強。
17. 褐色土 (7.5YR4/6) ⑥層が斑状に混ざる。0.2cm以下の炭化物少含。しまり強。粘性強。
18. 橙褐色土 (7.5YR6/6) V・⑥層が混在する壁体崩落土。しまり弱。粘性強。
19. 明褐色土 (7.5YR5/6) 16に同じ。しまり弱。粘性強。
20. 褐色土 (7.5YR4/4) 0.5cm以下の炭化物・5cm以下のV・⑥層ブロック少含。しまり強。粘性強。
21. 明褐色土 (7.5YR5/6) ⑥層・明黄褐色土が混在する壁体崩落土。細粒化。
22. 褐色土 (7.5YR4/4) 0.5cm以下の炭化物・1cm以下の⑥層ブロック少含。しまり強。粘性強。



第77図 SK33

出土遺物 127は断面T字状の口縁に4条の凹線をめぐらせ、浅い刻目を入れた突帯を貼り付けた後で口縁をのせ、上から強くナデつけている。128は口縁部を水平方向に引きのばすように拡張した大口壺で、口縁外面に2条の凹線をめぐらせた後、刻目を施す。頸部には凹線をめぐらせる。S62は中央部に敲打痕が集中し、わずかにくぼむ。

時期 本遺構の時期は弥生時代中期後葉(IV-1～2)と考える。(高尾)

SK29 (第73図、PL.20)

位置 E11グリッド、標高57.0mの平坦面に位置し、東側2.4mにSK47が近接する。

規模と形態 平面形は長軸1.5m、短軸1.0mの不整楕円形で、検出面からの深さは最大26cmを測る。埋土は粘性が強くしまりのよい褐色土を主体とする。

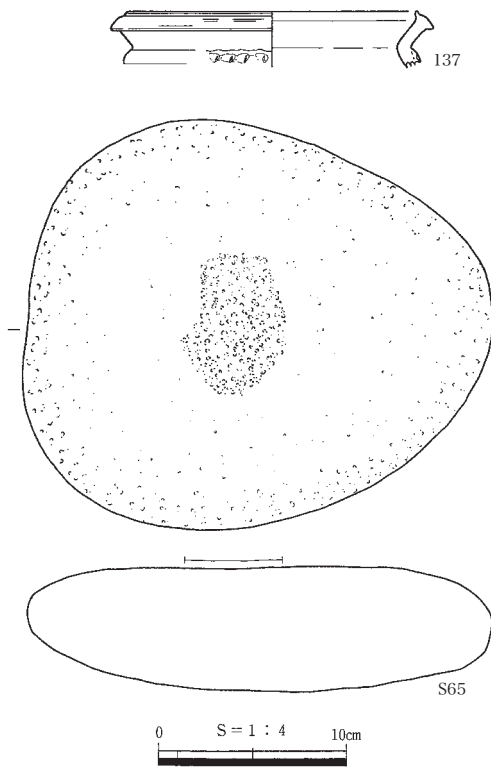
時期 遺物は出土しておらず時期比定は困難だが、埋土および周囲の状況から弥生時代中期後葉の遺構である可能性が高い。(高尾)

SK30 (第74図、写真10、PL.20)

位置 D10グリッド、標高56.2mの平坦地にあり、SK45の南東側に位置する。

調査の経過 III層上面において、炭化物粒子と焼土粒を含む暗褐色土の方形プランを検出した。トレンチ(A-A')を設定して掘り下げたところ、壁面の立ち上がりと播鉢状の掘り方を呈するP1を確認した。このことから竪穴状の土坑として調査を行った。

規模と形態 検出規模は、一辺が約1.8mの方形で、検出面から底面までの深さは約10cmである。埋土は主にしまりのよい暗褐色土と褐色土の2層からなる。底面上でP2、P3を検出した。P2の規模



第78図 SK33出土遺物

は径 27 cm、深さ 22 cm である。ピット内に据え置かれるように、一部床面上に突き出す状態で幅 8 cm、長さ 15 cm の直方体状の礫が出土している (PL. 20-4)。P3 は径 19 cm、深さ 29 cm の大きさで、その位置から柱穴と考えられる。焼土面や壁溝は確認されなかった。P1 は P2、P3 の中間にあり、また底面のほぼ中央に位置することから中央ピットが想定される。

出土遺物 北側の壁面近くから敲石 S63 が出土している。P2 で出土した礫はその出土の状況から作業台として S63 と共に使用された可能性を考えたが、ピット内の礫には顕著な使用痕は認められなかった。また、底面上においても作業に伴う遺物は認められなかった。よって P2 も柱穴であったことが想定され、遺構が廃棄され柱が抜き去られた後に、埋没に伴ってピット内に礫が落ち込んだ、あるいは意図的に入れられたことが考えられる。しかし、ピット内の礫が意図的に据え置かれたものとするれば、礫の出土状況から何かしらの作業が行われていたことも十分に考えられる。

埋土中からは礫石器のほかにも弥生土器片が数点出土している。しかしいずれも小片であり、図化には至らなかった。

時期 出土遺物と周囲の状況から、弥生時代中期後葉を想定する。遺構の性格としては、柱穴や中央ピットと思われるピットを有することから、上屋を伴うと想定される

(浅田)

SK31 (第 75 図、PL. 21)

位置 E10 グリッド、標高約 56.2 m の平坦地にあり、SK35 の南東側に位置する。

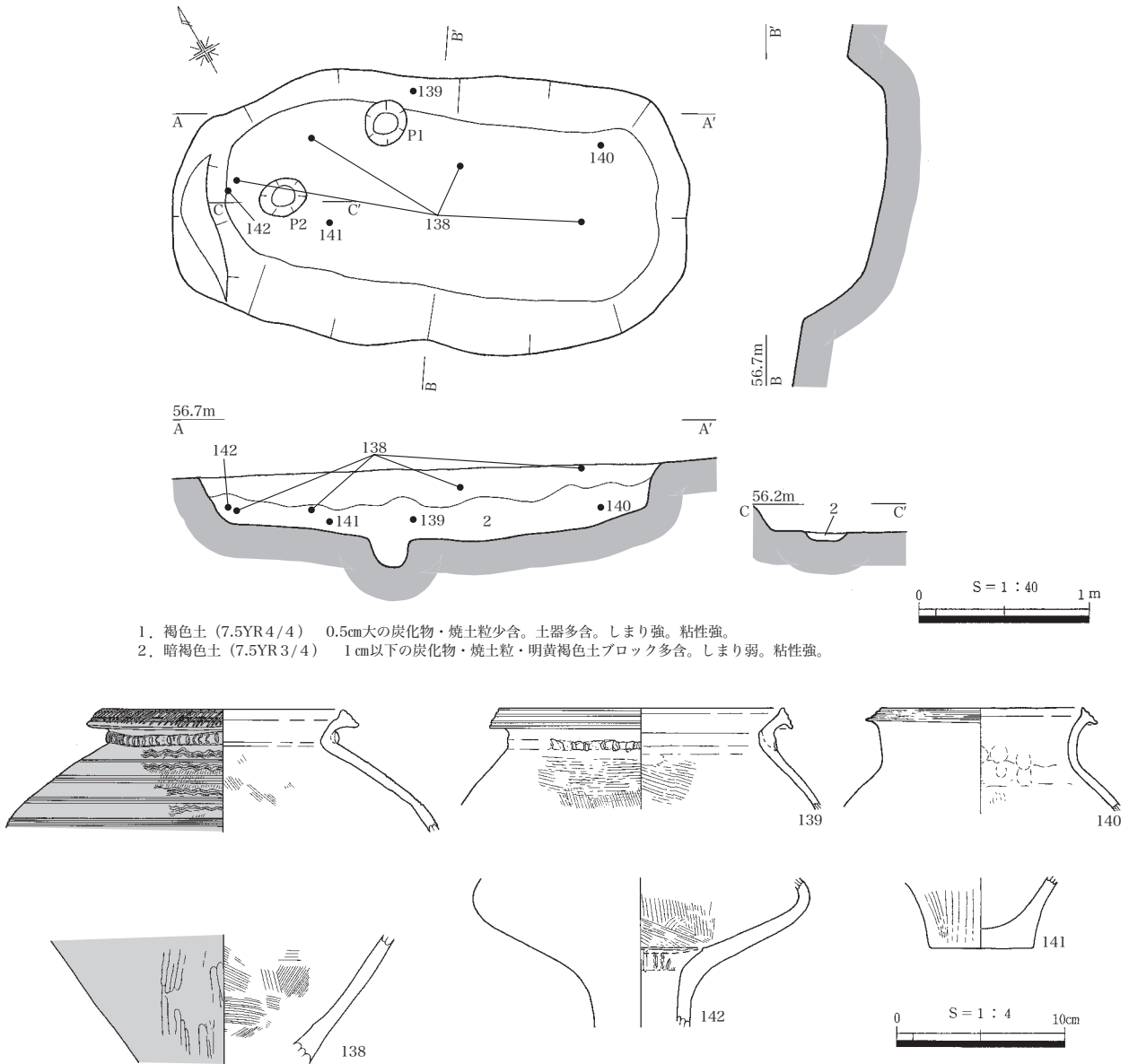
調査の経過 III 層上面において、炭化物粒と焼土ブロックを含む暗褐色土の方形状のプランを検出した。

規模と形態 検出した規模は長軸 2.1 m、短軸 2.1 m を測る。2 段に掘り込まれており、検出面から 1 段目までの深さは 15 ~ 20 cm で 2 段目の深さは検出面から 28 cm である。壁面はわずかに外側に傾斜して立ち上がる。北西側壁面際に P1 がある。規模は径約 40 cm、深さ約 9 cm である。P1 から西側に向かって長さ 45 cm、幅 13 cm、底面からの深さ 2 cm ほどの床溝がのびる。このほかに壁溝や焼土面は、確認することができなかった。

埋土と遺物の出土状況 埋土は主に 1 層としている暗褐色土からなり、この層から多量の土器が出土している。

出土遺物 129 ~ 131、134 は甕である。129、130 はともに口縁部に 3 条の凹線が施され、130 は頸部に刻目貼付突帯を持つ。132 は無頸壺である。口縁部に 3 条の凹線を施した後、穿孔する。134 は外面胴部ヘラミガキ調整、内面は上方向のヘラケズリ調整である。135、136 は高坏の脚部で、ともに 6 ~ 12 条の沈線が施され、未貫通の三角形透孔を有する。S64 は敲石である。

遺物はほとんどが遺構中央付近に集中しており、いずれも床面から浮いた状態で出土している。こ



第79図 SK34および出土遺物

とから遺構廃棄後に投棄されたものと考えた。

遺構の性格としては、ピットを有することから、簡易な上屋構造を持つ堅穴である可能性が考えられるものの、詳細な用途は不明である。

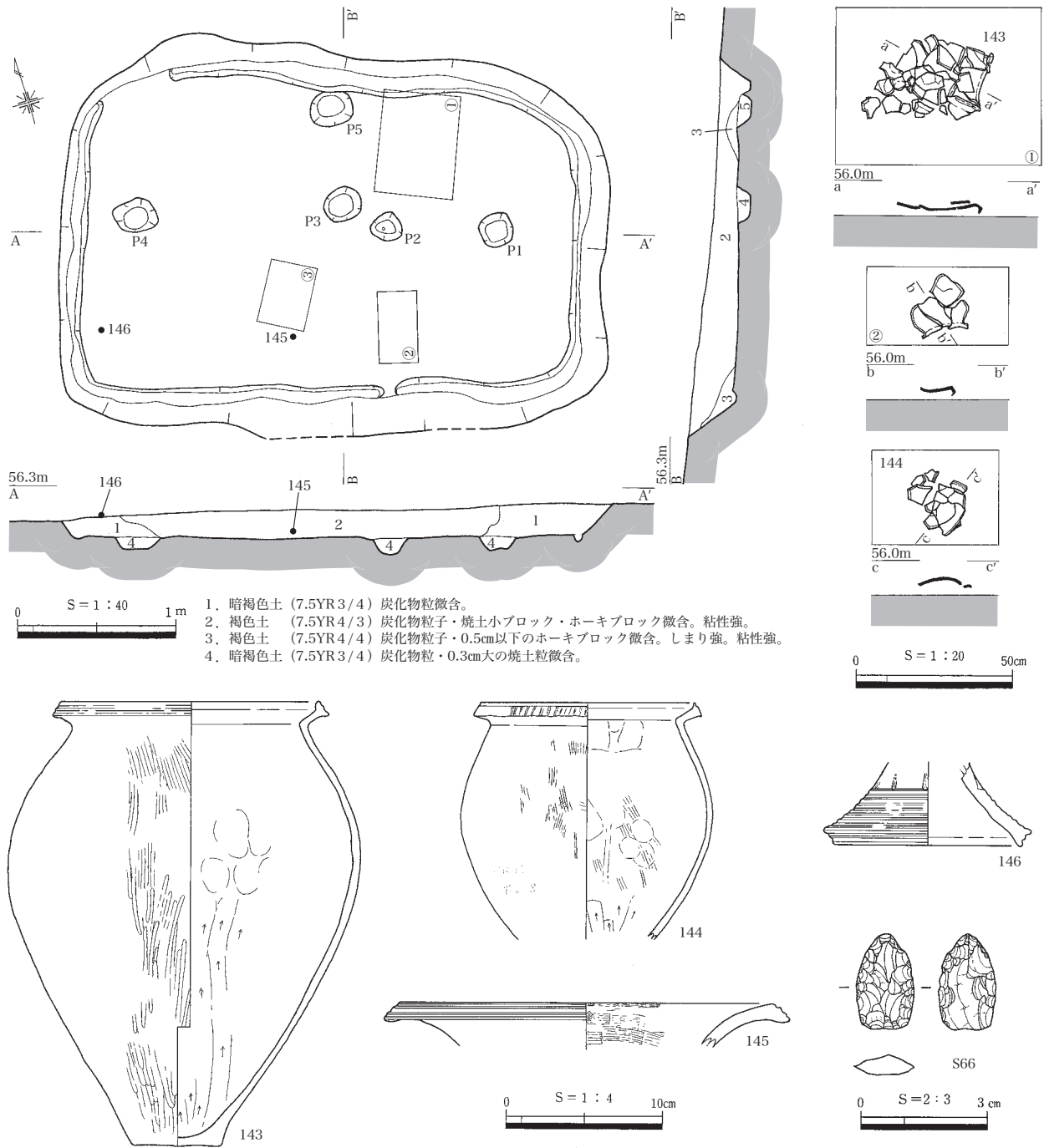
時期 出土遺物がIV-1様式の様相を呈するものであることから、弥生時代中期後葉には廃棄されていたものとする。(浅田)

SK32 (第76図、PL. 20)

位置 E・F12グリッドにまたがる標高57.3mの尾根平坦面に位置し、北西側約1mにSX10・15が近接する。

規模と形態 平面形は長軸1.4m、短軸1.2mの不整形円形を呈し、検出面からの深さは最大42cmを測る。南西側壁面の中位に三日月形の狭い平坦面をもつが全体形は播鉢状となり、底面は0.8×0.5mの楕円形を呈す。

遺物と埋土の状況 埋土は粘性の強い褐色土2・3層を主体とし、東壁際にしまりのよい4層が入る。



第80図 SK35および出土遺物

3層から弥生土器とみられる土器小片が1点出土した。

時期 周囲の状況からすると弥生時代中期後葉の遺構であると推測され、明確な痕跡は認められないが位置的に土坑墓の可能性もあろう。(高尾)

SK33 (第77・78図、写真8、PL.21・52)

位置 F12グリッド、標高57.4mの尾根平坦面に位置し、北西側3.5mにSK23・24が、東側3.5mにSX11・15がある。

規模と形態 南側の一部が調査区境にかかるため全体を完掘できていないが、上縁部・底部とも径約1.9mの不整円形を呈すとみられる。断面形は壁の中位付近がわずかにくびれる袋状となり、検出面からの深さは最大で1.8mを測る。